K131.8
5
11

K131.8

5

11

見本

初等科國語

教師

七

文部省

K131.8
5
11

初等科國語七

教師用

文部省

272
文部省
昭和18年5月3日
贈呈

初等科國語七教師用書目錄

總說

一　國民科指導の精神……七
(1)國民科の意義……七
(2)國民科に於ける教科と科目との關係……九
(3)國民科の教科書とその指導……一一
(4)國民科と他教科及び儀式學校行事との關聯……一六
二　國民科國語指導の精神……一九
(1)國民科國語の意義……一九
(2)國語指導の四分節……二二
分節の基礎……二二
音聲言語指導と文字言語指導……二三
讀み方……二五
綴り方……二八
書き方……三〇
話し方……三一
(3)國語愛護と國語の醇化……三九
三　國民科國語教科書……三九
(1)編纂方針……三九
(2)第三期の國語教科書……四一
初等科國語(卷三―卷八)……四二
教師用書……五八

各說

一　黑龍江の解氷……七三
二　永久王……八二
三　御旗の影……九六
四　敬語の使ひ方……一一四
五　見わたせば……一二八
六　源氏物語……一三五
七　姉……一五五
八　日本海海戰……一六六
九　鎭西八郎爲朝……一八〇
十　晴れ間……一九九
十一　雲のさまざま……二〇七
十二　山の朝……二一九
十三　燕岳に登る……二三〇
十四　北千島の漁場……二五〇
十五　われは海の子……二六一
十六　月光の曲……二六九
十七　いけ花……二八二
十八　ゆかしい心……二九〇
十九　朝顏に……三〇一
二十　古事記……三〇九
二十一　御民われ……三二〇
附錄……三三〇
一　ジャワ風景……三三一
二　ビスマルク諸島……三三五

三　セレベスのゐなか……三三九
四　サラワクの印象……三四二

附錄

新出讀替文字一覽……三四五
運筆順序……三五一

綴り方指導要項……三五四

指導の發展段階……三五四
初等科第六學年……三五五
一　指導要項……三五五
二　指導要項例……三五九
三　參考文題……三六六

話し方指導要項……三七二
指導の發展段階……三七二
初等科第五・六學年指導要項……三七三

總說

一　國民科指導の精神

(1)　國民科の意義

國民科の目的

國民學校は「皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的錬成ヲ爲スヲ以テ」その目的とする。國民科はこの目的を全うするために設けられた教科の一つであつて、特に國體の精華を明らかにし、國民精神を涵養し、皇國の使命を自覺せしめる點に於いて重要な任務を有する。

國體の精華

教育に關する勅語には

朕惟フニ我ガ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深

厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

と仰せられてある。國體の精華を明らかにすることは、とりもなほさず皇國の道を明らかにすることであり、道を體得實踐して億兆一心の實を擧げることである。

國民精神

國民精神は皇國の道に基づいて發揮せられる。しかもそれは、無窮に生々發展する皇國の相を體現して、あらゆるものを包攝する博大な精神である。義勇奉公を中核として活動することは勿論であるが、まだ優にやさしい「もののあはれ」を知る心もそれであり、外來文化を攝取して、これを自家藥籠中のものとなし、獨自の文化を創造展開して行く精神もそれである。

皇國の使命

皇國の使命は肇國の大精神に發源する使命であり、皇國の道を體とし、國民精神の發揮によつて遂行せらるべき使命である。隨つてこの使命は、肇國の事實に基づいて本來道義的であり、皇國の生々發展に卽して歷史的であり、また世界的であるといふことができる。さうした皇國の使命についての自覺を促し、將來の活動に資せしめんとするところに、國民科指導の窮極の目的はある。

(2) 國民科に於ける教科と科目との關係

皇國の道と國民科

皇國の道とは、教育に關する勅語に示し給へる「斯ノ道」にほかならないのであるが、「斯ノ道」を學ぶとすれば、まづ道の教に卽して國民道德を體得し實踐することが、國民科の任務の一重點となる。しかも「斯ノ道」は皇祖皇宗の御遺訓であり、皇祖皇宗の宏遠なる肇國、深厚なる樹德を始め奉り、國史的事實に基づいての道であるから、かうした國史的事實

に、卽して皇國發展の相を明らかにし、皇國の大生命を感得せしめることによつて、皇國の道を學ばしめることが大切であり、ここに國民科教科內容の第二の重點がある。しかも歷史と分つべからざるものはわが國土であり、わが國土國勢を明らかにすることによつて皇國の道を學ぶことが大切である。ここに第三の重點がある。この三重點を通じて學ぶことによつて、始めて古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる「斯ノ道」が體得されるわけであるが、更になほ「斯ノ道」及び「斯ノ道」に基づいて發現する國民性・國民精神・國民文化等は、わが國の言語によつて表現され、理會される場合が極めて多いのであるから、國語の習得もまた國民科の重點となる。

國民科の四科目

卽ち國民科といふ教科は、皇國の道を明らかにし、これを體得實踐する立場から、おのづから右四つの重點を含むのであつて、これがとりもなほさず國民科が修身・國語・國史・地理といふ科目に分化するゆゑんとなるのである。隨つて國民科が四科目に分れることは、在來の小學校に於ける修身・國語・國史・地理が、簡單に國民科の中に束ねられたことを意味するものではなく、むしろ逆に國民科の目的を遂行するための重點として四科目が分化するのであり、あくまでも原理的に一貫して國民的自覺を喚起し、信念に培ふ教科である。

(3) 國民科の教科書とその指導方針

教科書の分化と指導方針

國民科に屬する教科書は、その科目に應じてそれぞれ分身するものであるが、その目的に於いて精神に於いて一致するのは當然であつて、指導に際しては、まづこの點に對する十分な考慮が肝要である。

しかも教科書にはそれぞれの特色があり、教材は多種多樣であるが、しかしどの教科書どの教材を取扱ふにしても、常に大局から見て次の如き指導方針を見失ふことのないやうにしなければならない。

一、皇國に生まれた喜びを感ぜしめ、敬神奉公の眞義を體得せしめること。

一、わが國の歷史・國土が優秀な國民性を育成したゆゑんを知らしめるとともに、わが國文化の特質を明らかにしてその創造發展につとめる精神を養ふこと。

一、他教科と相俟つて、政治・經濟・國防・海洋等に關する事項の教授に留意すること。

これらの條項はいづれも、わが肇國の大精神を堅持し、皇國の使命を自覺せしめんとするところから生まれ來るものである。天壤無窮の皇位を中心とし奉り、一君萬民、君民一體の國家活動に對する信念、正しく明かるい國民生活の展開に對する信念、無限の努力に基づく卓越した國民文化の創造に對する信念を、周到な注意のもとに獲得せしめなければならない。

教材の排列

但し、かくの如き指導目的は一足跳びに達成されるものではない。隨つて國民學校に於いては、教材を兒童心身の發達に即せしめ、その生活の實際並びに生活環境と照應せしめながら、段階を追うて進むものである。即ち教科書は教材を精選しつつ、左の四期にわたつて發生的に組織する。

第一期　初等科第一、二學年
第二期　初等科第三學年
第三期　初等科第四、五、六學年
第四期　高等科第一、二學年

右は國民學校の教科書全般にわたる編纂方針であるが、國民科についていえば、

第一期に於いては、特に兒童生活に於ける躾と國語の初步的練習とを主とし、日常行爲に現れて來る事象について見方、考へ方、並びに實踐を指導し、かつ想像力を豐かならしめるやうにつとめる。「ヨイコドモ」

「ヨミカタ」はこの目的を達成するために編纂された教科書であつて、それらは修身・國語の教科書であるとともに、國史・地理の萌芽を含むものである。しかもこの期の兒童の心情と理會とに卽し、全國共通の兒童生活に取材するとともに、生活暦によつて排列されてゐることも見落すべきではない。

第二期に於いては、生活體驗に對する正しい理會力と發表力とを伸張せしめ、次第に道德的理想構成の方向に向かはしめようとするものである。この時期は兒童前期から兒童後期に移る過渡期として、特に考慮した教科書が編纂され、隨つてそれに應じた取扱が考慮さるべきである。

第三期に於いては、兒童を自覺的ならしめることに重點を置いてゐる。隨つて實踐の能力を助長するとともに、道德的判斷が十分に行はれるやうに輔導しなければならない。この時期に至つて、國民科は修身・國語のほかに、鄕土愛の念を涵養し、鄕土の觀察をなさしめるのであるが、同時にまた國史・地理の二科目を分化せしめ、それに應じた教科書を提出する。

第四期に於いては、第三期に至るまでの基礎的な錬成の上に、東亞の情勢並びに世界の動向を知らしめて、ますます國體の精華を明らかにし、大國民たるの資質に培ふものである。

第三期の教科書

兒童の理知的方面の著しい進展に鑑み、この期の教科書は全般的に、教材の排列を次第に整備して系統的ならしめるやうに編纂される。隨つてこの期以降、各科目の教科書は、その教科の目的に卽する限りに於いて、やうやく獨自の體系を以て編纂されることになる。

國民科教科書は、この期に於いて、專ら兒童の自覺を促し、道德的判斷及び實踐の能力を助長する一面に、やうやく深まつて行く兒童の情意的方面を、男女その他種々の特質に應じて陶冶し、情意を洗煉し、發表を多面的ならしめることを考慮して編纂する。卽ち「初等科修身」は專ら

前者を擔當し、「初等科國語」は多分に後者を擔當する。更にこの期の最初に「鄕土の觀察」が分身して、鄕土を國史・地理未分化の立場から實地に觀察させ、鄕土愛の精神に培ふとともに、國史・地理學習の基礎たらしめ、やがて第五學年から「初等科國史」「初等科地理」に分化して、一は主として史實の展開に卽して編纂體系を立て、一は國土國勢の理會に適合する教材系統を定めて編纂する。かくして分化した修身・國語・國史・地理の教科書は、相携へて國體の精華を明らかにし、國民精神を涵養し、皇國の使命の自覺に培ふことをめざしつつ、第三期を以て一應の段落とするやうに編纂される。

(4) 國民科と他教科及び儀式學校行事との關聯

理數科との關聯

國民科は皇國の道を明らかにし、國民的自覺信念に培ひ、實踐せしめることを目的とする。隨つて皇國の新たなる伸張を意圖する限り、國民科は同時に科學の重要性の理會と、文化創造の任務を自覺せしめるものでなければならない。その點全く理數科に於ける合理創造の精神の涵養と軌を一にする。また理數科的な考察・處理を重んずる生活態度の養成と、自然の觀察への契機を與へる點で、極めて密接な關聯を有するものである。

體錬科との關聯

體錬科とは保健衞生に關する指導によつて堅く結びついてゐるが、心身一體の境地をめざす國民學校教育としては、同時に、獻身奉公・規律・協同・服從・公明正大の精神を涵養するとか、體錬に關する禮法の修練を基礎づけるとか、武道精神を鼓吹するとか、體錬科に於ける修練と不可分の關聯にある。

藝能科との關聯

國民科は國民精神の涵養を意圖するものであるが、その中には當然

國民的情操を醇化し、高雅な趣味を涵養することを含んでゐる。隨つて藝能科ともまた不可分である。特に表現鑑賞の能力に培ひ、家庭生活の理會、婦德の涵養を期すること等、藝能科教育のめざすところと離るべからざるものがある。

實業科との關聯

實業科は一面に於いて、國民科の精神を實生活に具現することを意圖する教科である。特に職分を通じて公に奉ずるの精神を養ひ、產業の國家的使命を自覺せしめ、海外發展の素地に培ふ等、國民科に於ける指導はそのまま實業科に於いて擴充せられるわけである。

儀式學校行事との關聯

儀式行事等に對してその本義並びに由來を明らかにし、禮法を修練し、生活體驗を發表し整理する等、國民科の分擔するところは極めて重大である。

二　國民科國語指導の精神

(1)　國民科國語の意義

國民學校令施行規則第四條に

「國民科國語ハ日常ノ國語ヲ習得セシメ其ノ理會力ト發表力トヲ養ヒ國民的思考感動ヲ通ジテ國民精神ヲ涵養スルモノトス」

とある。國民學校に於ける國語指導の範圍、方法、目的の三者がこの中に要約されてある。

「日常ノ國語」とは、日常生活に使用する國語の意義で、特殊專門乃至高尙な國語に對し、ここに國民學校教育としての限度が示してある。「日常ノ國語」は換言すれば普通の國語である。もちろん生活言語としての生きた國語を基礎とするが、といつて方言訛語や蕪雜野卑な言語を含むもの、

ではない。それらは教育的立場から當然矯正醇化さるべきものであり、どこまでも醇正な國語を對象とすべきものである。更に「日常ノ」といつたからとて、單にわれわれの日常の話しことば及びそれを基礎とする口語文に限るわけでなく、普通の文語やある程度の古典語をさへ含んでゐる。これを要するに「日常ノ國語」とは、普通の國民生活に必須であり、基本的規準的な國語を意味するものである。

日常生活に使用する國語には、いはゆる話しことばとしての音聲言語と、文字に書き表す文字言語とがあり、國民學校に於ける國語指導は、この兩者にわたつての理會力發表力を養はなければならない。即ちその理會力は、讀むこと、聽くことによる理會力であり、その發表力は、話すこと、書くこと、綴ることによる發表力であつて、ここに國語指導が「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」等に分節する基礎がある。

國語を指導する者は、豫め國語の本質を見定めておくことが大切である。

言語を單に思想傳達の道具とする考へ方は、極めて通俗的な言語觀であるが、これがためにしばしば教育上の過誤を來たすことがある。なるほど言語を結果からのみ見れば、一種の符徴であり、道具である。しかし言語によつて發表される思想は、元來言語を通して考へられ、感じられた所産である。換言すれば、われわれは言語を通して思考し、感動して思想を構成するのである。思想と言語とが紙の表裏の如く一體不可分であるといふ理由はここに存する。これを國語についていへば、われわれ日本人は、國語を通して考へ、感じ、思想を構成する。われわれの思考なり、感動なり、思想なりは、どこまでも國民共有——祖先傳來の國語と離るべからざるものである。さうしてここに國語指導の大切な鍵が祕められてゐるのである。

即ち國語指導の第一義諦は、國語そのものと分つべからざる國民的思考感動を通じて國民精神を涵養することにある。換言すれば、國語は國初以來國民がなし來たつた思考感動の結晶體であり、國語指導は、この思

考感動と一體たらしめることによつて、國民精神を啓培することにあるのである。

言語を思想交換の具とのみ見る者は、ややもすれば言語そのものを形式としてこれを輕視し、言語發表の題目たる材料を內容と考へてこれを尊重する結果、言語指導をして恰も實物そのものの指導の如き觀を呈せしめる。もとより實物そのものの指導は教育上大切なことではあるが、少くとも國語指導に於いては言語が主であり、實物は客であつて、この主客を顚倒するに至つては、既に國語指導は存在しないといはなければならない。

(2) 國語指導の四分節

分節の基礎

國語に音聲言語と文字言語の兩面がある以上、國語指導はこの兩者にかけての理會力發表力を養はなければならない。即ち音聲言語の指導には「話し方」「聽き方」が、文字言語の指導には「讀み方」「書き方」「綴り方」が分節し得るゆゑんである。但し實際問題として考へれば、「聽き方」は「話し方」の一面として相卽するのであるから、「聽き方」は「話し方」に包含するものとして、「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」の四つが國民科國語に於いて取立てられたのである。

音聲言語指導と文字言語指導

在來「話し方」は、國語指導の一分節として明らかに認識されてゐなかつた。ためにわが國語指導は、ややもすると文字言語に限られがちであり、ここに國語指導の弱點があつたと考へられる。國民科國語に於いて新たに「話し方」が拾ひ上げられ、表面におし出されたのは、大に注意すべきことである。言語の發生的見地からすれば、いふまでもなく音聲言語が文字言語に先んじて出現し、音聲言語の地盤の上に文字言語が發達したの

である。隨つて文字言語としての國語指導を徹底するためにも、その地盤たる音聲言語としての國語が正しく豐かに培はれることが大切であつて、そこに「話し方」の重要性がある。

しかし、それかといつて、國語指導の窮極の目標が音聲言語にあるかの如く考へるのは、早計であり誤りである。殊に國内の兒童を相手とする國語指導は、國語を外國語として敎へる日本語敎授と、その出發點に於いて趣を異にする。學齡兒童は既に家庭なり社會なりから音聲言語を學び、數千の語彙をもつてをり、彼等の生活に必要な程度に於いてそれを自在に驅使してゐる。國内に於ける音聲言語の指導は、兒童のかうした生活言語を基礎として、次第にこれを醇化し、發音・語法を適確ならしめ、進んでは音聲言語そのものを高めて行くことにある。さうして、かうした役目は、むしろ文字言語の習得によつて果されることが決して少くないのである。今日國内に於いて用ひられる話しことばが、文字言語によつて統一され、醇化され、高度化されて行くのと同じやうに、兒童の言語もまた文字言語の習得によつて統一醇化され、高度化されて行くのである。ただ文字言語のみによる敎育は、ややもすれば音聲言語の重要性を閑却し、その修練を等閑に附する結果、文字言語と音聲言語との分裂を來たし、文字言語は陶冶されながら、音聲言語は野卑な方言・訛語のままに放置される。その結果一般社會の音聲言語をして健全な發達をなさしめないで終ることになる。故に國語指導に於ける音聲言語・文字言語の指導は、互に相倚り相俟つてその効果を全うすべきものであることを忘れてはならない。

讀み方

「讀み方」は在來國語指導の主體であつたが、今後といへどもその重要性は決して變らないはずである。いはば「讀み方」は、國語指導の中核であり、その縮圖である。卽ち「讀み方」は、單に「讀むことばかりでなく、書くこと、話すことをそれ自體に包含してをり、隨つて「書き方」「話し方」及び「綴り方」と

密接不可分の關係をもつからである。

言語・文章は思考感動と不可分であり、それ自體生命的な存在である。正しく讀むことは、結局文字を通じてこの思考感動と一體になることであるが、それが操作としては、まづ、正しい發音・抑揚による音感から出發して、言語の意味・語感に沒入しなくてはならない。なほ、讀むといふことは、文字の正しい發聲を出發點としていふのであるが、進んだ階梯に於いては、發聲段階を通過した默讀をも含むことはいふまでもない。

「讀み方」は、要するに正しく讀む力を養ふことを目標とするものではあるが、それがためには單に讀むことばかりでなく、種々の操作が必要である。殊に年少の兒童に對しては、教材に卽して種々の言語活動をさせることが、一面には意味感情に徹して讀みを深からしめるゆゑんであるとともに、一面には音聲言語の基礎練習をなさしめることになるのであるから、あるひは挿畫(掛圖)や文章について話合をさせるとか、あるひは文章を暗誦させ、またこれを劇的に演出させるとかが、「讀み方」に於ける大切な

操作となるわけである。かくの如くして「讀み方」と「話し方」とは指導の實際に於いて相卽一致することが考へられる。

更に書くこともまた「讀み方」の一操作であると考へられる。卽ち文字の劃や筆順を正しく指導し、正確に書寫せしめることに始つて、文字の記憶を確實にし、進んで教材を適當に書取らしめることがそれであつて、ここに實際指導に於ける「讀み方」と「書き方」の相卽がある。この場合注意すべきことは、書くことを徒に機械的ならしめ、言語の取扱を形骸化せしめないことである。書くことは一面に讀む力を深めて行くための作業であり、言語・文章の意義とか構造とかは、讀むこと以上に書くことによつて體得されることが多い。隨つて書寫や書取は單なる文字練習として行ふべきでなく、適當な範圍内で教材の文章を書かせながら理會せしめることが大切である。特に韻文などは全文を書かせることによつて、思考感動に徹せしめることが取扱として望ましいことである。

以上の如く、「讀み方」は、讀むこと、書くこと、話すことを包攝することによ

つて、國語の正しい理會力を養成することを目標とするものであるが、この理會力はやがて言語の發表力として、「話し方」「綴り方」に發揮せしむべきものである。

綴り方

「綴り方」指導は、「讀み方」指導に於いて養はれた文字言語の理會力を基礎として、文字言語の發表力を錬成する國語指導の一分節であつて、「讀み方」と密接な關係をもつものであることはいふまでもないが、しかもまた「綴り方」は、「話し方」と分離すべからざる間柄にある。即ち「綴り方」は、話すことの文字言語化であり、隨つて「話し方」の延長發展と見なすことができる。特に低學年に於ける「綴り方」は「話し方」から出發することが大切であり、ここに指導の實際に於ける「話し方」「綴り方」の相即があることを忘れてはならない。

「綴り方」は、話すことの文字言語化であるが故に、兒童の生活言語は「綴り方」を通しても醇化せらるべきであつて、ここでもまた當然方言訛語を矯正し、醇正な國語による平易明白な文章を作らしめるべきである。

「讀み方」の指導は、もちろん兒童生活を出發點とはするが、年級の進むにしたがつてやうやく高次の國民生活、國民文化を主體とする教材に移行する。これに比べると「綴り方」は大體に於いて兒童生活に終始する國語指導である。いはゆる國語に於ける生活指導は、「讀み方」よりもむしろ「綴り方」に於いていひ得ることである。そこで「綴り方」に於いては、兒童生活そのものを適正に指導することが大切になつて來る。換言すればその生活に即して物の見方、考へ方を適正に指導することが大切なのである。この方面の指導が在來教育的に考慮されなかつたために、綴り方指導はある程度の發達を遂げながらも、不幸にして不健全な思想を釀成しないでもなかつた。殊に文學の自然主義的な傾向から、物の眞を描かしめようとして道を逸脱し、生活の物的方面に捉らはれて理想を失ひ、甚だしきは現實生活の缺陷にさへ兒童の眼を向けさせようとした。「眞」を描く前

にまづ如何なるものを書くべきかを指導する必要があり、「道」に照らして心にうつり行く情意を表さしめることが大切であらう。換言すれば教育の立場から要求される倫理性は、「綴り方」に於いても例外なく要求されるのである。

しかも「綴り方」は國語による生活の表現であるが故に、そこには絶え間なき創造の營みがあることを忘れてはならない。國民學校の教育は兒童の創造力を育成することを念とするものであり、この觀點からすれば、國民科に於いてこれを擔當するものは國語を措いてほかになく、しかもその最も積極的なのが「綴り方」である。即ち兒童の見方、考へ方の指導は、常に新しいものを創造して行くことに努力せしめ、創造力に培ふことが大切なのである。

書き方

「讀み方」「綴り方」に於ける文字書寫の基礎として「書き方」がある。國民學校の制度では在來の「書き方」の一部が「習字」として藝能科におかれたのであるから、國語の「書き方」はほとんど「讀み方」に包攝されることになる。即ち「書き方」は初等科一、二年に於ける文字練習の基礎をなすもので、「讀み方」の書取と相俟つて明確端正に書くことを指導するものである。

話し方

音聲言語指導としての「話し方」の意義と、その重要性については、既に述べたところであるが、しかも「話し方」指導の實際については將來の攻究に俟つべきものが頗る多い。

音聲言語は、文字言語に先だつものであるから、「話し方」は文字言語から離れた自由な立場から指導すべきものとする考は一面の理であつて、實際的效果も甚だ疑問である。國民科國語に於いては、「話し方」の時間を特設しないのを建前とし、「讀み方」「綴り方」等と密接に關聯してその基礎練習を行ひ、更に他科目他教科に於いて常に話し方指導の擴充を期すること

としたのは、專ら音聲言語と文字言語との關係に鑑みて實際指導に意義あらしめ、實績を收めんがためである。

即ちまづ「讀み方」に即して兒童に自由簡明に發表させる機會を與へ、「話す心構を作らせることを手始めとして、一面にはこれをことばの躾や、「讀み方」の文章に即應しつつ次第に醇化し、他面に「綴り方」に延長して文字言語化しつつ統制し、その間絶えず兒童の音聲言語を指導して、不完全より完全へ、正確へ、雅馴へと進展させることを心掛くべきである。在來「話し方」と稱して兒童にお伽話や體驗を語らせ、それが言語發表として不完全であつても何等指導に工夫しないやうな、だらしのない「話し方」でなく、躾を中心とした齒ぎれのよい「話し方」に導くことが大切である。

もとより時宜に應じて時間を特設し、感興深き兒童の共通話題を中心として談話させ、進んでは多數の面前で演述させることも大切であるが、しかも絶えず醇正な言語の指導をすることを忘れてはならない。

「話し方」の半面たる「聽き方」に至つては、更に將來の研究を要するのであるが、まづ人のことばをおちついて聞く習慣を早くから養ひ、進んでは聽いた話の要領を語らせ、感想を述べさせる等、發表の進展と相即してその實際を工夫すべきである。

なほ「話し方」の指導は、常に修身の禮法と結び、禮の精神を言語の上に體現せしめる指導が大切である。他人の感情を害し、他人の非を擧げて快しとするやうな言動を戒むべきはもちろん、口先のみ巧みで、然諾を重んじない氣風をなさしめるのは更に禁物である。如何なる場合に如何にいひ、如何にいふべからざるかをわきまへしめ、進んでは巧みに語る人に對してはよき聽き手となり、ことば少き人に對してはよき話し手となる等の社交上の心構をも一應は指導すべきである。

(3) 國語愛護と國語の醇化

國語が單なる思想發表の具でなく、國民的思考感動の結晶體であり、國民の思想・精神と不可分のものであることを考へるとき、われわれは今更

に國語の重大な意義を知るとともに、如何にこれを尊重愛護しなければならないかを痛感する。隨つて國語指導は、國民をして國語の重大性に目醒めしめ、國語尊重愛護の念を啓培することに徹しなければならなくなつて來る。

國語の尊重愛護は、國語に對する道を闡明し、これを實踐することである。さうして國民學校に於ける國語指導は、まづその實踐によつて國語の規準法則を體得させ、進んで國語の特質を知らしめ、國語を醇化愛護するの念に培ふことを任とすべきである。

即ち國民學校に於いては、まづ發音を正し、抑揚に注意することによつて國語の道の實踐に入らしめる。發音を正しくすることは、在來既に久しく唱道せられ、一部教育の實績に見るべきものがないではないが、國内全般としては前途なほ甚だ遼遠の感がある。抑揚にはいはゆるアクセントをも含めていふのであるが、これが實際指導は更に多難であることを思はせる。しかし今日、國語が東亞共通語として重大な役割をなさんとしつつあるを見れば、その發音なりアクセントなりは、在來の如く方言的に放置せらるべきでなく、話しことばとしての標準語の指導とともに、發音・アクセントの醇化統一を徹底し、以て東亞共通語として、更に進んでは世界語としての文化的資質を備へしめることが今日の急務であり、しかもそれが專ら教育によつて果されることを考へなければならない。

發音・アクセントばかりでなく、國語はなほそれ自體の法則を有する。われわれが日常使用する國語が、この法則に支配されてゐればこそ、われわれはその意義を解し、また誤りなく傳へることができるのである。國語の法則は即ち語法であるが、わが國語の語法は、いはゆる文法として一見簡單であるやうであつて、その實、運用の上に甚だ微妙性があり、それがことばの選びや、いひまはしにまで延長して修辭法に密接なつながりをもつてゐる。國語指導はこの點に鑑み、適宜語法・修辭に注意し、無意識的な使用を意識化し、法則の體得實踐に導くことが大切である。國民學校に於いては、敢へてそれを系統的知的に授けることを期するものでなく、

重點的に指導し、しかも常に實踐的に導くことをなさなければならない。

かくの如くして國語指導は、音聲言語に於ける標準語の使用のみならず、文字言語に於いても常に醇正な國語の使用に留意し、これを他科目他教科の指導に擴充するはもちろん、兒童の生活の上にまで體現させることをめざさなければならない。そこには非常な困難があり、在來の國語指導はこの困難を克服することに於いて甚だ不徹底であつた。しかし試みに臺灣・朝鮮・南洋に於いて正しい國語の普及徹底を期し、その他外地に於いても、この理想の實現に努力しつつある今日であることを思へば、國語指導はまさに在來の墮眠から目醒めなければならない時である。

國語愛護の精神に培ふためには、以上の如き實踐的指導とともに、なほ理念として國語の特質をもある程度認識させることが大切である。

例へばわが國語はこれを歴史的に見るとき、未だかつて外國語に征服されたことのない國語であり、肇國以來連綿として傳はり、發展し來たつた國語である。よし多數の漢語及び漢語法を取り入れ、また近世歐米語

に若干の影響を受けたとはいへ、國語の生命は脈々として連なり、生々發展し來たつたのである。この歴史面から見てわが國語は、一面に包容性に富むとともに、他面に儼として純粋性を保つてゐる。「あはれ」「うれし」「かなし」等、多數のやまとことばが、ほとんど上代そのままの姿で、今日の生活語に用ひられてゐることや、純粋なやまとことばによつて表現される和歌の如き文學が、國初以來傳承され、しかも現代に於いていよいよ盛に行はれてゐることなどにそれを見ることができる。しかもわが國語は前述の如く歴史的に外國語の影響を受けたことも多大であつて、そこに包容性のあることは見のがし得ないところである。この點から往々國語の混亂を來たすのであるが、そこにまたわが國語が世界語として發展すべき素質を藏してゐるとも見ることができるのである。

またわが國語をその表現に即して特質を考へるとき、和歌・俳句の如き短い文の中に豐富な意味感情を盛り得る含蓄性があり、しかもまた物語文學の發達に見る生活の精細な描寫をなし得る描寫性を併せ具へてゐ

ることが、何よりも著しい特徴として考へられる。

かくの如き國語の特質を知らしめることは、やがて國語愛護の念に培ふゆゑんであり、更にその尊重愛護が一面の理に走つたり、末梢に流れたり、乃至頑迷固陋に陷つたりせしめないゆゑんになるのである。

國語は生命體であり、常に生動し發展するものである。隨つてこれを使用する國民の心掛如何によつて國語はよくもなればわるくもなるのである。われわれが發音を正しくすれば、國語そのものの發音が醇化される。われわれが醇正な國語を使用して話し、又文章を書けば、國語そのものが次第に醇化される。ここに國民として國語に對する實踐道があるのである。

されば、醇正な國語とは、決して固定した觀念のものでなく、將來の國語に對する理想をもつて考ふべきものである。即ち國語の醇化は、單なる外國語の排斥でもなく、飜譯語の忌避でもない。要は國語の法則に基づき、特質に鑑み、またその傳統と實際に照らしつつ、音聲言語に於いても文字言語に於いても平明雅馴を保ち、文化性、創造性を賦與することに努力することにほかならないのである。

三　國民科國語教科書

(1)　編纂方針

國民科國語教科書は、國民科の教科書であり、隨つて國民科全般に通ずる教科書の編纂方針に基づき、これを國語の立場から具體化することによつて編纂される。

まづ國語教科書の教材は、醇正な國語を通じて國民精神を涵養し、情操の醇化、創造力の啓發に資し、併せて國語愛護の念に培ふものであることを期する。

さうして、これらの教材は第一期乃至第四期の段階に即して排列され

るのであるが、國語教材はその表現面たる文章と、素材たる表現對象と、この二つの方面から排列を考慮し、系統を樹立しなければならない。

文章の系統　第一期は言語の發生系統を考慮して、叫び聲・獨言・對話その他專ら主體的な敍述を按配し、第二期に入つて次第に客觀的な敍述に移り、第三期に至つて口語文・文語文に分化する。第四期には更に文語の書簡文や名家の作品をも採擇する。なほ韻文としては、第一期の叫び聲から出發して、第一・二期を通じて童謠・童詩の類を排列し、第三期に入つて現代詩和歌・俳句等に分化せしめる。

表現對象の系統　表現の對象は兒童の生活から出發して國民生活の諸相に分化展開させる。即ち第一期は專ら遊戲・童話等を中心とする兒童生活を表現の對象とし、これを以て第二期以降の教材の母胎たらしめる。童話は傳說・寓話等を經て、第二期に於いて神話・英雄物語に移行し、第三・四期に於いて更に歷史物語・歷史的文化財に發展させる。遊戲は、模倣・作業運動・觀察等を經て、次第に現代の國民生活、文化の諸相に展開させる。

特に第一、二期に於いては修身教科書と相俟ち、國史及び地理の教材の萌芽を啓培して、第三期にそれぞれ科目を分ける母胎たらしめる。

以上は第一期乃至第四期の國語教科書の教材の體系であるが、なほ文字・語句・語法の提出もまた右體系と相俟つておのづから基準が定まるのである。今その提出の基準を極めて概括的にいへば次のやうである。

(1) 簡單にして基本的なものから始め、次第に複雜なものに及ぶ。
(2) 兒童の生活や心情に關係の深いものから始める。
(3) 具體的意義を有するものを先にし、抽象的意義を有するものを後にする。

(2) 第三期の國語教科書

第三期國語教科書として、「初等科國語」(兒童用書卷三より卷八まで)と、その教師用書を編纂する。兒童用書と教師用書とが一體的機構を有し、兩者によつて國語指導の全機能が發揮されることは、第一期・第二期の教科

書と同樣である。

初等科國語（卷三―卷八）

この期の教科書は各教科科目にわたり、それぞれその教科科目の目的に卽應して、教材が系統的に配列される。換言すれば各教科書は、それぞれ教科科目の性質に從つて獨自性を發揮することになる。

「國民科修身」に於いては、この期以降卷頭に「教育ニ關スル勅語」がまづ奉揭され、教材は直接に聖訓を根基として選擇され、排列系統もまた專ら聖訓を基準として組織だてられる。もちろん第一期、第二期といへども、教材は常に聖訓を根基として作成されてはゐたが、一面常に兒童生活の實際に顧み、また特に排列に於いて生活暦にしたがふところが多かつたのであつて、この點で第四學年以降いよいよ修身としての體系組織が次第に樹立されて行くのである。

「國民科國語」に於いても、この傾向は第四學年以降次第に現れて來る。

もとより國語教科書は、音聲・文字兩面にわたる言語を修練せしめるものであり、言語によつて表現されるところは、廣く國民生活・文化のほとんど全面にわたり得る。隨つて教材の體系は、他科目他教科の教科書の如く、素材によつてのみ決定されるものでなく、多分にその表現面卽ち文章の種類・程度や、語彙・語法等に依據しなければならない。しかも言語の生活は決して理知一點張りのものでなく、むしろ深く情意に根ざすものであるから、言語現象はまことに複雜多岐であり、これを單なる論理的體系によつて整へようとすれば、却つてその眞を失ひ、迂遠にしてしばしば無味乾燥なものになる傾きがある。殊に言語の理知的な表現は、他科目他教科の教材に於いて次第に展開されて行くのであり、國語教材は、むしろ情意を基調とする表現を中心とし、これを排列するのであつて、隨つてその系統は極めて大まかに取つて、文章の易から難へ、單純から複雜へ、表現の種類の分化へと展開し、語彙・語法等の論理的な階梯は、むしろ與へられた教材につき、重點的に選びつつ、指導に於いて適當に系統をととのへるの

が適切であるといへるのである。

第三期は第二期の過渡性を受けて、表現態度は更に客觀的となり、一そう文章としての體を整へるとともに、同じ口語文も、主として事實を敍するもの、情意を表白するもの、說明を基調とするもの、論旨を說述するもの等、種々のものに分化する。もちろん國語教材は、前述の通りすべてが情意を基礎とする表現、換言すれば文學的表現を以て本領とするのであるから、事實といひ、說明といひ、論旨といひ、決して知識を客觀的に敍するものでなく、常に情意の坩堝に融かしこんだ表現であることに注意すべきである。

更にこの期の卷四以降、文語文を提出する。これが提出方法は小學國語讀本が試みたものを繼承するもので、興味ある韻文若しくは戰記物語の韻律的な敍述に出發し、まづ素讀的方法によつて文語を直觀的に了解せしめつつ、次第に文語に親しませて行かうとするものである。しかもこの文語に移る階梯として、卷三に「日本武尊」「笛の名人」「千早城」「錦の御旗」等の文が揭げてある。これらは口語文とはいへ、既に單なる話しことばの表現でなく、多分に文語的な手法の加味された文章であることに注意すべきである。

韻文についていへば、第二期のいはゆる兒童詩は、この期に入つて一段の進展を示してゐる。即ち卷三の「朝の海べ」や「靖國神社」になほ兒童生活の表現はあるにしても、詩題に於いて一そう高いものがあり、「夏」や「秋の空」に至つては、既に詩の境域に迫つてゐる。更に卷四の「林の中」「廣瀨中佐」は文語詩であり、「防空監視哨」は自由詩としての雄篇である。かくの如くして韻文は現代詩の域に達するとともに、やがて俳句・和歌等の古典的な韻文形式をも分化するのである。

次に表現の對象から第三期の教材系統を一瞥すると、この期に入つて始めて童話的興味から脫却した本格的な史話や英雄物語が現れる。その排列に於いて、卷三が、上代の「日本武尊」から現代の「東郷元帥」まで大體歷史の時代を追つてゐるのは、卷二の排列を今一度繰り返すとともに、卷二

のそれを相補つて一そう時代を詳らかにするものであり、かくして卷一以降神代から現代までの歴史を極めて重點的に形成して、國民科國史の母胎を作りつつあるのである。

卷四に於ける說話は「くりから谷」「ひよどり越」「扇の的」「弓流し」等、特に文語教材とからむものが中心となり、それに「萬壽姫」が配せられて源平物語の敍事詩に集中し、やうやく古典文學たる性向を示してゐる。これらは卷五以降に出現する說話文學、古典文化教材、和歌・俳句等と相提携して、國語の傳統的意義を次第に深めて行くものである。

國語教材は、以上の如き說話から展開する生活・文化の歴史性とともに、兒童生活から出發する國民生活・文化の現代性をも一環として包攝しつつ、彼此相提携して高度國防國家體制の確立に資するものである。さうしてかくの如き現代生活・文化には、敬神（靖國神社、地鎭祭）、國體國防（靖國神社、兵營だより、觀艦式、大演習、小さな傳令使、大砲のできるまで、防空監視哨）、國民精神（君が代少年、體錬（とびこみ臺スキー）、科學（潮干狩、國旗揭揚臺、油蟬の一生、くものす、燕はどこへ行く、グライダー日本號、振子時計）、產業（機械、大砲のできるまで）、地理（出航、船は帆船よ、大連から、大阪、早春の滿洲）、自然（朝の海へ、苗代のころ、夏、母馬子馬、夕日、秋の空、林の中、川土手）等の體系がこの部に於いて兒童生活から發展し、重點的に組織だてられつつある。なほ說話教材の「光明皇后」「萬壽姫」等とともに、「母の日」が特に女子に關するものとして選ばれてゐることにも注意を要する。

しかもかくの如き素材が、國語教材たり得るゆゑんは、一にかかつて情意を主とする國語によつて表現されてゐることにある。科學・產業に關する教材といへども、國語に於いては言語表現を通じて思考感動に訴へ、國民精神に培ひ得るものたることを期するのである。

卷五乃至卷八は、第三期の中でも、初等科の最高學年たる意義を以て、特に一聯の機構のもとに編纂されてゐる。國民科といふ科目は、第五學年以降、完全に地理・國史の二科目を分化し、ここに始めて國民科の四科目が成立する。これまで修身・國語相提携して地理・國史の胎生を啓培し來たつた任務はここで一應完了し、隨つて國語はそれだけ獨自の任務に向か

つて進むことが出來るのである。

まづこの四卷に於いて、中軸たる位置にある教材は、卷四の文語教材を受けて發展する古典的教材である。「武士のおもかげ」(卷五)「源氏と平家」(卷六)「御旗の影」「鎭西八郎爲朝」(卷七)「菊水の流れ」(卷八)等がそれであつて、これらは在來の普通文としての文語の域から脱して、直接に兒童をして古典に親しませ、古文・古語を通じて史的感情を豐富にするとともに、現代語を古語と比較することによつて、國語の理會力を確實にしようとするものである。もとよりこれらの教材は、古典そのままの文學でなく、兒童の理會を度として單純化し、語句を平易に改め、漢字送リガナ等、他の教材と一致するやうに整へてあるが、しかもよく古文の趣を尊重する點に於いて、卷四の文語教材とは態度を異にするものがある。

以上の諸教材とともに、「晴れたる山」(卷五)「ばらの芽」(卷六)「見わたせば」(卷七)「玉のひびき」「萬葉集」(卷八)中の歌の如き和歌、及び「動員」(卷五)「元日や」(卷六)「朝顏に」(卷七)「梅が香」(卷八)の如き俳句もまた、その意義に於いて一致する。

和歌・俳句は、現代のものが過半を占めてゐるが、よし現代の作であつても、それ自體傳統的な文學である點に於いて、古典と區別して考へられないものである。

更に「大八洲」「弟橘媛」(卷五)や、「明治神宮」(卷六)や、「御民われ」(卷七)や、「奈良の四季」「鎌倉」(卷八)等は、もちろん現代の作ではあるが、歷史的感情の豐富な教材であり、古文・古語を生かした表現若しくは古歌を引用した文章である點に於いて、古典教材に準ずべき性質を十分持つてゐる。

なほ、この外に、卷七に「源氏物語」「古事記」があり、卷八に「萬葉集」があつて、わが國の傑出した古典を解說したものが教材となつてゐることにも注意すべきであり、この見地を推し進めて行けば、卷八の「孔子と顏回」「修行者と羅刹」は、佛家のいはゆる內典・外典に取材するもので、これもまたわが國に關係深い古典に取材したものといへる。

右古典教材と並んで、「國語」そのものに關する教材が一卷に必ず一教材收めてあることにも注意すべきである。卽ち「ことばと文字」(卷五)「漢字

の音と訓」(卷六)「敬語の使ひ方」(卷七)「國語の力」(卷八)がそれであつて、これらは低學年以來修練し來たつた正しい國語に基づき、漸く國語そのものに對する知的な反省を促し、以て國語意識の確立に培ひ、國語の理會力發表力の錬成に資するものである。

古典・國語に關する教材は、何等かの意義に於いてわが尊い國體及び歴史に深い交渉を持つものである。わけても「大八洲」「弟橘媛」「明治神宮」「御旗の影」「古事記の話」「御民われ」「玉のひびき」「萬葉集」「菊水の流れ」等は、いはばわが國體の尊嚴を具現するものであり、更に「木曾の御料林」(卷五)「永久王」(卷七)「靜寛院宮」「シンガポール陥落の夜」(卷八)と提携して、國體を明徴にする教材の中核體をなすものである。

しかも建軍の本義に照らし、國體と不可分な皇軍及び國防精神に關する教材が極めて豐富であり、殊に大東亞戰爭の勃發とともに、皇軍の活躍する大東亞に關する諸教材もまた御稜威の光被と結んで國體顯現の上に大きな役割を持つてゐる。今大東亞戰爭並びに大東亞に關する教材を擧げれば、卷五に「戰地の父から」「スレンバンの少女」「晴れたる山」「動員」があり、卷六に「姿なき入城」「十二月八日」「不沈艦の最期」「敵前上陸」「病院船」があり、卷七に「黑龍江の解氷」「永久王」「ゆかしい心」があり、卷八に「ダバオへ」「マライを進む」「シンガポール陥落の夜」「もののふの情」「太平洋」がある外に、附錄として卷五に「あじあに乘りて」「大地を開く」「草原のオボ」等滿洲・蒙疆に關するもの、卷六に「土、とともに」「愛路少年隊」「胡同風景等支那に關するもの、卷七に「ジャワ風景」「ビスマルク諸島」「セレベスのゐなか」「サラワクの印象」等南方諸地域に關するもの、卷八に「熱帶の海」「洋上哨戒飛行」「レキシントン擊沈記」「アッツ島の六月」等海洋に關するものが揭げてある。これらは「軍艦生活の朝」「ぼくの子馬」「飛行機の整備」(卷五)「水師營」(卷六)「日本海海戰」(卷七)等と相結んで、わが國防軍事の諸相、皇軍の眞精神を物語り、無邊に遍照する御稜威を仰がしめるのである。

國體とともに存するものは國土である。この觀點から、卷五卷頭に「大八洲」を揭げ、卷八卷末に「太平洋」を揭げた。すべての國土及び自然に關す

る教材はこの中に包攝される。島なるが故に海國であり、島なるが故に山の國であるわが國土の特質を具現すべく、「木曾の御料林」を掲げれば「海の幸」を掲げる。かうした對照を全教材排列の上に按排しながら、「かんこ鳥」「秋のおとづれ」(卷五)「朝鮮のゐなか」「初冬二題」(卷六)「晴れ間」「山の朝」「燕岳に登る」(卷七)「雪國の春」(卷八)等の自然が展開する。多くの和歌俳句もまたわが四季自然に關するものであり、大東亞の諸教材も、ひつきやう國土自然の展開と見ることができる。

更に科學産業に關するものとして、「木曾の御料林」「海の幸」「炭燒小屋」「ぼくの子馬」「星の話」「海底を行く」(卷五)や、「月の世界」「柿の色」「世界一の織機」「塗り物の話」(卷六)や、「雲のさまざま」「北千島の漁場」(卷七)や、「山の生活二題」「太陽」(卷八)があり、特に産業として戰時增産の意氣を見せたものも選ばれてゐる。

古典教材は「武士のおもかげ」「源氏と平家」「御旗の影」「鎭西八郎爲朝」「菊水の流れ」等、わが武士道に關するものを多數に含んでゐるが、それらをなほ補ふものとして「三日月の影」(卷五)「ひとさしの舞」(卷六)「國法と大慈悲」(卷八)があり、武士の文學としての狂言「末ひろがり」(卷八)が選ばれてゐることにも注意すべきであらう。

さて以上の諸教材中、特に兒童の生活に關係あるものを摘記すれば、卷五に「戰地の父から」「スレンバンの少女」「ぼくの子馬」「遠泳」「海底を行く」「飛行機の整備」があり、卷六に「朝鮮のゐなか」「月の世界」「初冬二題」「十二月八日」があり、卷七に「姉」「燕岳に登る」「われは海の子」「いけ花」があり、卷八に「雪國の春」がある。しかもその殆どいづれもが、少國民の自覺に培ふべく、著しく國家的色彩を有するところに、第三期としての特色があるのである。

最後に女子教材としての意義を有するものには、卷五の「弟橘媛」「スレンバンの少女」「武士のおもかげ」中の「障子張り」「馬ぞろへ」、「海底を行く」卷六の「水兵の母」「姿なき入城」「朝鮮のゐなか」中の「冬の夜」、「病院船」卷七の「源氏物語」「姉」「いけ花」「朝顏に」の千代、卷八の「玉のひびき」中の昭憲皇太后御歌、「母の力」「靜寬院宮」「雪國の春」中の「黑い土」等を擧げることができる。

以上、説明の都合上、假りに諸教材を分類的に眺めたのであるが、要するに全教材は表現上排列上渾然たる一體をなし、國民精神の涵養、もしくは昂揚に於いて一致してゐるのである。この場合注意すべきは、勇猛果敢、一朝有事に際して君國の爲に身命を捧げて戰ふ國民精神の荒御魂とともに、平和を愛し、自然を友とし、もののあはれを知る情心が、その和御魂として展開されてゐることである。それらを教材に卽して一々指摘するいとまもないが、武士道を背景として生まれた「生け花」が採られ、勇ましい皇軍の活躍の中に「ゆかしい心」や「もののふの情」が取り上げられてゐるのと同じ意味に於いて、四季自然の和歌・俳句・文章はもとより「源氏物語」「末廣がり」の如き傑作も掲げられてゐるのである。さうして、この國民精神の柔剛二面を見通してこれを教育上に生かすことに、大國民としての資質啓培の鍵があると信じられるのである。

卷五乃至卷八に於いては、挿畫の數をできるだけ制限することとした。これは專ら文を讀むことによつて理會を深くさせようとするものであり、必要缺くべからざるものの外は、寧ろ文によつて情景をしのぶ修練をなさしめることを期するからである。

なほ卷五以降、各卷に附錄として數教材が掲げてある。いはば國語教科書として最初の試みであり、その取扱に就いては各説のその場に於いて示されてゐるが、要はこれによつて主教材を補ひ、兒童の讀む力を修練させようとするものである。他面から見れば、優秀な兒童の餘力に對する補充教材たる性質を兼ねてもゐるのである。

文字の提出並びに使用について、在來の方法を改めた點を述べると大體次のやうである。

(イ)新出讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げなかつたこと

新出並びに讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げることは、國語讀本の長い傳統であつたが、これがためにややもすれば國語指導卽文字教授の感を抱かしめ、指導方針を誤る向がないでもなかつた。殊に音聲言語の重要性を認め、音聲言語・文字言語兩面にわたつての理會

力發表力を修練する國民科國語の立場からすれば、この方法は絶對に改める必要がある。よつて在來の方法を變更し、兒童用書の欄外に文字を掲げないこととしたのであるが、しかし兒童用書の卷末には新字表を附し、教師用書には新字讀替を仔細に指摘し、以て指導上の手がかりとした。もちろんかくの如き方法の變更は、決して文字の意義を輕く視たのでなく、國民科國語に於いては、國語そのものの指導を徹底せしめる點からして、ことばとともに文字の指導の任務は、むしろ一そう重要であることを考ふべきである。

(ロ)漢字の提出

教材が單純で、しかも兒童の機械的記憶力の旺盛な時期に、漢字を多く提出することが適切であることは、教育の實際に於いて意見の一致するところである。小學國語讀本が既にこれをある程度實行して來たのであるが、國民科國語教科書に於いては一そうその度を進め、第一期及び第二期に於いて漢字の提出を多くし、第三・四期に於いて減少した。なほ仔細にいへば、新出漢字の提出は第二學年に於いて最も多く、第三學年は既に減少してゐるが、第一期に於いてはできるだけ讀替漢字を出さないやうにし、第二期に入つてそれがずつと增加するから、結局漢字の負擔はこの期に最も多い。略字は第二期から教師用書に提出するが、正字と同樣に取扱ふべきである。

(ハ)文字使用上の留意

「ヨミカタ」以降、文字の使用について在來と異なつた觀點から特に留意したことは、漢字はある程度提出してもその使ひ方を著しく制限し、國語を漢字の桎梏から解放することにつとめたことである。特に話しことばを尊重し、國語の醇化を期する上から、できるだけカナ文字の使用を擴充し、漢字の種々な訓みを制限し、當て字當て訓みを整理し、一部送リガナを在來より精しく附して、全體として讀みやすからしめるとともに、醇正な國語を生かすことにつとめてある。

教師用書

教師用書は、「初等科國語」と編纂機構に於いて一體たる關係がある。まづ各教材の取扱を示して讀み方指導の重點を掲げるとともに、常に綴り方・話し方指導への發展擴充を圖り、別に綴り方・話し方の指導要項を掲げ、以て國語指導の全機能を發揮することを期するものである。

教師用書は、「初等科國語」の教材に卽して、教材の趣旨、文章、取扱の要點、注意すべき發音・文字・ことば等、備考の五項を掲げて説明し、更に附錄及び綴り方指導要項、話し方指導要項が掲げてある。今これらの項目に卽して説明と注意とを加へておく。

(イ)教材の趣旨

主として教材を採擇作成した趣旨を述べたもので、おのづから教材の目的や精神に觸れて説く部分であり、教材の持つ思想感情について解説する部分である。學年の進むにつれ、教材が深みを加へかつ多面的になるにしたがつて、この項及び次の文章の項は、かなり詳述されることになるであらうが、しかしそれは主として指導者の心構を作り、自信と用意とを持つて臨ませるためのもので、決してこれを兒童に與へるものと考へてはならない。世に「良教師は、最もよく調べ、最も少く與へる」といはれてゐるやうに、心に多く蓄へ十分の用意を持つてかかればこそ、指導に熱もあり、指導の適切を得ることもできるのであるが、されば、とて持つすべてを兒童に與へようとするのは最も下策であつて、指導は徒に煩瑣に流れ、兒童の理會を混亂せしめるばかりである。特に讀み方指導に於いては、讀むことに卽して理會せしめ、兒童の理會を限度として適切に與へることが最も大切である。

(ロ)文章

選ばれた材料が如何に表現されてゐるか。――讀み方教材の價値は、ほとんどこの表現によつて決定するものである。隨つて特にこの項を掲げて、表現の態度・方法・效果等を主として説明するのであるが、これ

も學年の進むにつれて、表現の深み、多樣性等を加へるので、この項の解說も詳密になる傾向がある。しかしこれもまた主として指導者の用意として掲げるのであつて、兒童にそのまま與へるものと考へてはならない。その點教材の趣旨に述べたところと同樣の注意が肝要である。

(八)取扱の要點

教材の如何なる點を如何に兒童に與へるかを、極めて重點的に示す項である。第三期に入り、その重點を「讀むこと」「話すこと」「書くこと」の三點に集中して述べたのであるが、第五學年以降は更にこれを一體的な立場で說くこととした。つまり學年の進むに從つて、いよいよ讀むことが優位を占めて來るからであるが、しかしそれはどこまでも「讀むこと」「話すこと」「書くこと」を基底としてゐることを忘れてはならない。

讀むこと　朗讀を主體とする讀み方指導の一操作であるが、要するに讀むことは文字・文章を理會し、それを通して兒童の體驗や思想や感情を豐富ならしめるのが目的であつて、隨つて「讀むこと」は敢へて直接に實物を學ばせることでもなければ、實物によつて理會させることでもなく、文章を通すことによつて理會させるのが本體である。もちろん、文章・語句等の理會を助けるために、實物や繪畫等を觀せることが大切な場合もあらうが、それはどこまでも文章を理會させるための手段であることを忘れてはならない。

なほ「讀むこと」は反復的に習慣づけることによつて正しく讀み、理會に到達し得るのであるから、いづれの兒童にも反復して讀ませるやうにすることが大切である。

しかも音聲言語指導の立場から、まづ「讀むこと」に於いて正しい發音の練習をさせ、訛音方言等を矯正することが極めて大切であり、それもできるだけ早期に於いて基準を示し、これによつて習慣づけるやうにすべきである。

「讀むこと」は當然解釋を伴なふ。いはゆるセンテンスメソッドの觀點

から、最近語句の適切な解釋を等閑視する傾向があるが、兒童の理會力を向上せしめるには、何をおいても反復朗讀させることと、語句を適切に解釋することが大切である。解釋はできるだけ具體的になすべきであり、この期に於いてもなほ動作に訴へさせ、必要に應じては實物繪畫を示し、また方言と比較して意味を捉らへさせることもあながち無用のことと斷言すべきではない。

「讀むこと」には當然文字の指導が大切である。新出並びに讀替の文字を中心として指導することはいふまでもなく、既出の文字によつて構成された熟語の指導に注意し、また常に書くことと關聯して文字の記憶を確實にすべきである。

なほカナヅカヒについては、第一期の「ヨミカタ教師用書」に示した趣旨にしたがつて、主として國語の法則に關係の深いものについて適切な指導をなし、反復練習せしむべきである。

在來の國語指導に於いて、凡そこの「讀むこと」ほど、種々の面から考へられ、隨つて種々な理論と方法とが持ち込まれたものはあるまい。その結果、國語指導を著しく「讀むこと」の上に廣げながら、しかも徒に空理に走り、煩瑣にして空疎な指導案と方法を生み、兒童をして却つて讀む機會を失はしめ、的確に理會力を培はしめない現狀にある。試みにその指導案を見れば、あるひは通讀・精讀・味讀の如き過程がある。讀みに音讀・微音讀・默讀といつた種類がある。あるひはまた讀ませかたに指名讀・列讀・齊讀といつたことが數へられる。範讀・伴讀・摸讀といふやうなことも考案される。かくの如き種々の分類は、あるひは指導者の用意として一應なされるにしても、これらを一々指導の實際に表さうとすれば、ほとんど技巧の末節に捉らはれるだけで、甚だしきは「讀むこと」それ自體が解體されてしまふことになる。例へば通讀・精讀・味讀にしても、結局は通讀によつて精讀も味讀も行はるべきであり、特にしばしば見る精讀の如きはあまりにも技巧的であつて、時間の空費に過ぎないことを思はせることがないでもない。音讀・微音讀・默讀の如きも、これ

を教室に卽して考へればほとんど抽象論であつて、音讀卽ち朗讀が本體であり、他は特殊の場合のほか考へられないものである。なほ兒童の發表を重んずることはよいとしても、全體の兒童の理會に一定の方向を與へず、殊に文の意味や、語句・語法の解明が確實でなく、曖昧模糊の間に終らしめるが如きは最も禁物である。兒童が如何なる點に困難を感じ、理會し得ないかを察し、指導者はむしろ進んで簡明的確に解明し、全體の兒童をして疑問を持たしめないやうにすることが大切である。

話すこと　讀み方指導に於ける「話すこと」は、つとめて簡單な發表をさせることを目標とする。卽ち教材を共通の話題として兒童と問答し、簡明な話をさせることを意味するものであつて、指導者は常にその話に留意しながら、よきことばを取りあげ、誤れるを正し、殊に教材中のことばを身につけさせるやうにし、これによつて「話し方」の基礎練習をなさしめるとともに、一面教材の理會に資せしめるものである。但し第一期の未分化の時期と異なり、讀み方は讀み方として獨自の面を持つやうになるから、教材の性質によつては、あるひは「話すこと」を制限し、專ら「讀むこと」「書くこと」に專念せしめることが却つて適切である場合も次第に起つて來るであらう。例へば韻文の如きものは、徒に「話すこと」のために詩を破壞し、興味索然たらしめる場合が少くない。この「話すこと」の項には、各教材に卽して、如何なることを如何に話させるかについて示してあるから、それを標準とすべきであり、なほ話し方指導要項の(一)「話し方は讀み方指導と緊密な關聯のもとに指導する」をも參照して、適切に指導すべきである。

在來も讀み方指導に於いて種々問答や話合は行はれたのであるが、多くは教材の意義に躊躇し、甚だしきは教材からある種の理念や思想を抽出させるために行はれがちであつた。兒童に深く考へさせるやうな負擔の多い話題では、言語練習の役には立たない。この點も併せて注意すべきところである。

書くこと　既に第二期以降書き方は課せられてゐないのであるから、ここに「書くこと」といふのは、「讀むこと」に卽して行ふべき書取及び書寫の範圍に限られる。しかも「書くこと」は「讀むこと」の一面であり、讀んで理會するとともに、書いて理會を深めること、文字の記憶を確實にすること、及び文字書寫の能を養ふこと等を目標として指導すべきである。この項には、特に讀み方教材中から、具體的に書く教材を選んで掲げてあるから、それに基づいて確實に書かせるとともに、時間の許す限りに於いて、書取または書寫をさせることにつとめる必要がある。

(二)注意すべき發音文字ことば等

特に注意すべきことばの發音につき、アクセント、訛音方言、正しい發音(調み方)等の立場から指摘し、新字・讀替文字・略字を掲げ、また注意すべき語句・語法・修辭等を重點的に示して、指導上の手がかり、もしくは參考としたのがこの項である。

(ホ)備考

教材相互の連絡、修身の教材との連絡、他教科との連絡を示して取扱上の考慮を促し、また極めて必要と思はれるものに限り、教材の參考資料・出典等を掲げたのがこの項である。

元來「讀み方」教材は、文章そのものが教材であつて、資料や原據は素材に過ぎないのであるから、これによつてみだりに教材を補說したり、殊に單純化することによつて始めて教材となつたものを逆に複雜にしたりして兒童を困惑せしめ、況んや原據によつて教材を變更するが如きは、最も戒むべきである。かかる見地から、資料や出典の掲載は、できるだけ少數の限度に於いてなしたのである。

附　錄

附錄として「新出讀替文字一覽」「運筆順序」が掲げてある。いづれも指導上の參考に資するものである。

綴り方指導要項
話し方指導要項

「綴り方」「話し方」ともに教師の實際指導に俟つて始めて生かされるのであるから、特に教科書は編纂しないのである。しかも大切なことは、どこまでも國語指導の精神に鑑み、各分節が密接に提携して行はるべきことであり、「話し方」の如きは施行規則にも時間を特設しないことが建前となつてゐる。

この見地から、新たに「綴り方」「話し方」兩者の要項を定め、第一期乃至第四期に應ずる指導段階を設け、更に各學年の指導についての大綱を示した。

なほ「綴り方」は要項に卽し、參考として要項例及び文題をも併せ掲げた。これらの文題は廣く他科目他教科の教材と連絡を取り、兒童生活の實際を考慮して選んだもので、かくの如くして「綴り方」に於いてもまた國語表現の全體性の發揮を期するものである。

「話し方」はこの要項に定めたところにしたがつて、一面には「讀み方」指導に卽して基礎練習をなさしめ、一面には兒童の自由な發表を「綴り方」と結んで音聲言語の醇化をはかり、更に他科目他教科の指導、學校行事及び兒童の生活に卽して、絶えずよき言語を躾けることを心掛くべきである。

なほ特に時間を特設する場合には、「綴り方指導要項」に掲げた文題を參考とし、これを話題として指導することも可能であらう。

各說

一　黑龍江の解氷

教材の趣旨

滿洲第一の大河黑龍江の解氷時の情景を詩に表現し、早春の歡喜と希望とを具象化し、大陸自然の悠大な姿を想像感得せしめ、日滿親善、大陸發展の素地に培はうとするのが趣旨である。

黑龍江は、その長さ實に二千七百三十キロ、わが鹿兒島から北海道旭川に到る鐵道の延長も、なほこれには及ばないほどの大河である。滔滔として流れるその河水は、文字通り暗黑色を帶び、見るからに神祕的な感じが湧き、まさに黑龍江の名にふさはしいものがある。夏季は、船舶を通じて運輸路となり、冬季は、河面まつたく氷結して橇の道となり、おのづからよき交通路となる。

なほ、滿洲に於ける諸河の解氷期は、だいたい四月初旬から中旬にか

けてであるが、その解氷には、「文解」と「武解」の二樣があるといはれてゐる。「文解」は、河面の氷が徐々に解けて緩かに流れ出すものであり、「武解」は、氣溫水勢その他の關係で、上流から下流へ向かつて、氷が一時に押し流されて來るもの凄い解氷をいふのである。

本教材は、黒龍江に於ける「武解」のやうすを如實に表し、大自然の偉力に對する驚異と感激とを表した韻文である。

文章

五聯から成る不定型詩である。

第一聯は、解氷直前のやうすを歌つたものである。北滿に於いては、零下何十度の酷寒に、河といふ河は固く凍結するが、その氷の厚さは、二三尺から五尺餘りに達するものがある。しかもこの厚い氷で、海のやうに廣い大河が悉く張りつめてしまふ。それが、一旦春光がさしそめると、さすがにゆるんで、やがて解けだすだらうといふことが豫感される。河流が半年も氷に抑へつけられて、河底を靜かに流動してゐたやうすを「眠つてゐた」といひ、氷を破つて流れ出さうとする氣はひを、「春のいぶきをいつぱいに吸ひ込んだ」と歌つてある。このやうな擬人的表現によつて、黒龍江の大きな動きを兒童の身近に感じさせることができるであらう。

第二聯は、解氷の瞬間を描いたものである。今までは、大地のやうにびくともしなかつた氷原が、見る見るうちに、どどどどといふやうな「地響きをたてながら」、「めりめりと」「割れる」、「碎ける」。人力では如何ともしがたい厚い氷の地面が、たわいもなく碎かれて行く大自然の威力は、見るからに壯觀である。まつたく動かなかつた大地のやうな河面が、「今、動きだした」のである。岸に立つてこの大きな移動をじつと見てゐると、自分自身が河上の方へどんどんと進んで行くやうな錯覺を起し、目まひがしさうになる。割れた氷がずれ動いて、その裂け目がだんだんとひろがり、河水が見える。久しぶりに見るあの川の水、それに、日光がさして、「川波が光りだ」す。みんなは、この生き生きとした川波を眺めて、

漸く春がやつて來たことを思ひ、冬の間枯死してゐた大陸が、今しも蘇生したかのやうに喜ぶのである。いかにも「自然の大きな脈搏」が、どきんどきんと打ち出した時のやうな、生氣溢れた情景である。

第三聯は、解氷し始めた黒龍江の姿を通して、大陸迎春の氣分を暗示したのである。黒龍江の本流に注いでゐる支流は、その數だけでもかなり多いが、オノン・インゴダ・シルダ・アルクン・ウスリー・松花江など、その主なものだけでも二十ほどある。これらの支流は、それぞれ山岳・高原等に源を發し、「冬のなごり」を本流に流し込むが、本流は、これを蜿蜒北滿の曠野に運び、遙かに遠いオホーツク海へ向かつて、勢よく流し出す。それは、丁度人が「はあ」と息を吐くやうなやうすにたとへられる。

第四聯は、流氷の壯觀を描いたところで、全詩中の頂點である。「あふられ」、「つきあたり」、「のしかかり」、「でんぐりかへり」と疊みかけるとともに、漸層的な表現によつて、流氷の躍動する有樣を具象化してゐる。

最後の聯は、解氷後の黒龍江を滿洲の母と見たてて、やや象徴的に歌つたものである。「やさしい手」は、幾多の支流を意味し、「ひろげ」は、あちらこちらの地方を流れ集ることを意味し、「だきかかへて」は、黒龍江が滿洲の國境を流れてゐることを示したのである。かうした地勢を見ると、恰も「わが子」を抱きかかへてゐる母親の姿を想像させるものがある。しかも春光麗かな大陸を流れる黒龍江は、さながら「春の歌」を、おほらかに歌つて、愛兒滿洲に聞かせるかのやうにも思はれる。

全詩を通じて見ると、初めは落ち着いた調子であるが、次第にその動きを增し、烈しさを加へて絶頂に達し、再びまた靜かな場面に立ち歸つて筆を收めた形になつてゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。字脚が揃つてゐないが、その間にも一種の韻律があるから、これを生かして讀ませるやうにし、解氷時に於ける黒龍江の壯大なやうすを歌つた詩であることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、話すことと連絡し、主體的な詩の態度に卽して、文意を讀み取

らせ、厚い氷で張りつめた黒龍江が、春のいぶきを吸ひ込むと、めりめりと地響きをたてて砕け始める大自然の雄大な姿や、松花江やウスリー江をのんでオホーツク海に向かひ、氷塊がもみ合ひ群がつてあふれ流れるさまや、氷塊が流れつくして終ふとやさしい姿にかへり、蒲洲をだきかかへるやうにして、春の歌を歌ふ洋々たる平和な黒龍江の姿を想像させ、詩の雄渾な構想と表現の妙味に感じさせるやうに指導する。

讀みを反復し、詩情を深めて、自然に暗誦に導く。

暗誦を利用して全文を書寫させる。その際次のカナヅカヒに注意させる。

雨岸の間を
張りつめてゐた氷
眠つてゐた
あくびをして
春のいぶきを
吸ひ込んだ
地響きをたてながら
松花江をのみ
ウスリー江をのみ
オホーツクの海へ向かつて
冬のなごりを吐く
噛みあひ
でんぐりかへり
黒龍江は
やさしい手をひろげ
蒲洲をだきかかへて
春の歌を歌ふ

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

あつい(厚)――アッイ　あつい(暑)――アッイ

はく(吐)――ハク　はく(穿)――ハク

訛言方言

眠つて――「ネブッテ」と訛らないやうに注意する。

大きな――「オーケナ」と訛らないやうに注意する。
いつぱい――「エッパイ」の訛を矯正する。
動かなかつた――「イゴカナカッタ」といはないやうに注意する。

發音

地響き――ジヒビキ　半年――ハンネンまたはハントシ
松花江――ショーカコー　オホーツク――オホーック
あふられ――アオラレ　歌ふ――ウタウ
ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　碎け　氷塊(カイ)
讀替　松(ショウ)(ショー)花江　暗黑色(アンコクショク)(ショーク)

語句語法

「解氷」「春のいぶき」「自然の大きな脈搏」「冬のなごり」「氷塊」「のしかかり」「でんぐりかへり」等は指導を要する語句である。
次の如き擬人法による主體的態度を指導し詩を理會させる。

その下で眠つてゐた黒龍江
ひとつ大きなあくびをしてから春のいぶきをいつぱいに吸ひ込んだ。
ああ自然の大きな脈搏。
「はあ」と冬のなごりを吐く。
黒龍江は、やさしい手をひろげ、わが子のやうに滿洲をだきかかへて春の歌を歌ふ。

次の如き脚韻に注意し、韻律を生かして詩の理會に資する。

五尺もある厚い氷、
ぎつしりと張りつめてゐた氷、
めりめりと氷が割れる。
碎ける。
今、動きだした。
あちら、こちらに川波が光りだした。
松花江をのみ、
ウスリー江をのみ、
氷塊と氷塊がつきあたり、

（噛みあひのしかかり、
でんぐりかへり、

備考

連絡

ヨミカタ二「西ハ夕ヤケ」、よみかた四「滿洲の冬」、初等科國語四「大連から」等と連絡して取扱に考慮する。

初等科修身二「大陸と私たち」と連絡して取扱に考慮する。

二　永久王

教材の趣旨

北白川宮永久王の御事蹟の一端を數場面に謹記して、御祖父能久親王とともに、金枝玉葉の御身を以て盡忠の誠を捧げられた至高至純な御精神に感動させ、皇室尊崇の念に培ひ、併せて大東亞建設の大きな礎石となり給うたありがたさを感得させようとしたものである。

王は、故成久王の第一王子で、御母は周宮房子内親王殿下（明治天皇第七皇女）と申しあげる。臺灣で薨去あそばされた能久親王の御孫に當らせられる。王は天資穎悟、仁慈の御心深く、才は文武を兼備せられ、夙に皇室を尊崇し、敬神崇祖の念に厚くあらせられた。御幼少より極めて御孝心深く、十四歳の御時、父宮殿下を失はせられて以來、母宮殿下に御孝養の限りをお盡くしになつた。軍務に就かせられてからは、精勵恪勤、常に率先窮行、衆に範を垂れさせ給うた。また御友情殊に厚く、同期生や御緣故の人々の出征に際しては、日の丸の旗を賜ひ、御激勵あそばされた。戰歿者の英靈を弔はせられ、遺族に對しては手厚い御慰問を賜ふのであつた。

昭和十五年三月、大命を拜されて遠く蒙疆の地に御出征になり、その後、中支、北支の作戰に御參加になつて、親しく砲煙彈雨の中に將兵と勞苦を共にあそばされた。然るに同年九月四日、蒙疆に於ける防空に對

處すべき作戰中、圖らずも御戰死あそばされた。時に御歳三十一。御訃一度天聽に達するや、宸悼あらせられ、御生前の勳功を御嘉賞になり、特旨をもつて、大勳位菊花大授章を授けられ、功四級の金鵄勳章を賜うた。國民もまたひとしく哀悼の誠を捧げ、御遺德を景仰し奉つた。御戰死の地、張家口には戰蹟記念碑が建てられ、蒙疆神社の御造營を見、王の神靈が奉祀されたのであつた。

本教材では、この王の日常の御やうすや、戰場での御有樣や、昭和十五年九月六日、高輪の御殿に凱旋あそばされた場面などを謹記して、御遺德を景仰し奉らしめようとしたもので、初等科修身二「能久親王」と關聯して取扱ふことが肝要である。

文章

文は、六つの章節から成り立つてゐる。

〔一〕は、王が東京幼年學校第一學年に御在學中、北海道の御旅行からお歸りになつた時、途中仙臺でお求めになつた黑竹の杖を、母宮殿下にさしあげられた御孝心のほどを書き記したものである。

「これは、おみやげにと思ひまして、求めてまゐつた黑竹の杖でございます」――短いおことばの中に、王の母宮殿下への御孝心がこもり、「この杖をかうして持つてゐると、永久に手を引かれてゐるやうですと仰せられ、やさしく王を御覽になつて、につこりお笑ひになつた」ところに、母宮殿下の王に對する溫い御愛情のほどが拜される。

〔二〕は、陸軍士官學校豫科を御卒業後、近衞野砲兵聯隊附の士官候補生時代、武藏野で演習をされてゐた時の一情景を描いて、王が、まづかうした雨にも農家の人々のことを思し召された御仁慈を書き表したものである。なほ「陸軍士官學校豫科」は、現在では陸軍豫科士官學校と改稱されてゐる。

中隊長が、「雨で、殿下には、さぞお困りになつたことでありませう」とおたづねしたのに對して、「二月餘りも雨が降らなかつたから、この雨で、農家はさぞ喜ぶことでせう。ほんたうによい雨です」とお答へになつた

おことばに現れてゐる御いつくしみの心が、この段の中核をなしてゐる。

水晶のすだれを掛けたやうに降りしきる雨を、いかにも氣持よささうにお眺めになつた――大粒の夕立がさつと降つて來るやうすを、「水晶のすだれを掛けたやうに」と形容したのである。沛然と降つて來る夕立を、「いかにも氣持よささうにお眺めになつた」といつたのは、「ほんたうによい雨です」と、おつしやつたおことばを裏づけるものである。

〔三〕は、昭和十五年三月十九日、蒙疆の地へ御出征になる時、母宮殿下においとまごひを申しあげられる場面を謹記して、〔四〕〔五〕〔六〕の各段へ展開する橋渡しとした。

陸軍砲兵大尉の御軍裝――昭和十五年九月十三日に、陸軍武官等級表が改正されてからは、單に陸軍大尉といはれるやうになつたが、昭和十五年三月十九日は、改正以前であつたため、「陸軍砲兵大尉」の官名であつたのである。

「永久のからだは、お上におささげ申したものですから、決死の覺悟で、御奉公なさるやうに」――金枝玉葉の御身でさへも、一臣下として身命を天皇陛下に捧げられ、決死の御奉公をあそばされるのである。そこにわが國體の尊嚴があり、ありがたさがある。母宮殿下の御心もさることながら、そのままお受けになつて、

「陛下のおんため、力の續くかぎり戰ひぬく覺悟でございます。どうぞ御安心くださいませ。」

と申され、このおことば通り護國の神となりたまうた王の御生涯は、永く國民の心の中に刻み込まれなければならない。王こそ、忠孝一本の道を、そのまま實踐したまうたわれらの活模範であらせられるからである。

〔四〕は、第一線に於ける王の御仁慈のほどがしのばれる場面である。

「王の御宿舍は、粗末な蒙古の住民の家」であり、「ある夜しばしかり寢のゆめをお結びになつて」おいでになるやうな、第一線の御不自由な御生

活であつた。かうした狹い粗末な家であるから、「あたりのさわがしさ」も聞えて來て、「目をおさましに」なるやうな次第であつた。

「病氣。それは氣のどくだ」――短いおことばの中に、王の御仁愛が溢れてゐる。このおことばが、王は、かうおつしやつて、一服の藥をお取り出しになつた」の御行爲によつて實現され、御仁慈が蒙疆の民草の上にも及ぶ具體的な姿を示してゐる。王のお與へになつた藥は、宮家御家傳の貴重藥で、王が常に御携帶になつてゐたものである。

王の御宿舍の前には、蒙古の住民たちが並んでゐた。王のお情に、心からお禮を申しあげるためであつた――御仁慈に感佩した蒙古の住民たちが、王の御德を敬慕する有樣が、この表現を通してうかがはれる。

〔五〕は、王が、第一線の激戰中を、飛行機でお飛びになり、「彼我の戰況を御偵察になつて、作戰の御指導をなさつた」のであつたが、この文の示すやうに、一たび宮機が戰線に現れると、將兵の勇氣は百倍するのであつた。第一線に於けるこのやうな王の御活動をこの段では寫し奉らうとしたものである。

〔六〕は、昭和十五年九月六日、高輪の御殿へ御凱旋なさつた時の御模樣を記し奉つたものである。

防空演習で帝都は夜のやみにとざされてゐた――帝都全體が、期せずして弔意を表してゐるやうに感じられ、「その中を、王の御なきがらを奉安する御ひつぎの車は」、高輪の御殿へ御凱旋あそばされたのであつた。

お四つでいらつしやる若宮道久王殿下が、喪章をつけない日の丸の小旗をお持ちになつて――御凱旋のこと故、日の丸の小旗にも喪章をおつけにならなかつたのである。「名譽の御凱旋をなさるのですから、心の中で萬歲を唱へてお迎へするのです」と、家職の者一同にも仰せ出でになつた母宮殿下――つまり若宮殿下は、「祖母宮殿下」のおいひつけ通りになさつたのであらうと、御推察申しあげたのである。

「御ひつぎは、表玄關から、母宮殿下の御居間、櫻の間にまづおはいりに

なつた」――現身としての王をお迎へあそばすと同じやうに、王の御なきがらをお迎へあそばされたのであつた。さうして、その御居間で、神におなりになつた王に、母宮殿下は、母君としての御慈愛に滿ちたお迎へのおことばを、親しくおかはしになつたのであつた」が、そこには、〔一〕と〔三〕とで、王にお示しになつたと同じやうな母君としての御愛情が溢れてゐる。そこで、特に、〔一〕と〔三〕の場面と、この場面とを關聯させる意味から、王が、「北海道からお歸りになつて御挨拶をなさつたのも、蒙疆へ御出征の時、最後の御對面をなさつたのも、この同じ櫻の間であつた」といひ表したのである。

取扱の要點

文章を讀ませて困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。かなり長文であり、各場面に飛躍があるから、讀みの指導に力を注ぎ、出征したまうた永久王殿下の御德の高かつたことや、終に戰死あそばされたことが書いてあることをわからせる。讀みが進むにしたがひ、各章節の文意を明らかにする。〔一〕では母宮殿下に對する御孝心〔二〕では農民に對する御同情〔三〕では御出征の際母宮殿下に對し御挨拶になり、御覺悟をお述べになつたこと〔四〕では蒙疆の住民に對する御仁慈〔五〕では戰地に於ける御活動〔六〕では無言の御凱旋の御やうすを讀み取らせる。

文意の理會に即して、特に敬語の使ひ方に注意して話すことを練習し、讀みを深めて、王の一命をささげて御奉公あそばされた御精神に感じさせるやうに指導する。

新字・讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「豫」「裝」「宿」「彼」「我」「慈」等複雜な文字は、扁・旁等にわけて字形・筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

北海道から求めてまゐつた黑竹の杖でございます。

王は、陸軍士官學校豫科を御卒業になつた。

むさし野を縱橫にかけめぐり、演習をなさつてゐた。

大粒の雨が降りだした。

一軒の農家の軒先にお立ちになつた。

陸軍砲兵大尉の御軍裝で御出征になつた。

御頭をおさげになつて、御答禮をあそばされた。

王の御宿舍は、粗末な住民の家であつた。
宮殿を迎ふの光榮に浴す。
彼我の戰況を御覽になり、作戰の御指導をなさつたのである。
御ひつぎの車は、ぎちやう隊の護りもいかめしく、お進みになつた。
心の中で萬歲を唱へてお迎へするのです。
御慈愛に滿ちたおことばを、親しくおかはしになつた。
次のカナヅカヒに注意させる。
（黑竹の杖でございます
ございません）
（御挨拶を申してい・らつしやるのであつた
お四つでい・らつしやる
生徒でい・らしやつた時）

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

あめ（雨）――アメ　　あめ（飴）――アメ

訛音方言

歸つて――「カイッテ」といはないやうに注意する。
まゐり――「マエリ」といはないやうに注意する。
目――「メー」と長くいはないやうに注意する。
飲ませて――「ノマシテ」といはないやうに注意する。
返つて――「カイッテ」といはないやうに注意する。
なさつた――「ナスッタ」といはないやうに注意する。

發音

幼年學校――ヨーネン・ガッコー　**黑竹**――クロチク
御前――オンマエ　**縱橫**――ジューオー
御軍帽――ゴグンボー　**御軍服**――ゴグンブク
十五年――ジューゴネン　**御軍**――ゴグンソー
御頭――オンカシラ　**御宿舍**――ゴシュクシャまたはオンシュクシャ
ある夜――アルヨ　**お取り出し**――オトリダシ
宮殿――ミヤキ　**さし出す**――サシダス

夜のやみ――ヨルノヤミ　御指導――ゴシドー
御なきがら――オンナキガラ　御ひつぎ――オンヒツギ
立川――タチカワ　御凱旋――ゴガイセン
祖母宮殿下――ソボミヤデンカ　御居間――オンイマ
樓の間――サクラノマ　御對面――ゴタイメン
御慈愛――ゴジアイ

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　豫科　大粒　御軍裝（ソー）　御宿舍　粗末　彼我　御慈愛

讀替　黒竹　縱（ジュー）横（オー）　一軒　御答（トー）禮　浴す　御指導　護り　喝へ

語句語法

「陸軍幼年學校」「制服」「殿下」「黒竹の杖」「陸軍士官學校豫科」「士官候補生」「縱横にかけめぐり」「御軍裝」「不動の姿勢」「決死の覺悟」「御奉公」「大命を拜されて」「蒙疆の地」「御注目」「御答禮」「御宿舍」「粗末」「軍務」「しばし」「かり寢のゆめをお結びになつて」「御熟睡」「翌朝」「たけなは」「感激にたへず」「第一線」「武官」「砲煙彈雨の間」「彼我の戰況」「御偵察」「作戰」「御指導」「電文が示す」「帝都」「やみにとざされて」「御なきがら」「奉安」「御ひつぎの車」「儀仗隊」「喪章」「凱旋」「祖母宮殿下」「表玄關」「御對面」「神におなりになつた」「御慈愛」等は、指導を要する語句である。

敬語の多い文であるから、次の如きものは文例に即して指導し、その用法になれさせる。

お召しになつた。
歸つてまゐりました。
求めてまゐつた黒竹の杖でございます。
演習をなさつてゐた。
御對面をなさつたのも、
敬禮をあそばされた。
御答禮をあそばされた。

備考

連絡

初等科修身二「能久親王」と連絡して取扱ふ。

三　御旗の影

教材の趣旨

太平記卷三「笠置軍事附小見山夜討の事」及び卷十「稻村崎千潟となる事」の一部を抄出して教材化したものである。

既に卷六に於いて、平家物語の文章を同樣に扱つて「源氏と平家」といふのを掲げた。本教材もその目的に於いて同樣であり、更にそれを擴充するものである。卽ち國語教育の一面として早くも古典的文章そのものを教材とするもので、他の和歌、俳句等の教材とともに、いよいよそれが强調されて行く。畢竟するに、かうした教材によつて、一面國民科國史を助けて兒童の歷史的感情を豐富にするとともに、一面現代語と古文・古語との關係に氣づかせ、國語の理會を確實にしようとするものである。

文章は、後醍醐天皇建武の大御業を輔け奉つた忠臣足助重範と新田義貞の奮戰を主題とするもので、前者は元弘元年九月笠置山合戰を、後者は元弘三年五月の鎌倉攻めを物語る。いはば元弘の役の序幕と終幕で、これを一課に配合し、文中「錦の御旗に日月を金銀にて打つて着けたるが」とあるに據つて題を「御旗の影」とし、御稜威の光被を印象づけようとしたものである。兒童は、既に初等科國史上に於いて史實の概要を修めてゐるのであり、今それと連繫しつつ、具體的敍述によつて感激を深からしめることを期する。因みに、足助重範は三河國足助の人で、天皇の密旨を奉じて早くも笠置の軍に參加し勇戰したが、城陷るに及んで捕へられ、元弘二年五月京都に斬られた。年四十一、明治二十四年七月正四位を贈られてゐる。義貞に至つては史上顯著であるから、ここに記述を省略する。

文章

太平記の文章を抄出したもので、行文中、兒童の理會に適するやう或

は語句を省略して單純にし、或は文句を平易に改め、全體として文章を調へ、文字・語法を統一する等、多くの修正が加へてはあるが、しかし、どこまでも原文の趣を尊重し、古文の面影を存置することに力めてある。

この點卷五「武士の面影」、卷六「源氏と平家」等と規を一にしてゐる。

前段「笠置の城」は、笠置山合戰の緒戰に關する部分で、特に忠臣足助重範の善射が躍如として描かれ、更に本性房といふ南都般若寺の僧の怪力が配されて、官軍の意氣頗る昂つた情景の表現である。

まづ笠置の城のやうすが最初に敍してある。城はいふまでもなく山城で、自然の天險によつて敵を防ぐものである。堀・石垣・木戸・櫓等多少の人工は加へてあるが、後世の平城や平山城などとは全く趣を異にする。「山高くして一片の白雲峯を埋め、谷深くして萬丈の青岩道をさへぎる」は對句で、これによつて山高く聳え、岩石阻つ山容が敍してある。

第二節以下、主としてこの城に押し寄せる賊軍の側から見た城のやうすが描かれ、頗る巧みな手法であることを思はせる。城は靜まり返つて人ありとも見えず、賊はこれを見て、官軍は既に退却したものと思ひ込み、七萬五千餘騎無二無三に進む狀況である。

第三節に至つて、賊の眼に映じた城中の陣容が描かれ、特に錦旗の燦然たるかげに、いかめしい軍裝の三千餘人が陣を堅め、用意をさをさ怠りなきやうすに、早くも賊の心中に臆病風が吹き始めてゐる。

第四節はいよいよ足助次郎の現れるところで、まづその名乘りがいかにも堂々としてをり、國民の胸にせまるものがある。「一天の君に命をささげて」といひ、「萬乘の君のおはします城」といひ、さすがに無道の賊も、ぐうの音の出ない趣がある。名乘りから直ぐさま得意の射術に移つて、三人張りの弓につがへた十三束三伏せの矢が音高く放たれる。

その矢の行方は、谷を隔てて二町餘り向かふにゐた荒尾九郎の甲を通す。甲を通して右の脇腹までぐさつと深く射込む必殺のねらひ、何かは以てたまるべき、馬から逆さまに落ちてそのまま起きあがり得ず死んだとは、弓の手際とともに敍述もまたあざやかである。

この有様に、弟の彌五郎が、兄の死を見せまいと正面に立ちあがつた。「足助殿の御弓勢」以下は負け惜しみの廣言か――しかし命を的に立つたのは殊勝に見えないでもない。

ところで、眞の勇者足助はどこまでも愼重である。「この者、甲の下に腹卷を重ねて着たればこそ」との突差の思慮は、敵の裏をかきながら更に一矢を酬いる。これで彌五郎のばけの皮はすつかり剝がれてしまふ。同じ十三束三伏せではあるが、「前よりもなほ引きしぼりて」で、一層の力が見せてある。「思ふねらひを違へず」は、足助の方からいふことで、彌五郎にしては全く的外れである。果して胄の眞向は碎け、眉間の眞中深く射込んだ。敵は二の句もつげず兄弟同じ枕に倒れ重なつたのである。

足助の弓は、戰のはなばなしい序幕であつた。「これを軍の初めとして」以下「大手からめ手、城の内」といひ、「矢叫びの音、ときの聲」とたたみかけた手法、短い表現の中に、複雜な合戰が敍せられて力強い。獨唱を受けた合唱の感がある。

寄せ手は多勢を賴んで勢ひ込む。するとここにまた味方の勇者の變つた獨唱が現れる。「本性房」といひ「大力の僧」といひ、この時代の僧兵といふ變つた代物である。「衣の袖を結んで引き違へ」で、かひがひしい身仕度がよく利いてゐる。その大力には、表現の誇張もあらうが、足助の精妙な射術と對照されて、この素朴な蠻勇が、一種の愛嬌をさへなしてゐる。

太平記によれば、以上の戰鬪は元弘元年九月三日の事である。最後の三行はおのづからこの段の末尾をなす。小勢とはいへ官軍の善戰に敵は怖れをなし、雲霞のごとき勢を擁しながら、徒にしりごみして長期戰の態度に出る。笠置の城は、九月晦日の夜賊が火を放つたので、遂に落城の餘儀なきに至つた。しかし、本敎材では直ちに二段「稻村が崎」へ轉じて、官軍の最後の凱歌を聞かせようとしてある。

「稻村が崎」――稻村が崎は、今鎌倉市字極樂寺に屬し、袖が浦の西南に

ある。その東方沿岸が由比が濱であり、西方沿岸が七里が濱である。鎌倉の西口に當る要害で、太平記によれば、元弘三年五月二十一日夜半、新田義貞はここにさしかかり、潮の干たのに乘じて稲村が崎を徒歩迂回じて鎌倉へ入り、遂に北條氏を滅したのである。

「明け行く月に」五月二十二日の曉になる。義貞軍勢を率ゐて二十一日夜半、片瀬腰越を經て、まづ極樂寺坂にかかつたのであるが、原文によれば「明け行く月に敵の陣を見給へば、北は切通まで山高く路嶮しきに、木戸をかまへ、垣楯を掻いて、數萬の兵、陣を並べて並み居たり」と、極樂寺坂のやうすを描き、「南は稲村ケ崎にて沙頭路狹きに浪打ち涯まで逆茂木を繁く引懸けて、四五町が程に大船どもをならべて矢倉をかきて横矢射させんと構へたり」と、極樂寺坂の南方稲村が崎のやうすを述べてゐる。本教材では、專らこれを單純化し、語句を省略して、堅陣の概要を兒童に印象づけつつ、次へ移つたのである。

さて義貞は馬からおり、海上はるばる伏し拜むのであるが、原文では

祈誓の文句も非常に長いのを、簡潔にしたのが本教材である。ここに注意すべきは、原文によると、義貞は龍神に對して祈つてゐる。しかも「伊勢天照大神は、本地を大日の尊像に隱し、垂跡を滄海の龍神に顯し給へり」といつてゐるから、龍神は卽ち天照大神の垂跡であるとする信仰であり、隨つて「義貞今臣たるの道を盡くさんため」以下が力强く利くことになる。まことに天業を翼賛し奉る誠心のよく現れたことばである。

かくて、黃金作りの太刀を海中に投じ、やがて稲村が崎二十餘町干あがる奇蹟が出現するのであるが、「その夜の月の入り方に」とあるのは、前に「明けゆく月に」とあるのと同じ月で、結局二十一日の夜の月が、明ける方と入る方から敍せられて、かくなつてゐるのに過ぎない。下弦の月であるからその月の入るのは、二十二日夜明けて後のことである。

この奇蹟といひ、大將の「神も納受したまふぞ。進めや、つはものども」の下知といひ、全軍を振るひ立たすに十分である。「江田大館里見鳥山」

田中・羽川・山名・桃井の面々」といひ、「越後・上野・武藏・相模の軍勢」といひ、固有名詞を並べたのは、具體的に力强く且調子よく敍する戰記文學の手法で、それが「稻村が崎の遠干がたを眞一文字にかけ通りて」と照應して、見るやうに描かれてゐる。敢へて固有名詞の一々に就き、どういふ人かを穿鑿する必要はない。

取扱の要點

「笠置の城」と「稻村が崎」は別々に取扱つた後に、全課を通じて指導する。

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。一種の調子を持つた文語文であるから、特に讀みの指導に注意し、「笠置の城」では足助の次郎重範、「稻村が崎」では新田義貞の忠節が書いてあることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、「笠置の城」では重範が笠置城一の木戸を守り、剛弓で荒尾兄弟を倒し、本性房とともによく城を守つた武功を讀み取らせる。「稻村が崎」では義貞が稻村が崎で賊の防備の堅きを見て、黃金作りの太刀を海に投じて祈念し、干あがつた稻村が崎を眞一文字にかけ通つて鎭倉へ攻め入つたことを讀み取らせる。

文意の理會に卽して、文語を口語で話すことを練習し、讀みを深めて、重範・義貞の誠忠に感じさせるやうに指導する。前者では、一の木戸で名のりをあげたことば、後者では、義貞の祈念することばに重點をおいて、取扱ふことが大切である。

新字・讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「袖」「控」「逆」「類」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形・筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

甲の袖を連ねて並びゐたり。

矢じりを少々用意仕りて候。

谷をへだてて二町餘りのかなたに控へたり。

必殺のねらひなれば、荒尾馬より逆さまに落つ。

矢面に立ちふさがる。

「かぶとの眞向を射たらんに、などか通らざるべき。」と思案して射る。

二言ともいはず、兄弟同じ枕に倒れけり。

堅陣を打ち破つて攻め寄せん。

皇化をたすけ奉つて、民生を安んせん。

祈念して黄金作りの太刀を海中へ投げ入れたり。

ふしぎといふも類なし。

次のカナヅカヒに注意させる。

（二言ともいはす。）

いひけるは

いふままに

いへども

（候はん

候ひし

候へ。）

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

はた（旗）――ハタ　はた（傍）――ハタ　はた（將）――ハタ

つる（弦）――ツル　つる（鶴）――ツル

訛音方言

見え――「メエ」と訛らないやうに注意する。

發音

御旗――ミハタ　白雲――ハクウン

青岩――セーガン　戰ふ――タタコー

木戸口の邊――キドグチノヘン　日月――ジツゲツ

天日――テンジツ　甲武者――ヨロイムシヤ

射手――イテ　その勢――ソノセー

萬乘の君――バンジョーノキミ　御向かひ――オンムカイ

十三束三伏せ――ジューサンゾクミツブセ　ごとく――ゴトク

矢面――ヤオモテ　御弓勢――ゴユンゼー

御矢――オンヤ　ねらひ違へず――ネライタガエズ

二言――フタコト　軍の初め――イクサノハジメ

大手――オーテ　大力――ダイリキ

衣の袖――コロモノソデ　引き違へ――ヒキチガエ

大石――オーイシ　人馬――ジンバ

砂上――サジョー　大船――オーブネ
仰ぎ――アオギ　黄金作り――コガネズクリ
その夜――ソノヨ　平砂――ヘーサ
納受――ノージュ　下知――ゲジ
遠干がた――トーヒガタ

ことばの中、または下に来るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　袖（ソデ）　控（ヒカ）へ　皇化（クワ）
讀替　仕（ツカマツ）り　必殺（ヒツサツ）　逆（サカ）さま　矢面（ヤモテ）　思案（シ）　二言（コト）　堅陣（ケン）　祈念（キ）　類（タグ）ひ

語句語法

「そもそも」「萬丈の青岩」「つづら折りなる道」「のぼるべきやうなし」「されども」「はや落ちたり」「かづら」「一の木戸口」「きつと」「甲武者」「雲霞の如く並びゐたり」「矢ざま」「射手」「おぼしき」「弓のつるをくひしめし」「矢束ね」「その勢決然として、あへて攻むべきやうもなし」「心ならずも支へたり」「名のりけるは」「かたじけなくも」「一天の君」「ひが目か」「萬乗の君」「おはします」「六波羅殿」「大和鍛冶」「矢じり」「少々用意仕りて候」「一筋受け

て御覧じ候へ」「三人張りの弓」「十三束三伏せの矢」「必殺のねらひ」「矢面」「立ちふさがりて」「御弓勢」「ここを遊ばし候へ」「ためし候はん」「腹巻」「などか通らざるべき」「思案」「ねらひを違へず」「眉間」「二言ともいはず」「兄弟同じ枕に倒れ」「大手」「からめ手」「をめき叫んで」「砂上道せまきに」「逆茂木」「横矢」「堅陣」「臣たるの道」「武具」「皇化」「民生を安んせん」「祈念」「黄金作りの太刀」「平砂」「納受したまふぞ」「進めやつはものども」「下知」「面目」「遠干がた」等は、指導を要する語句である。

次の如き助詞は朗讀により、文意に即してその働きを感得させる。

などか通らざるべき。
積け打ちにぞ投げつくる。
神も納受したまふぞ。
甲の下に腹巻を重ねて着たればこそ、前の矢を見ながら、ここを射よと胸をたたくらん。
遠攻めにこそしたりけれ。

次の如き敬語につき指導し、文意を理會させる。

かたじけなくも一天の君に命をささげまゐらせて、

萬乘の君のおはします城なれば、
皇化をたすけ奉つて、
臣が心をあはれみたまへ。
神も納受したまふぞ。

備考

參考資料

古文は特に簡明適確に語釋を與へてやる必要がある。左に參考のために重要な語句や語法に解說を施しておく。

山高くして一片の白雲峯を埋め、谷深くして萬丈の青岩道をさへぎる――對句を以て笠置山の山容を敍してゐる。青岩は苔のむしてゐる岩。

つづら折りなる道――右へ左へ曲りくねつた道。

岩を切つて堀とし、石をたたんで塀とせり――山城であるから堀塀といつても後世の城のそれとは趣を異にする。堀はから堀であらうし、塀といふのも石垣の類であらう。「たたむ」は積み重ねること。

官軍はや落ちたり――「落つ」は逃げ去ることで、官軍はもう逃げてしまつたの意。

「戰場落ち」「都落ち」の「落ち」に同じ。

一の木戸口――木戸は柵門である。敵襲を防ぐために設けた垣を柵といひ、それに設けた門を木戸といつた。後の發達したものが城門である。一の木戸は一番目の城門の意である。

きつと見あぐれば――「きつと」は元來「ちよつと」の意であるのが、轉じて「じつと」「よくよく」また「たしかに」などの意となつた。ここは後者の意である。

錦の御旗に日月を金銀にて打つて着けたるが――「日月を金銀で取り着けた錦の御旗が」の意である。「錦の御旗に日月を金銀で取り着けたのが」といつてもよい。

「打つて着ける」の「打つ」は「鍬形打つたるかぶと」の「打つ」と同じく「取りつける」意である。

やぐら――矢を射る座の意で、城の要所の建物をいふ。

矢ざま――「さま」は狹間で、矢を射るための隙間の意。

弓のつるをくひしめし――弦を口にくはへて濕らす。弦の切れないためである。

矢束ね解いて――箙に盛つた矢を動かないやうに結びつける紐を矢束ねといふ。

一天の君――一天は一天下で、天下こぞりての意、卽ち天が下こぞりてしろしめす

君の意で、天皇の御事を申しあげる。

ひが目か――「ひがめ」は「見まちがひ」のこと。「ひがめか」とここでいつてゐるのは、殆ど反語に近い語氣である。「よも見まちがひではあるまい」の意に近い。

萬乘の君――天皇の御事を申しあげる。元來乘は兵車の意で、昔支那で兵車萬乘を以て天子を稱したからである。

六波羅殿――當時の兩六波羅探題は、北條仲時と北條時益であつた。

大和鍛冶――大和國の鍛冶の意。大和は古來鍛冶に名のある地で、鎌倉時代には名工も多く出てゐる。

三人張り――弓の弦をかけるのに、三人で張る強い弓。一人で押し撓め、他の一人が鳥打の邊を押さへ、もう一人が弦をかける。なほ、錢三貫を弓の弦にかけ、矢束ほど弦間のひろがるのを三人張りといふ說がある。

十三束三伏せ――矢の長さを計るのに、手で一握り、卽ち親指を除いて四指の幅を束といひ、指一本の幅を伏せといふ。十三握つてなほ餘つた部分を指三本の幅ではかるのが十三束三伏せである。

矢面――矢の飛んで來る正面。

ここを遊ばし候へ――「ここを射てください」の意で、下の「胸をたたいて」と照應して「この胸を射よ」といふ意味。

腹卷――鎧の一種。前から左右をめぐつて、背で引き合はすやうになつてゐる。

袖も籠手もない。狩衣などの着込みに用ひ、また鎧の下に着込むこともあつた。

この者、甲の下に腹卷を重ねて着たればこそ……ここを射よと胸をたたくらん――上に「こそ」の係りがあるから「たたくらめ」と結ぶのが文法上正しいのであるが、原文にも「たたくらん」となつてゐる。これは途中に「前の矢を見ながら、ここを射よと」といふ句が挿入されてゐる關係上「こそ」の係りの勢が失はれ、「たたくらん」と普通の結びになつたものと思はれる。

必殺のねらひ――原文には「究竟のねらひ」とある。「極めてすぐれた」ことを「究竟」といふのであるが、兒童の理會を考へ「必殺」としたのである。

をめき叫んで――「をめく」は「わめく」「うめく」などと同類の語で、聲高く叫ぶことをいふ。

矢叫びの音ときの聲――「矢叫び」は矢を射て手答へした時「おう」または「ああ」と叫ぶ聲で「矢聲」ともいふ。「ときの聲」は、合圖の聲で、大將が「えいえい」と掛聲をし、軍

勢一同「おう」といふのがそれである。

本性房といふ僧――原文に「南都の般若寺より卷數を持つて參りたりける使本性房といふ大力の律僧のありけるが」とある。要するに平安時代の末から勢力を有した僧兵の類である。

砂上道せまきに――「砂上の道せまきところに」の意である。

逆茂木――棘木の枝を逆立てて垣のやうにし、敵の侵入を防ぐもの。

横矢――矢を側面から射ることを「横矢を射る」といふ。

連絡

初等科國語三「千早城」「錦の御旗」と連絡して取扱ふ。

初等科國史上「吉野山――建武のまつりごと」と連絡して取扱ふ。

四　敬語の使ひ方

教材の趣旨

初等科國語五「ことばと文字」同六「漢字の音と訓」などの教材によつて、ことばの本質を徐々に理論的に理會させ、國語に對する自覺と愛護の念を深めて來たのであるが、本教材はそれを受け、初等科國語八「國語の力」と呼應し、國語の特色である敬語の本質を兒童にわからせるとともに、日常身近なことばに卽して、具體的にその使用法を會得させようとしたものである。

醇正な國語の確立を期し、國語を大東亞の共通語となすべき今日、特に國體を反映し、皇國の輝かしい傳統の中から生まれ出た國語に於ける敬語の使用法を適切ならしめることは、國民教育上頗る肝要なことである。殊に敬心から發する敬語を兒童の身につけさすことは、逆に敬語によつて、兒童の敬心を培養する所以でもあり、その點を考へると、本教材の意義の重要さが了解されるであらう。

文章

「文化の進んだ國、教養の高い國民にあつては、禮儀を重んじ、ことばづかひをていねいにすることが、非常に大切なことになつてゐる」と、冒頭

まづ一流國民たる者の資格として、「ことばづかひをていねいにすること」が如何に大切であるかを述べて、論旨を展開する發端となしてゐる。

ことばづかひを丁寧にすることは、禮儀を重んじることであり、禮儀を重んじることは教養ある國民であり得ることである。隨つて、兒童のことばづかひを丁寧にすることは、りつぱな皇國民に仕あげるために、必要缺くべからざることである。それが、古來敬語の發達してゐるわが國語の場合特にいひ得られることで、敬語の使用を妥當にすることが、ことばを正しく、丁寧に話すことになるのである。だから、幼少のころから、「ぜひとも敬語の使ひ方をよく心得ておかなければならない」理由がある。

ことばを丁寧にすることは、相手に對して禮儀を失はないで、敬意を表すことになる。これが、われわれの日常のことばの上に如何に現れてゐるかを反省してみた場合、ある「特別なことば」を、われわれは常に用ひてゐることに氣づく」のである。この特別なことばが卽ち敬語で、以下敬語の例を日常兒童の用ひることばの中から引用して、實例に卽しながら、その使用に就いて親切に說明がなされてゐる。

敬意をことばの上に表すためには、直接相手に對して尊敬の念のこもつたことばを使ふとともに、また自分のことを謙遜したことばでいひ表すことになつてゐる。かういつたことばの使用を誤れば、敬語は成り立たないと同時に、その人の教養と人格までが疑はれるやうになる。そこで、相手を直接尊敬して使ふことばの例としては、「あなた」といふ代名詞と、「いらつしやる」「めしあがる」といふ動詞を擧げてそれをはつきりさせ、自分を謙遜していふ例としては、「わたくし」といふ代名詞や、「行く」を「まゐる」、「食ふ」を「いただく」、「する」を「いたす」といふ動詞の例を示し、「私もまゐりませう」、「もう十分にいただきました」といふ短文を擧げて、正しい敬語の使ひ方の實例を示してゐる。

このやうに、敬語は相手の身分の尊卑によつて、話す者の敬意をことばの上に表すことであるから、その使用法を誤れば、寧ろ滑稽で却つて

敬意を失することになる。その例として、當然卑下していふべき「自分のことや目下のもののことを」「私は、まだめしあがりません」とか、「妹たちも、きのふの祝賀式にいらつしやいました」などといへば、如何にをかしいかが示されてゐる。

敬語で注意すべきことは、こればかりではない。「自分の動作であつても、それが相手のためにする場合は」また特別な考慮が必要である。さうしだ場合には、たとへ「自分の動作であつても」それは自分のためにする動作ではなくて、「相手のためにする」ことであるから、當然敬語が用ひられる。それで、「私が御案内申しませう」とか、「では、一通りお話いたします」といふやうに、「御」や「お」をつけて敬語にする。それが了解されたならば、自然「相手のすることに、御やおをつけて敬ふのは、これまたいふまでもないことで、それを「決して御心配ください ますな」「お志、ありがたう存じます」といふ二つの例によつて明示してゐる。

このやうに、兒童に敬語を最もわかりやすく説明するため、まづ自分と他人との關係から説き始め、次いで自分と家族との關係に及んでゐる。祖父母・父母・兄姉・伯(叔)父母等の、長上に直接對して話す場合には、例へば「おとうさん、どこへおいでになりますか」といふやうに敬語を用ひなければならず、更に他人に自分の身内のことを話す場合には、例へば祖父母父母等のやうな目上の人のことであつても、自分を謙遜するのと同樣、謙遜していふべきことを種々の實例に卽して示してゐる。ところが、自分の身内以外の長上のことを、他人に話す場合には、敬語を用ひなければならないことをも併せ説いて、敬語の使用を誤らないやうに親切に説明してゐる。

このやうに、兒童を中心に、最も身近な身内の者に對する敬語から、家族のことを他人に話す場合へと進み、更に他人のことを、他人に聞かす場合といふやうに、だんだんむづかしい敬語の使用法を自然に兒童に會得させるやうに筆が進められてゐる。

かうして敬語使用の實際の場合に卽した一通りの説明を終つて、婦

人の使用する特殊な敬語に就いて略述し、家庭で用ひる臺所道具類等に「お」の字を附ける場合が多いことを指摘してある。しかもこの婦人のことばが、だんだん世間一般にも使用されるやうになつた。併し餘り丁寧過ぎることばは、却つて柔弱に聞えるものであり、更に「何でも御やおをつけさへすれば敬語になると思つたり、敬語を使ひさへすれば禮儀になると考へたりするのは、大きなあやまりで」、例へば「お宅のお犬がごはんを召しあがりました」といふが如き滑稽さへ生じるのである。だから、「敬語」の使用は、禮儀にかなふとともに、常に適正であることと、眞の敬意、すなはち敬ふ眞心がことばに現れることが最も大切である」と說いて、敬語の使用上注意すべき事柄として、禮儀にかなひ、適正な使用をなし、心の中にある敬意が、おのづからことばに現れなければならないことをいつてゐる。

このやうに、敬語の本質に就いて次第に筆を運び、最後の結論として、「敬語の使ひ方によつて、尊敬や謙遜の心をこまやかに表すことのできるのは、實にわが國語の一大特色であり、世界各國の言語にその例を見ないところである」と、敬語が國語のすぐれた特徵であることを述べてゐる。しかもそれが發達した理由として、「古來わが國民は、皇室を中心とし、至誠の心を表すためには、最上の敬語を用ひることをならはしとしてゐる」ことが揭げられ、なほ「長上を敬ふ家族制度の美風からも、ていねいなことばづかひが重んじられ」て來たことを擧げてゐる。結局「敬語がこれほど發達したのは」「わが國がらの尊さ」と「昔ながらの美風が」、直接「ことばの上に反映したのにほかならない」のを强調して、この文を結んでゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。まづ敬語の意味を大體明らかにし、その使ひ方に注意すべきことが書いてあることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、各節の節意を大體次の如く讀み取らせる。

一、教養のある國民は敬語の使ひ方を必得ておかなければならない。

二、敬語には相手のことを尊敬していふ場合と、自分のことを謙遜していふ場合とがある。

三、敬語を使ふいろいろな場合のことばづかひ。

四、女と男とはことばづかひに多少相違があるが、敬語は禮儀にかなふとともに常に適正であることと敬意の現れることが大切である。

五、敬語は國語の特色で、わが國がらの反映である。

この際注意を要することは、節意は文脈によりその要點を讀み取らせやうとするとともに、文例とよく結びつけて、敬語の意義を確實に理會させることである。

文意の理會にしたがひ、特に敬語の使ひ方に注意して話すことを練習し、讀みを深めて、敬語の使ひ方とその精神を感得させるやうに指導する。

新字讀替の文字は適切な機會を捉らへて、指導する。「述」「謙」「遜」「敬」「混」「柔」「適」「誠」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形、筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

目上の人の動作を述べるには、敬語を使はなければならない。

自分のことを謙遜していふのも相手を尊敬する故である。

「食ふ」を「いただく」といふのも謙遜したいひ方である。

妹たちも、きのふ祝賀式に行きました。

男が女のことばを混用すると柔弱に聞える。

敬語は適正に使ふことが大切である。

至誠の心を表すため最上の敬語を用ひる。

次のカナヅカヒに注意させる。

使ひ方
使ひさへすれば

いはなければ
いひ方
いふものがあつて
いふのが
いふのも
いふまでもない

いふのである
いふのと
いふよりは
いふなど

用ひてゐる
用ひる物品
用ひること

注意すべき發音文字ことば等

訛音方言

敬語といふもの――「ゲーゴユーモノ」と「ト」を落さないやうに注意する。

人――「シト」と訛らないやうに注意する。

場合――「バヤイ」と訛らないやうに注意する。

前でも――「マイデモ」と訛らないやうに注意する。

いつぱんに――「エツバンニ」の訛を矯正する。

すなはち――「スナハチ」といはないやうに注意する。

できる――「デケル」といはないやうに注意する。

發音

「御」――ゴ　　食ふ――クウ

身内――ミウチ　　をば等――オバトー

今日(二十九頁)――キョー　　今日(三十頁)――コンニチ

尊さ――トートサ

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　述べ　謙遜　混用　適正　至誠(セー)

讀替　食ふ　故(ユエ)　祝賀式　敬ふ　柔(ジュー)　弱(ジャク)

語句語法

「敬語」「文化」「教養」「特別」「心得て」「尊敬の意を表す」「動作」「めしあがる」「謙遜」「それ故」「祝賀式」「身内」「いつぱんに」「特殊」「家庭」「お召物」「混用」「敬意」「すなはち」「一大特色」「各國」「古來」「至誠」「最上」「長上」「家族制度」「反映」等は、指導を要する語句である。

次の如き語句は互に比較して、その意義を確實にし、その使用になれさせる。

敬語
尊敬
敬意
長上
目上
目下
特別
特殊
特色
使用
混用
他人
身内

次の如き文例によつて、副詞を指導し、その用法になれさせる。

特に、わが國語には敬語といふものがあつて、その使ひ方が特別に發達してゐる。

特別なことばを、われわれは常に用ひてゐることに氣づくであらう。

すでに謙遜したことばであり、

いつぱんに、女は男よりもいつそうていねいにものをいふのが、わが國のならはしである。

したがつて、女の使ふ敬語には、やや特殊のものがある。

實にわが國語の一大特色であり、

備考

連絡

初等科國語五「ことばと文字」と連絡して取扱ふ。

初等科修身二「ことばづかひ」と連絡して取扱ふ。

（以上　四月）

五　見わたせば

教材の趣旨

和歌はわが國初以來の長い傳統に立つ文學であり、和歌を理會することは、國語の傳統を理會する上に極めて肝要なことである。既に初等科國語五に戰陣和歌を掲げてこれが入門の第一歩とし、續いて同六に明治の和歌を收めて、次第にこれに親しませて來たのであるが、本卷では、和歌の傳統の漸く確立した古今和歌集・新古今和歌集の歌を掲げることとした。古典語と現代語との關係に氣附かせることによつて、國語の理會を一層深めるとともに、古人の豊かな詩情にふれしめ、歴史的感情に培はうとするものである。歌は古今和歌集四首、新古今和歌集三首であつて、古今和歌集は春と秋を、新古今和歌集は春・夏・秋を收めてある。冬の歌がないのは、適當な教材が見當らないからである。

文章

第一首――古今集卷一の歌で、春爛漫の感である。「花ざかりに京を見やりてよめる」の詞書がある。花ざかりの京都を見渡せば、若緑の柳と淡紅の櫻の花とが入りまじつて、ちやうど錦を繰り擴げたやうに美しい風景だといふので、柳の新緑と櫻の花の色の華やかな印象であり、春の都の駘蕩たる情趣であり、更にいへば太平を謳歌する平安時代人のおほらかな心境もさながらにうかがはれる。「都ぞ……なりける」は係り結びで意味が強まつてをり、「こきまぜて」は「入れまぜて」の意である。作者素性法師は、いはゆる六歌仙の一人である僧正遍照の子で、父子ともに有名な古今集の歌人である。

第二首――古今集卷二所收。これも櫻花爛漫の光景である。「山寺にまうでたりけるに」と詞書がある。櫻の花の咲き滿ちた山に一日を暮らし、そのまま櫻の花の中に宿を求めたが、その夜は夢の中にまで櫻が咲きかをり、落花紛々であつたといふので、讀むものの心に、おのづか

ら暖い春の情味が湧き起るやうな歌である。「やまべ」は「山のほとり」の意である。作者紀貫之は古今集の代表的歌人であつて、同集の撰者の第一人者である。

第三首――次の二首は秋の歌である。古今集卷四所收。「秋立つ日よめる」といふ詞書があるので、立秋の日に詠んだ歌であることがわかる。まだ夏だ、夏だと思つてゐる中に、今日はもう立秋である。さう思へばどこに秋が來たと目にはつきり見えるわけではないが、吹きわたる風の音に秋らしいものがあり、あゝ本當にもう秋だなと思ひ知つたといふのである。季節の推移に對して敏感な日本人の感覺がよく現れてゐる。「さやか」は「明らかに」「はつきりと」であり、「驚かれぬる」には輕い詠歎がからまつてをり、「驚く」は「はつと氣のつく」ことである。「風の音にぞ」の「ぞ」と「驚かれぬる」の「ぬる」は係り結びである。作者藤原敏行は、陸奥出羽按察使藤原富士麿の子で、書道の名手でもあつた。

第四首――古今集卷四所收。皎々たる月明の夜である。一片二片の白雲が浮かんでゐるのが一層深い情趣を催す。白雲の漂ふ月明の空を、羽と羽をうちかはすやうに仲よく並んで雁が飛んで行く、その雁の數までが數へられるやうに明かるい秋の月であるといふので、秋の月の澄み切つた美しさが極めて印象的に表されてゐる。

第五首――新古今集卷二所收。「山里にまかりてよみ侍りける」と詞書がある。これも櫻の歌であるが、しかし前の歌とは違つて、むしろ穩かな、靜かな、落ち着いた山里の夕暮である。折から山寺の日暮方の鐘がごうんと響き渡る。鐘の音に誘はれたかの如く櫻の花びらがはらはらと散りかかるといふので、歌舞伎劇の幕切れに見るやうな場面である。華やかな中に一抹の寂しさのある落花の詠である。「花ぞ散りける」の「ぞ」「ける」は係り結びである。作者能因法師は本名橘永愷（ながやす）、新古今集時代の著名な作家である。

第六首――新古今集卷四夏の部所收。「題しらず」と詞書がある。暑い道を疲れて遠く歩いて來た。ふと見ると、道の傍にこんもりと柳が

良不き開

茂り、その涼しげな木蔭には清冽な水が滾々と湧き出てゐる。やれありがたい、しばらくここで休まうと立ち止つたのであつたといふほどの意味である。「こそ」「つれ」は係り結びである。西行法師は、いふまでもなく古來有名な吟遊歌人で、この歌も多分旅中の詠と思はれる。

第七首――新古今集卷四秋の部所收。「崇德院に百首奉りけるに」と詞書がある。秋風になびいて、夜空に雲がかかつてゐる。その雲の切れ目から月が現れ、あざやかな光がさつと輝いた情景で、「たなびく」は横になびく意。「さやけさ」は「明らかさ」「あざやかさ」、「月の影」は「月の光」といふ意である。一片の雲もない明月ではなく、かへつて雲間の月を捉らへ、雲間から漏れる月光があざやかであると詠んだところに、この歌のねらひがある。作者藤原顯輔は、藤原顯季の第三子、新古今集の作者であり、自らも詞華集の撰者となつてゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。和歌教材であるから讀みを重んじその形式に現れた韻律を生かして讀ませ、春・夏・秋の歌であることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、それぞれの和歌について、春の柳と櫻、秋の風と月などを主題とした和歌の情景を想像させ、その趣を感得させるやうに指導する。

讀みを反復して、詩情を深め、自然に暗誦に導く。

新字「夢」は適切な機會に指導する。複雜な文字であるから、字形・筆順に注意し、確實に書かる。

暗誦を利用して全文を書寫させる。その際次のカナヅカヒに注意させる。

さくらを
ねたる夜は
目には
見えねども
打ちかはし
數さへ
いりおひ

絶え間

注意すべき發音文字ことば等

發音

秋來ぬ――アキキヌ　風の音――カゼノオト

白雲――シラクモ　秋の夜――アキノヨ

文字

新字　夢

語句語法

「ときませて」「春のにしき」「やどりして」「さやかに」「打ちかはし」「數さへ」「いりあひの鐘」「清水」「さやけさ」等は、指導を要する語句である。

次の如き係り結びは括弧内の普通の文の形と比較し、反復して讀ませることにより、文意の上より表現の強められたことを自然に感得させ、その間におのづから法則のあることを悟らせる。

都ぞ春のにしきなりける

（都は春のにしきなりけり）

花ぞ散りける

（花は散りけり）

音にぞおどろかれぬる

（音におどろかれぬ）

しばしとてこそ立ちとまりつれ

（しばしとて立ちとまりつ）

備考

連絡

初等科國語五「晴れたる山」同六「ばらの芽」と連絡して取扱に考慮する。

六　源氏物語

教材の趣旨

古今集新古今集の名歌を選んだ前課「見わたせば」に連繫して、ここに平安文化の一異彩である源氏物語の價値と、その作者紫式部を紹介し、

更にこの物語の極めて少部分を教材化して、すぐれた作品の一斑を窺はしめようとするものである。

源氏物語は、約九百年前わが國に出現した文學であり、時代からいつても質からいつても世界最初の大小説である。この誇るべき文學が、われらの祖先によつて生み出されてゐることに、われわれはまづ何よりもわが國文化の優秀性を具體的に認むべきである。

しかもこの大小説は、紫式部といふ一女性の手によつて創造されたものである。いはゆる女子どもとして卑める考へ方は、武家時代に於いて培はれた思想であつて、上代から中古にかけてのわが國の思想は、必ずしもさうでなかつた。神代上古に於いて尊貴を極めた女性の方方が、文化方面はおろか政治軍事にさへ顯著な事蹟を遺してゐられる。平安時代は、女子が文化史上めざましく活躍した時代で、特に漢文學といふ外來文化に束縛されなかつた女子に、當時の生活を國語を以て自在に描寫表現せしめ、國文學の逸品を遺さしめたことは、わが國文學史上、また國語史上最も注意を喚起するところである。歐洲に於いては、やつと近世に至つて行はれるやうになつた文學上の諸種の手法が、九百年前の源氏物語に堂々と、わが醇正な國語によつてなされてゐるのであり、われわれは源氏物語のあることによつて、わが國語が極めて精緻な描寫に適することをさへ立證された感がある。

源氏物語の文學的價値の絶大なことに就いては、眞摯な學者の意見の一致するところであるから、ここに重ねていふ必要を見ないのであるが、ただ大樹には大きな蔭が伴なふやうに、古來源氏物語ほど皮相な偏見から、惡罵にひとしい批評を蒙つた作品も少いであらう。それには種々の理由があり。世に書物といへば、經書の類のみを頭において考へた時代の學者もある。かうした人々が、一度小説といふものを見れば、淫靡の書であると考へるのは當然である。また近古時代、僧侶が學權を握り、宗教的な偏見から物語の創作を妄語邪淫とそしつたことも手傳つてゐる。もとより平安時代の貴族の生活そのものに、さうし

た批判を受けなければならないものはあるが、しかしそれは敢へて源氏物語が蒙るべき筋合ではなからう。いやしくも源氏物語は、つつましい女性の作物であり、戀愛は描いても、後世の作者が敢へてしたやうな官能的なものは殆ど存在しないといつてよい。源氏物語がいかにすぐれた文學であるかは、營々三十五年の研究によつて古事記傳を大成し、わが國體・國民精神の眞髓を闡明にした本居宣長をして、玉の小櫛の「もののあはれ論」によつてこれを絶讃せしめたことによつてもわかるであらう。

本教材は前後二段に分れ、後段は更に二段となつてゐる。前段は卽ち序であつて、ここに紫式部及び作品としての源氏物語を簡明に敍し、簡單な論評が加へてある。後段はいはば文例ともいふべき部分であるが、もちろん原文でなく、兒童の理會に適する現代口語を以て飜案したもので、特に兒童の心情に適する紫の君の生ひ立ちが主題になつてゐる。

源氏物語は小說であり、これを深く讀めば、そこに大きな理想や教訓を汲み取ることもできるのであるが、時代に大きな隔たりがあり、生活樣式その他に現代との著しい相違があるから、具體的な一々の場面が直ちに國民學校の教材とはなり得ない。指導に際してはよくこのことをわきまへ、源氏物語の梗概を話すことや、本教材の補充をなすことなどは、嚴に警戒すべきである。

文章

前段は序で、紫式部の人となりを述べ、次で當時の特殊事情であつた女性とかな文の關係から、源氏物語のやうなすぐれた創作が現れたこと、及びその價値について極めて簡潔に敍した文で、終りは後段の文例に移る橋渡しをなしてゐる。

兒童に共感させるため、特に書き出しは、紫式部日記にある式部幼時の逸話に起してある。父爲時は學者であり、隨つてこの聰明な子が男子であれば、漢文學を學んですぐれた學者になるであらうと歎じたの

である。兄は當時式部丞で、妹が紫式部と稱せられたのも、この兄の官名と關係があるらしく思はれる。

藤原宣孝の妻となつたことは系圖によつて知られるが、この宣孝は長保三年四月二十五日に歿した。紫式部日記は寛弘五年秋から同七年正月までの記事で、そのころ式部は三十歳か、それをやや越してゐたと推定される理由があるので、夫に別れたころ、紫式部は二十二三歳乃至二十四五歳であつたらう。夫に別れて宮仕(寛弘三年ごろ)するまでに數年の年月がある。さうして、宮仕のころには既に源氏物語のことが當時の貴族の間に取沙汰されてゐたのであるから、源氏物語は、夫の死後數年間に少くともその一部は書きあげられ、人に讀まれてゐたことがわかるのである。

紫式部が天才的であつたこと、しかも婦人として圓滿で深みがあり、特に謙讓であつたことは、紫式部日記や源氏物語に據つて考へられることで、これに就いては早く安藤爲章が主唱し、後世の學者の意見も大體一致してゐる。

かな文と女子との關係は、當時の特殊事情であり、この事情が女子をして創作に名をなさしめたのである。若し紫式部が男子であつたら、當時の學者となつて漢文の作をなしたであらうが、それでは到底創作によつて世界を驚倒させるやうな仕事はできなかつたに違ひない。そこに、國民文化としての國語、國語による創造といふ大問題がからんでをり、その反面に、外來文化依存に創造のないことをも物語つてゐるのである。

源氏物語五十四帖は、わが國の大小說であるばかりでなく、今日では世界的に批評され稱讃されてゐるのである。英國人ウェーリの飜譯以來、特に文藝批評家の注目するところとなつた。九百年前歐洲にはまだ何等見るべき小說文學のなかつた時代に、歐洲が近世に至つて用ひた種々の手法を、日本の一婦人が早くも試みてかくまでに成功してゐたからである。

文例は、源氏物語中理想的な女性として描かれてゐる紫の君の少女時代を敍した部分で、若紫と紅葉賀にその原據があるが、本教材ではこれを二段に仕組み、前後の關係を密接にするやうに工夫してある。なほこの文例は、よく兒童の理會し得る現代語に移してあり、しかもそこに兒童の生活が如實に描かれてゐるのであるから、文章は兒童自身の作る綴り方と距離のあるものでなく、隨つて紫式部といふ作者が、兒童に極めて親しみのあるものとなつて來るであらう。

〔一〕は、京都北山の僧庵に生活してゐる紫の君で、尼君はその母方の祖母であり、母は早く亡くなつたので、祖母のもとに育てられてゐるのである。

春の夕暮の、山の僧庵はいかにも靜かである。夕日がさし、西側のみすがあげられてゐるから、中のやうすはよく見える。尼さんの顏つきが「ふつくらとしてゐるが、目もとはだるさうで」と、細やかに書かれるゆゑんである。老いさらばいた老尼でなく、病身ながらふくよかさがあるところに美が捉らへられてゐる。

この室に「時々、女の子たちが」出入するのは、無邪氣に遊んでゐるのである。「十ばかりであらうか」以下は、紫の君の敍述で、着物は白に山吹色を重ねてゐる。「かけ出して來た女の子」は、無邪氣な態度としての表現である。元來、紫の君はその少女時代、無邪氣であどけなく、ませてゐない子として描き出されてゐるところに特徵があり、これがその環境の變化や、いろいろな體驗や、教育等によつて次第に理想的な女性に育つて行く過程が源氏物語に表現されてゐる。そこには幼さの中からすくすくと伸びて行くものを見つめてゐる作者の兒童觀、教育觀さへ窺はれるのである。「切りそろへた髪が」以下、特に活寫されてゐるが、髪の美しいことは、平安時代女性美の要件でもあつた。この子が尼さんのそばへ來て、しくしく泣き出すところに、文章發展の楔がある。

「子どもたちと、いひ合ひでもしたのですか」と尼さんが聞く。「いひ合ひ」は口喧嘩で、紫の君はさうしたこともする無邪氣な子どもである。

かういひながら見あげた尼さんの顔。とこの子の顔が似てゐるといふところに微細な活寫があり、しかも極めて自然な手法を用ひて讀者へ、兩者の血緣を暗示してゐる。それは後の尼さんのことばによつて裏づけられて行く。

「雀の子を、あの犬きが逃したの」――無邪氣な少女のことばである。「犬き」は女童で、小さい侍女であり、紫の君の遊び相手である。「犬き」「あてき」などといふ「き」は「君」の省略で、「兄き」「叔父き」などといふ後世のことばにそれがある。「きみ」は尊稱であるが、省略された「き」はむしろ卑稱に近い。

「かごに伏せておいたのに」――原文には「ふせごの中にこめたりつるものを」とある。寺の僧庵であるから、鳥籠などあらうはずはなく、これは伏せる籠で、下に香をたき、上に着物を掛けてにほひをたきしめるための籠である。

雀の逃げたのが紫の君にはさも一大事らしく書かれてある。そばにゐた女は紫の君の乳母であり、隨つて紫の君の肩を持つて「犬き」を「つかり者だから、ついゆだんをして」といひながら、雀を探しに行く。「乳母であるらしい」と、半ば讀者の判斷に任せたのも自然である。

乳母は行つた。あとは尼さんと紫の君と、今一人の侍女が居る。尼さんは諄々といひ聞かせてゐる。その中にも、それとなく紫の君の性質が敍せられてゐる。「まるで赤ちやんですね」といひ、「どうして、いつまでもかうなんでせう」といふのは尼さんのお小言であると同時に、おませでない紫の君の性行を裏から明らかにするものである。「生き物をいじめるといふことは」以下、いかにも尼さんらしい說法である。「さあ、ここへちよつとおすわりなさい」といはれて、おとなしくすわる紫の君は、すなほな少女であることを物語つてゐる。

「まあ何といふよい髮でせう」は、前の髮の敍述と呼應して、この子の美人たることを敍してゐる。しかも「もうあなたぐらゐになれば」以下、いまいよ以て紫の君は、年より幼きに過ぎてをり、「おかあさんは十二の時」以下、亡き母と比較されて、たしなめられてゐる。しかもこのことばで、

紫の君に母のないこと、その母の父は、母が十二の時に亡くなつたこと、隨つてこの祖母尼君は、その時以來夫に死別したことなど、極めて複雜な關係が推察されるやうに、しかも簡潔に表現されてゐるのである。

このお小言を聞きながら、紫の君は目を伏せてゐたが、とうとううつ伏せになり、泣き入つてしまつた。さすがに身の上の悲しさを感じたのであらう。しかも「とたんに美しい髪が」と、作者は事の機微を捉らへる描寫を忘れてゐない。

〔二〕は、紅葉賀の卷に描かれてゐる紫の君を主題に、教材として前後を補足し、主題を書きひろげた文である。若紫の卷で、すでに祖母君と死別した紫の君が、源氏に引き取られることが見え、末摘花の卷にもその後のやうすが描かれてゐる。源氏の繼母藤壺女御の御兄兵部卿宮が紫の君の父である關係上、血緣はないが源氏と紫の君とはいとこの關係になる。源氏が紫の君に畫をかいて見せたことは、末摘花の卷に見えてゐる。

「お正月になつた」以下が紅葉賀の卷にある情景で、この段の中心である。「お正月が來たから、あなたも少しは大人らしくなつたでせうね」といふ源氏のことばの反面に、〔一〕と呼應して紫の君の幼さ、あどけなさが問題になつてゐる。

果して紫の君は、人形遊びに餘念がない。「りつぱな書棚」は、原文に「三尺の御厨子」とある。その御厨子に、人形や、家や、道具が並べてあるのは、そぞろに後世の雛祭を思はせる。

「豆まきをするつて」以下、紫の君の無邪氣な幼いことばであり、例の心なしの犬きのことも出てゐる。豆まきは追儺で、今は節分に行ふが、平安時代では十二月大晦日に、宮中で行はせられる儀式であつた。

それに對して「よしよし。あとで、りつぱにつくろはせてあげよう」以下源氏のことばも、幼い者に對する兄らしいことばである。

人形の一つを「おばあさん」といはせたのは、亡くなつた祖母への思慕の具體化であり、他の一つを「にいさん」として見たてさせたのは、源氏に

開き不良

對する妹らしい親しさの具體化である。

「さあ、御參内だ」以下原文にはただ「雛の中の源氏の君つくろひ立てて内裏へ參らせなどし給ふ」とあるのを教材化して具體的に表現したのである。

なほ〔一〕と〔二〕と相通じて紫の君の幼さ無邪氣さが一貫してゐる一面に、〔一〕の悲哀な空氣と〔二〕の明朗な環境とが對照してゐることに注意すべきであり、末文の鶯の聲は〔二〕のかうした明朗性を象徴するといつてよからう。

取扱の要點

本文は紫式部の傳記と現代語に寫された文例とから成つてゐる。指導にあたつては傳記の方を先にし、紫式部の人となりを明らかにして文例の取扱に及ぶがよい。文章を讀ませ困難な發音文字語句等について指導し、確實に讀ませる。

傳記については、紫式部が女でありながら文學の才に秀で、しかも婦人として圓滿な人であり、その著源氏物語は世にすぐれた作品であることを讀み取らせる。

文例の部は傳記の部の末尾と關係づけて、〔一〕では僧庵の春の夕ぐれ、横結してゐた尼さんと雀の子に夢中になつてゐる女の子の身の上を明らかにするやうにし、〔二〕では一と閑聯して源氏の家へ引き取られた女の子――紫の君が死んだおばあさんのことを思ひ出して悲しむのを、源氏がいろいろと慰めたり、人形遊びの相手になつたりしてゐる二人の生活を讀み取らせ、文全體に流れてゐる人間を生き生きと美しく、こまやかに寫し出してゐる點を味はせるやうに指導する。

話すことは主として傳記の取扱に於いて式部の身分、人となり、源氏物語等について練習し、文例の部は朗讀を主として指導するがよい。朗讀はものやはらかな描寫の氣分が漂ふやうに落ち着いた靜かな調子で讀ませるやうにする。

新字、讀替文字、略字は適切な機會を捉らへて指導する。「偉」「佛」「夢」「櫛」等複雜な文字は扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

紫式部は、文學の天才であつたばかりか、婦人としても圓滿な深みのある人でした。

源氏物語は、わが國の偉大な小説である。

髪が扇のやうに廣がつて、肩の邊に掛る。

雀の子を、あの犬きが逃したの。

あなたは雀の子に夢中なんですか。

生き物をいじめるといふことは、佛樣に對しても申しわけがありません。

櫛を使ふことをおきらひだが、何といふよい髪でせう。

さあ、御參内だ。車にお召しください。

次のカナヅカヒに注意させる。

上東門院に仕へて
かう考へると
ほめたたへられ
花を供へて

「はい」と答へて

暮れさう
だるさう
くやしさう

「さうさう

「さういつて

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

はな（花）――ハナ　　はな（鼻）――ハナ

かみ（髪）――カミ　　かみ（上）――カミ

ゑ（絵）を――エオ　　え（柄）を――エオ

あさ（朝）――アサ　　あさ（麻）――アサ

訛音方言

できた――「デケタ」といはないやうに注意する。

着物――「キリモン」の方言を矯正する。

かはいく――「カワユク」といはないやうに注意する。

なでながら――「ナゼナガラ」と訛らないやうに注意する。

人形――「ネンギョー」と訛らないやうに注意する。

聲――「コイ」と訛らないやうに注意する。

發音

しまふ――シマウ　　寫し出す――ウツシダス
二人――フタリ　　今日(三十七頁)――コン・ニチ
かけ出して――カケダシテ　　肩の邊――カタノヘン
使ふ――ツカウ　　次の間――ツギノマ
今日(四十五頁)――キョー
ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　天才(サイ)　偉(イ)大　扇(オーギ)　雀(スズメ)　佛(ホトケ)(仏)樣　櫛(クシ)
讀替　夢(ム)中　參(サン)內

語句語法

「史記」「學者」「歎息」「不幸」「一世」「文學の天才」「婦人」「圓藺」「當時」「かな文」「漢文」「自由自在」「偉大」「小說」「ほめたたへられ」「一節」「僧庵」「佛壇」「病身」「うつかり者」「乳母」「佛樣」「申しわけ」「目を伏せて」「うつ伏せ」「いとこ」「めんだう」「書棚」「つくろはせて」「參內」「車にお召しください」等は、指導を要する語句である。

次の如きいひ表し方について指導し、文意を理會させる。

式部は、文學の天才であつたばかりか、婦人としてもまことに圓藺な、深みのある人でした。

源氏物語五十四帖は、わが國の偉大な小說であるばかりでなく、今日では、世界にすぐれた文學としてほめたたへられてゐます。

次の文例の如き人物背景等が描寫的に描かれてある點を特に指導し、文意を理會させる。

のどかな春の日は、暮れさうでなかなか暮れない。
きれいに作つたしば垣の內の僧庵に、折から夕日がさして、西側はみすがあげられ、年とつた上品な尼さんが佛壇に花を供へて、靜かにお經を讀んでゐる。
顏はふつくらとしてゐるが、目もとはさもだるさうで、病身らしく見える。
十ばかりであらうか、白い着物の上に山吹色の着物を重ねて、かけ出して來た女の子は、何といふかはいらしい子であらう。
切りそろへた髮が、ともすると扇のやうに廣がつて、肩の邊にゆらゆら掛るのが、目だつて美しく見える。
さすがに子どもは、じつと聞きながら目を伏せてゐたが、とうとううつ伏せにな

つて、泣き入つてしまつた。とたんに美しい髪がばらはらと前へこぼれかかる。

庭では、うぐひすが美しい聲で「ほうほけきよ。」と鳴いた。

次の如き對話は生き生きと寫し出されてあるから、その點についても指導し、文意の理會を深めるやうにする。

「雀の子を、あの犬きが逃したの。かごに伏せておいたのに。」

「まあ、しやうのない犬きですこと。」

「せつかくなれて、かはいくなつてゐたのに。」

「いやもう、あなたはまるで赤ちやんですね。」

「わたしがこんなに病氣で、いつとも知れない身になつてゐるのに、あなたは雀の子に夢中なんですか。」

「櫛を使ふことをおきらひだが、それにしては、まあ何といふよい髪でせう。」

「豆まきをするつて、このお人形さんを犬きがこはしました。わたしがつくろつたのですよ。」

「さうさう。このおにいさんにもいい着物を着せてあげなければ。」

「さあ、御參内だ。車にお召しください。犬きや、おまへはおにいさんのお供をするのですよ。」

備考

連絡

初等科國史上「京都と地方——平安京」と連絡して取扱ふ。

七　姉

教材の趣旨

本教材は、嫁いで行く姉のことを、その妹が、女の子らしい氣持で、綴り方風に記した生活文である。即ち嫁ぐ日の賑かさ、美しさの中にただよふ一種の嚴かさ、もの寂しさなどを敍述しながら、兄弟愛と家庭愛とを表現し、わが醇風美俗の精神を感得せしめようとするものである。

なほ本教材は、兒童の心情に卽して平明に表現され、ある程度の心理描寫もしてあるから、綴り方と關聯し、表現能力を高め、ものの見方とそ

の表し方とを指導すべきである。

文章

全文は、兒童の文として、ごく平易に書かれてはゐるが、そのことばの裏には、豐かな感情や澄んだ知性などが壓縮されてをり、うつかりすると見落してしまひさうな淡々たる敍述の中にも、種々な陰影が潜んでゐる。

まづ「今日、ねえさんがお嫁入りをします」と、文章の主題を冒頭にかかげ、すべては、この事柄から派生した心持であり、情景であるやうに全文が仕組まれてゐる。

その妹は、教室にありながら「心がちつとも落ち着かず、「先生のおつしやることがつい耳をす通りしたり、日ごろ氣にもかけない雀などに、心がひかれたりする。いつたい「ねえさんが、よその人になつてしまふ」なんて、「何だかうそのやうだ」と思はれたり、いや、今日たしかによそへ行つてしまふのだと思ひ直したり、さうした落ち着かぬ心、そはそはした態度が、思ひがけなく顏から火の出るやうな恥づかしさを覺えるはめに陷る。教室中の友だちが、一齊に自分の顏を見つめてゐる。先生もじつとこちらを見てゐられる。どうしたのか。きつと「先生が私に何かおつしやつた」に違ひない。それを自分が氣づかないでゐたのだ。「みんなの顏」を見るのも恥づかしい。先生の顏をまともに見あげることもできない。この邊、教室内の有樣が生き生きと斷敍法によつて敍述されてゐる。「急ぎ足で學校の門を」出たのも、落ち着かない氣持の現れである。

家に「歸つてみると」、玄關口からしてふだんのやうすと違つてゐて、見なれない下駄が何足も並んでゐる。奥の方では「がやがや人聲がして」これも、いつもとは違つた氣はひで、何だか自分の家ではないやうにさへ感じられ、かうして、少女らしいものの感じ方が、いたるところにじみ出てゐる。

「髮結ひさんが、一生けんめいに、ねえさんのお支度をしてゐる」といふ

あたりから、姉が登場し、「きれいに髪を結つて、晴れ着を着せられたねえさん」といふところで、大寫しに描き出されてゐる。「きれいに髪を結つて」とか、「晴れ着」とか、「着せられた」とかいふ短いことばに、うひうひしい花嫁姿が敍されてゐるが、妹から見れば「まるでよその人のやうに見える」ほど變つてゐるのである。分家のをばさんが、「ああ、いいお嫁さんができました」といつてほめ、「おかあさんも、そばでにこにこしながら眺める」。みんなの視線は、姉一人の姿に注がれる。

お座數の方では、「山田のをぢさん」とをばさんが、おとうさんとお話をしてゐる。いつもなら、學校から歸つて來れば、おかあさんと、すぐお話もできるし、おとうさんの側にも行けるし、ねえさんとは、手をつないで遊ぶこともできるのに、今日は、みんなそれぞれ別の世界にゐて、自分一人がとり殘されたやうで、取りつく島がない。それよりも「あのねえさんが、よその人になつてしまふのかしら」といふ今朝考へたことが、また心に思ひ返され、「何だかさびしい氣がして」やはり落ち着けないのであ

る。この動きがちな自分の心持を靜めようと、「自分の部屋へもどり」、「雜誌を開い」て見るのだが、「字も繪もてんで目には」はいらない。徒らに頁をめくつてゐるだけだ。ここらの心理描寫は、兒童の心情をよくうがつてゐる。

心も空にただ一人すわつてゐると、部屋の「ふすまがすうと」おいた。思はずそちらを見ると、そこには、「着かざつたねえさんがはいつて」來るではないか。眩しいやうな感じがする。妹は、いよいよお別れしなければならない時がやつて來たのだと思ふ。じつと姉を見あげると、姉は「雪ちやん」と「少しかすれた聲で」呼びかける。姉にしてみれば、生まれてから、今まで育つて來た家を、今離れてしまふ直前であり、一生一度の晴れの儀式に臨むので、心もおのづから緊張して聲もかすれてゐるのである。名を呼ばれて妹は、「ねえさん、おめでたう」と、心から挨拶をするにはしたが、いひたいことはまだたくさんある。辛うじて「やつとこれだけ」のことをいふことができた。

姉は「私がゐなくなつても、さびしがらないで、よく勉強してください ね」と妹をいたはり勵ます。妹は「はい」とはつきり返事をして、去り行く姉を安心させようとする。かういふ中にも、妹は今までのことが走馬燈のやうに思ひ出されて來る。どれくらゐ「ねえさん」にいろいろ教へていただいた」か知れない。それが明日からは、自分一人で何でもやつて行かなければならない。別離の感情が新しくこみあげて來る。けれども「生まれた家を出て行くのです」といふ凛とした姉の決意を耳にしては、妹も心がひきしまり、いつまでも別れを惜しんではゐられないと反省する。さうして、女の人が嫁いで行くのは、よその家のためであるといつしよにこの家のためであると考へ、ひいては、お國のためであるとも考へられて來る。してみると、この大きな務の前には、小さな自分の氣持などは、當然抑へられなければならない。ちやうど男の人が、兵隊さんになつて行くのと同じことだとも思はれて來て、妹もいつか嚴肅な氣持になり、身じまひを正して、姉の最後のことばに耳を傾けるのである。姉は更にことばをつゞいで「どうぞ私に代つて、おとうさんやおかあさんを、だいじにしてあげてくださいね」といふ。溢れるばかりの孝心と友愛とが、この中に現れてをり、わが國醇風美俗の精神が具體的に描かれてゐる。終りに「おかあさんは、さうお丈夫ではないんですから」とつけ加へたところに、姉らしいやさしい感情が一入しのばれる。かうしてさとされ、後事を托されては、さすがに妹も、その任の重いことを悟り、姉に代つてやりますと、心に誓ふ。そこで「ねえさん大丈夫やります」と元氣よくいひたいのだが、そのことばが、咽喉から出て來ない。「だまつてうなづ」くばかりである。これが、この場合却つて、眞實な感じを出してゐるであらう。また「ねえさん、これまでずゐぶんわがままをいつてすみませんでした」と、かう一言おわびもしたかつた。しかし、やはりいへない。「それがのどまで出てゐる」のにいへない。切實な思ひであればあるほど、ことばがいへなくなる。けれども、いはず語らずのうちに姉の念願は妹に通ひ、妹のけなげな決心は姉に響いてゐる。

ここから以下の文章は、夕方及びその夜のやうすを描き出して、全文をしめくくつてある。「迎への車」で「ねえさんは、山田のをぢさんをばさんといつしよに車に」乘つて家を去つて行く。見送つたあとは、急にひつそりかんとする。「おとうさんも、おかあさんも」「めでたい、めでたい」と、何度も同じことを口ぐせのやうに繰り返していふが、ともすると「話がとだえがちで」ある。親として娘を嫁がせてしまつた後のほつとした安心喜び滿足があるとともに、どこかにさびしさが漂つてゐる。そのさびしさをまぎらはすかのやうに、「にいさん」が「時々おどけたことをいつて、みんなを笑はせる。その中學生らしい無邪氣さに、家の中が賑はされ、明かるい家庭情景をもつて、本文が結ばれてゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音文字語句等について指導し、確實に讀ませる。生活を書いた文章であるから、表現は割合ひにやさしいが、文の想には兒童としてやや深いところがあるから、靜かに落ち着いて雪子の心持を考へて讀ませ、姉の嫁入りした日の心持を中心にして書いた文であることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、雪子が教室で落ち着かない氣持でそはそはしてゐたこと、家はにぎやかであるが、雪子はさびしい氣持に沈んでゐると、姉が來て別れのことばを交して名殘を惜しむ心情や、その夜の家のやうすなどを讀み取らせる。

文意の理會に即して、話すことを練習し、讀みを深めて、姉の嫁入り日に於ける雪子の氣持に同感させるやうに指導する。

新字「誌」は適切な機會を捉らへて字形筆順に注意して指導する。

次の如き文によつて、書取を練習させる。

今日、ねえさんがお嫁入りをします。

きれいに髪を結つて、晴れ着を着ました。

雜誌を開きましたが、字も繪も目にはいりません。

私がゐなくなつても、よく勉強してくださいね。

夕方迎への車が來ました。

次のカナヅカヒに注意させる。

「さう思ふと

さういへば
さうお丈夫ではない
おめでたう
ありがたう

注意すべき發音 文字 ことば等

アクセント

ひ(火)の——ヒ　　ひ(日)の——ヒ

訛音方言

先生——「シェンシェー」と訛らないやうに注意する。
結つて——「イッテ」と訛らないやうに注意する。
さびしい——「サミシー」といはないやうに注意する。
着——「エー」と長くいはないやうに注意する。
目——「メー」と長くいはないやうに注意する。
笑はせ——「ワラワシ」といはないやうに注意する。

發音

初夏——ショカ　　しまふ——シマウ
がやがや——ガヤガヤ　　生まれ——ンマレ
夕方——ユーガタ　　その夜——ソノヨ
ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　雑誌

語句語法

「す通り」「うららか」「顔が火のやうになる」「髪結ひさん」「分家」「てんで目にはいりませんん」「ふすま」「うなづきました」「口ぐせのやうに」「とだえがち」「おどけたこと」等は、指導を要する語句である。

次の如きいひ表し方は、主語が並列されてゐることに注意し、「先生の目とみんなの笑つた顔とが私に集つてゐます」の意であることを理會させる。

先生の目が、みんなの笑つた顔が、私に集つてゐます。

次の如き文例について、ウ音便に注意し、カナヅカヒ指導の心構とする。

ねえさん、おめでたう。

ありがたう。

備考

連絡

初等科國語四「母の日」と連絡し取扱に考慮する。

初等科音樂四「姉」と連絡して取扱ふ。

八　日本海海戰

教材の趣旨

明治三十七八年の戰役は、わが國運を賭しての一大戰爭であつたが、殊に日本海海戰はこの戰役の最後を飾つた棹尾の大決戰で、この大勝利によつてロシヤに戰爭を斷念せしめることができたのであつた。今日大東亞戰爭に於ける帝國海軍の赫々たる戰果も、既にここにその基礎が据ゑられたといふことができよう。この決戰の日を以て海軍記念日と定められたのも、ゆゑあることである。本教材は、海軍記念日のころを選び、決戰の次第を敍して帝國海軍の歴史的偉業を偲ばせ、愛國の熱情に培はうとするものである。複雜多岐な戰鬪の經過が時間的順序に從つて整然と述べられてあるから、文章の發展過程を正しく確實に把握させることが肝要であつて、そこに國語教材としての意義がある。

文章

簡潔な文語文で、敍述は序に相當する戰鬪開始前の狀況と、本文である戰鬪經過と、結びに當る戰果とからなつてゐる。

冒頭、まづ日本海海戰前に於ける日露兩國の戰爭の態勢を簡明に示した。卽ち露國は旅順・ウラジオストックの艦隊が破れるや、歐洲にあつたバルチック艦隊を第二太平洋艦隊に編成して、明治三十七年十月十五日太平洋方面へ廻航し、旅順の陷落を見るに及んで、更に翌明治三十八年二月十六日、第三太平洋艦隊を編成して東航せしめた。この艦

隊は遙々大航海をして、五月初旬佛領安南のカムラン灣に集結し、三十八隻よりなる大艦隊の編成を整へてウラジオストックへ向かはうとしたのであつた。「露國が連敗の勢を回復せんため」とは緒戰以來或ひは仁川沖旅順港外朝鮮海峽等に於ける露國海軍の敗戰を示すとともに、旅順要塞の陷落及び滿洲各地に於ける露國陸軍の敗北をも意味してゐる。露國はここに於いて、前述の大艦隊を廻航して、制海權を確保し、わが兵站線を絶つて大勢を挽回しようと試みたのである。ウラジオストックに向かふ敵艦隊が、宗谷津輕朝鮮の三海峽中、いづれを通過するかは問題であつたが、東郷司令長官はこれを朝鮮海峽と斷定し、主力をここに集結して敵を待つたのであつた。以上は戰鬪開始前の狀況であつて、おのづから後段の序となつてゐる。

五月二十七日午前三時過ぎ、わが見張りの假裝巡洋艦信濃丸が、左舷遙かに一つの火光を發見し、これに接近してそれが露國の大艦隊であることを確認するや、午前四時四十五分、「敵艦見ゆ」の報告を打つた。こ

こに於いてわが艦隊は直ちに出動し、まづ小巡洋艦隊が敵艦隊と接觸し、これを見張りつつ沖島附近まで並行して進んで行つた。東郷司令長官の戰鬪詳報には、「巡洋艦隊（片岡中將直率）、東郷（正路）戰隊、續イテ出羽戰隊モ午前十時十一時ノ交、壹岐對馬ノ間ニ於テ敵ト觸接シ、爾後沖島附近ニ至ルマデ、此ノ諸隊ハ時々砲擊ヲ受ケシモ、始終能ク之ト觸接ヲ保持シ、詳ニ時々刻々ノ敵情ヲ電報セシカバ云々」とある。以上は主力の戰鬪開始前に於ける前哨戰である。

午後六時四十五分、わが主力は左舷前方遠く敵影を認め、それから漸次接近して午後一時五十五分に至るや、わが旗艦三笠に、戰鬪旗が揚つた。同時に、あの有名な信號旗があげられ、命令が各艦に傳へられたのである。簡潔なことばの中に、無限の決意が示されてをり、わが軍の士氣大いに振るふ」も、さこそと思はれる。東郷司令長官直率の六隻の主戰艦隊は、第一艦隊の第一戰隊で、三笠・敷島・富士・朝日・春日・日進の六隻であり、また上村艦隊は第二艦隊の第二戰隊で出雲・吾妻・常磐・八雲・淺間・磐

手の六隻であつて、この日、上村第二艦隊司令長官指揮の下に終始主戰艦隊と行動を共にして力戰した。片岡・出羽・瓜生・東郷（正路）の諸隊は、いづれも巡洋艦隊で敵の後尾をねらつた。

わが艦隊は、この時南西に航し、敵に對して反航通過するやうに見せかけてゐたが、急に東北東に敵前大旋回をし、敵の前路を壓迫した。これが歴史的に有名ないはゆる丁字戰法で、東郷司令長官の卓拔な戰略と、斷乎たる決斷によつたものである。大旋回を行つた後始めて砲擊を開始したが、平生の猛訓練の結果は忽ち現れ、交戰僅かの間に敵は艦列を亂し、中には早くも戰鬪能力を失つて戰列外に落伍するものも出て來た。

「風叫び海怒りて」――當日の天候の形容であるとともに、大海戰の雰圍氣をも象徴してゐる。東郷司令長官の出動報告にも、「天氣晴朗ナレドモ浪高シ」とある。しかるに、わが砲員は、訓練に訓練を重ねてゐたから、砲彈はよく命中し、先頭艦「オスラービヤ」が大火災を起して戰列を離れたのを始めとして、旗艦スウォーロフ、二番艦アレクサンドル二世も大火災を生じて戰列外に脱れ、後續の諸艦も相ついで火災を起して、その煙は折からの西風に靡き、海上一帶を蔽つた。これが、午後二時四十五分ごろの戰況で、すでにこの時彼我の勝敗は定まつたのである。「われは、これに乘じてすかさず攻擊せしかば」――敵は艦列漸く亂れ、進路を變へ、わが後尾を廻つて北方に逃れ去らうとしたが、われはすかさず再び敵を南方に擊壓して猛射したので、敵は次第に損害を增し、この間わが第四・第五兩驅逐隊の水雷攻擊をも受け、敵の太平洋第二戰艦隊の旗艦スウォーロフはここに沈沒し、その他の諸艦も多く沈沒した。

更に夜戰に入るや、午後八時十五分の第二驅逐隊の突進を始めとして、各驅逐隊・水雷艇隊が一時に突進して敵の周圍に蝟集し、午後十一時ごろに至るまで連續激烈な肉薄攻擊を行つた。これによつて敵の損害は益〻甚しく、陣形全く亂れ、大混亂となつた。以上が五月二十七日の戰鬪經過で、本課の中心部分である。

二十八日、わが艦隊は欝陵島の南方二十海里に集結し、敵艦いづこと待つうち、午前五時過ぎ片岡隊が南方に敵影を發見した。そこで直ちにわが艦隊は急行し、優勢な兵力を以て十時十五分全く敵を包圍した。ニコライ一世に坐乘してゐた敵將ネボカトフは、到底敵し得ないことを知り、麾下を率ゐてここに降伏した。

これより先、敵の司令長官ロジェストウェンスキー中將は、前日の戰鬪に重傷を負つて、驅逐艦ブイヌイに移り、更に驅逐艦ベドウイに移乘してウラジオストックに遁走しつつあつた。殘敵搜索に馳驅してゐたわが驅逐艦漣陽炎は、午後三時ごろ欝陵島の南方に二條の煤煙を認め、これを急追して、その一隻を降伏せしめた。慮らずもその驅逐艦にはロジェストウェンスキー中將その人が、人事不省のまま坐乘してゐたのである。以上が日本海海戰の戰鬪經過の概要である。

以下は結びとして、まづ敵の損害を掲げ、わが損害をこれと對照して、その勝利がいかに壓倒的なものであつたかを示した上、そのやうな奇蹟的大勝利を收め得たゆえんを、東郷司令長官の發した戰況報告を原文のまま掲げることによつて明らかにした。さうして、この大勝利が明治天皇の上聞に達するや、天皇は畏くも東郷司令長官に勅語を賜ひ、將兵の忠烈を嘉し給うたのである。これを拜しては、帝國海軍の將兵たるものゝどうして感泣せずにゐられようか。「將兵すべて感泣せざるはなかりき」は、簡潔な表現の中に無限の感動が盛られてゐて、全文のしめくくりをなしてゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。文語文で難語句も多いから、特に讀みに力を注いで指導し、日露戰爭に於ける日本海海戰に大勝利を得たことをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、節意に注意させ、大體次のやうに讀み取らせる。

一、彼我兩艦隊の作戰の計

二、敵艦が見えたので沖島附近にいざなひ寄らせた。

三、皇國興廢の信號旗とわが艦隊の陣形
四、二十七日の戰況――敵艦隊を擊破し勝敗すでに定まる
五、二十八日の戰況――わが艦隊に包圍されたのでネボガトフ少將は降服し、司令長官ロジェストウェンスキー中將は捕らへられた
六、兩日の戰果――わが軍の大勝
七、東鄕司令長官の戰況報告の一節と、司令長官にたまへる勅語

文意の理會に卽し、口語で話すことを練習し、讀みを深めて日本海海戰の戰果の偉大なこととと、わが將兵の敢戰よく敵艦隊を擊滅した忠烈な精神に感じさせるやうに指導する。

新字、讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「擧」「此」「損」「降」「暮」「我」「仰」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形、筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

「此の一戰にあり。」

海軍の全勢力を擧げて編成す。

距離六千メートルに至りて始めて應戰せり。

敵は、算を亂して逃れ去らんとす。

敵の諸艦皆多大の損害をかうむれり。

退路を絶ちて、まつたく敵を包圍せり。

その部下とともに降伏せり。

きのふの戰鬪に傷を負ひ、幕僚とともに一驅逐艦に移れり。

我ガ艦隊ハヨク勝ヲ制シテ、前記ノ如キ戰果ヲ收メ得タリ。

歷代神靈ノ加護ニヨルモノト信仰スルノ外ナシ。

感激ノ極言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。

汝等ノ忠烈ニヨリ、祖宗ノ神靈ニコタフルヲ得ルヲヨロコブ。

將兵、すべて感泣せざるはなかりき。

次のカナヅカヒに注意させる。

迎へ　撃つ
さへぎり
捕らへらる
長官にたまへる

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

うみ(海)——ウミ　　うみ(膿)——ウミ

てん(天)——テン　　てん(點)——テン

訛音方言

ほとんど——「ホトント」といはないやうに注意する。

きのふ——「キニョー」の訛を矯正する。

御稜威——「ミイズ」と濁らないやうに注意する。

發音

連敗の勢——レンパイノイキオイ　　計を定め——ケーオサダメ

四時四十五分——ヨジシジューゴフン　　五十五分——ゴジューゴフン

上村艦隊——カミムラカンタイ　　正路——マサミチ

撃ち出す——ウチイダス　　おほふ——オオー

夜に入りて——ヨニイリテ　　四隻——シセキ

感激ノ極——カンゲキノキョク

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　此の(コ)　算(サン)　損害(ソンガイ)　如キ(ゴトキ)

讀替　擧げ(アゲ)　經て(ヘテ)　至り(イタリ)　逃れ(ノガレ)　包(ホー)囲　降(コー)服　幕僚(バクリョウ)　我ガ(ワガ)　收(オサ)メ

所(トコロ)　信仰(コー)　外(ホカ)　言フ(イフ)　汝等(ナンジラ)　忠烈(チューレツ)　感泣(カンキュー)

語句語法

「連敗の勢」「回復」「全勢力を擧げて」「編成」「近海に迎へ撃つの計」「集中」「哨艦」「無線電信」「司令長官」「全軍」「出動」「いざなひ寄せしむ」「戰闘旗」「信號旗」「令を各艦にくだせり」「いはく」「皇國の興廢此の一戰にあり」「各員一層奮勵努力せよ」「士氣」「主戰艦隊」「主力」「砲火を開始せしが」「前路をさへぎり」「應戰」「砲撃」「艦列」「戰列」「沈着」「熟練」「砲員」「砲彈」「命中」「勝敗すでに定まれり」「算を亂して逃れ去らんとす」「これに乘じて」「すかさず」「多大」「損害」「かうむり」「沈沒」「無二無三」「四分五裂」「おほむね」「進路をふさぎ」「退路」「包囲」「覺悟したりけん」「降服」「幕僚」「追撃」「撃沈」「捕獲」「捕虜」「末尾」「聯合艦隊」「勝ヲ制シテ」「前記ノ如キ」「奇績」「御稜威ノ致ス所ニシテ」「固ヨリ」「人爲ノ能クスベキニアラズ」「損失」「僅少」「加護」「信仰スルノ外ナク」「勇進敢戰」「麾下將卒」「成果」「感激ノ極」「言フ所ヲ知

ラザルモノノ如シ」「勝報」「上聞に達するや」「朕」「忠烈」「感泣せざるはなかりき」等は、指導を要する語句である。

次の如き語句は互に比較して語彙を整理させる。

全勢力　全力　全軍

前路をさへぎり　進路をふさぎ　退路を絶ち

艦列　戰列

損害　損失

捕獲　捕虜

威激　威泣

應戰　戰鬪　敢戰

砲擊　砲彈　砲火　砲員

多大　僅少

沈着　沈沒

將卒　將兵

勝敗　勝報

備考

連絡

よみかた三「軍かん」「お話」、同四「海軍のにいさん」、初等科國語一「カッターの競爭」、同二「潛水艦」、同三「東鄕元帥」、同四「觀艦式」「廣瀨中佐」、同五「軍艦生活の朝」、同六「水兵の母」等と連絡して取扱ふ。

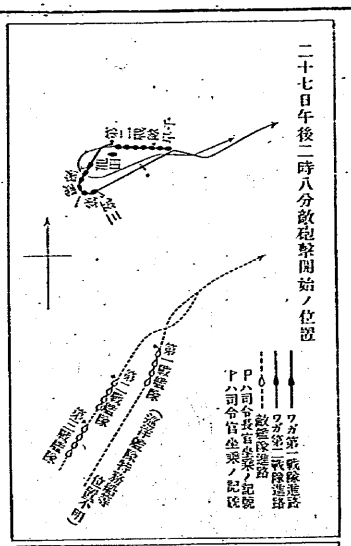
初等科言樂四「日本海海戰」と連絡して取扱ふ。

參考

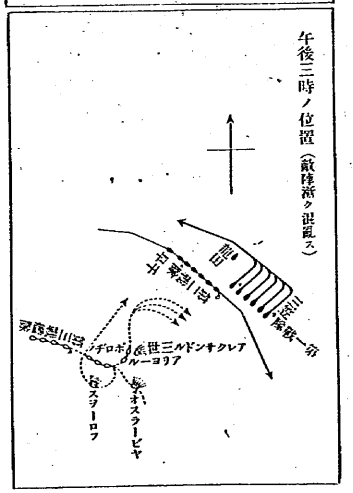
五十一頁の挿畫はZ旗を示したものである。上部の三角の部分は黃色、下部は赤色、右部は藍色、左部は黑色である。五十二頁の挿畫の左上部にはZ旗が翻つてゐる。

參考資料

二十七日午後二時八分敵砲撃開始ノ位置



午後三時ノ位置（敵隊潰ク混亂ス）



（以上　五月）

九　鎭西八郎爲朝

教材の趣旨

保元物語に花形役者として描かれてゐる源爲朝は、國民的英雄として親しまれた人物中の代表的なものである。爲義の八男として生まれながら、父にもてあまされて、十三の時九州にくだり、鎭西八郎と名乘り自ら九州の總追捕使と稱して、その過半を從へるといつた不敵の少年であつた。しかも父の解官を聞いて、二十八騎を具して京へ歸り、保元の亂に父とともに上皇方に召され、兄義朝を向かふにまはして善戰した。まことに父子兄弟敵みかたとなるあさましい戰ではあつたが、天下無雙の强弓を以て鳴るかれに、老いた父を思ひ、また兄を兄とするやさしい心があつたのである。敗軍の後捕らへられて大島に流され、譴責の軍を蒙り三十二歳で自殺して果てた。

詮議だてすれば、その所行には、不逞無謀なものがないではない。しかし、もともとかれに惡心は毫もなく、たまたま地方亂離の世に際し、勢に乘じ力任せにやつたことである。それよりも持つて生まれた氣一本の氣性、逞しい風丰、膂力人に絶する强弓の妙技が、かれをして代表的な快男兒たらしめてゐる。世に爲朝の愛せられる理由はここにあるであらう。

本教材は、保元物語卷一「新院御所各門々固の事附軍評定の事」及び卷二「白河殿義朝夜擊に寄せらるる事」の條を抄出し、これを二段に排列して、爲朝を最もよく具體的に表したものである。國民科國史と連繫して歷史的感情を豐かにし、且現代語と古文、古語との關聯によつて、國語の理會力の發展を期する點、「御旗の影」等と同樣の趣旨である。

文章

保元物語の文章を抄出したもので、行文中兒童の理會を考慮して、或ひは語句を省略單純にし、或ひは平易に改め、全體として文章を調へ、文

字の使用等を統一する等、修正が加へられてゐるが、しかも原文の趣を十分尊重し、古文の面影を存置することに力めてある。

〔一〕は保元物語卷一「新院御所各門固の事附軍評定の事」の條の一部分で、爲朝が始めて白河北殿に參向した場面である。恰も劇場の花道から堂々と練り出した概がある。

「七尺ばかりなる男」といひ、「目角二つに切れたる」といひ、魁岸奇偉な爲朝の風丰をよく物語つてゐる。「紺地に獅子の丸を縫ひたるひたたれ、同じく獅子の金物打つたる甲」は、原文に「紺地に色々の糸を以て獅子の丸を縫つたる直衣に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るままに」とあるのを單純にし、兒童の理會に適せしめようとしたのである。以下軍裝は、「三尺五寸の太刀」といひ、「熊の皮のじりざや」といひ、「五人張りの弓」といひ、「三十六さしたる黑羽の矢」といひ、悉く魁偉剛勇の爲朝にふさはしいものばかりである。

さて賴長の「合戰のこと計らひ申せ」に對して、憚る所なきかれのことばは、上述の風丰、軍裝以上によく爲朝を表現してゐる。まづ自らの履歷と體驗を述べ、その體驗から割り出した夜討の利を說いて建策してゐる。「火を逃れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を逃るべからず」は對句で、爲朝のことばがいよいよ調子づいて來てゐることを思はせる。かれの眼中相手とするに足りる敵は、兄義朝だけである。「それも一矢にて、眞中を射通し候はん」といつてゐるが、後の戰の場の伏線ともなつて興味が深い。「まして清盛などがへろへろ矢」に至つては、眼中清盛なしであり、賴長などから見れば、徒なる廣言とも聞えたであらうが、爲朝としては自信滿々の聲であり、「爲朝が矢二つ三つ放さんばかりにて」以下も決して誇張ではないのであらう。

しかし賴長には、何の武略もなければ自信もない。自信なきかれに、爲朝の評價はできない。「以ての外に手荒き儀なり」と評し、「年の若きが致すところか」と、輕忽を戒めたまではよいとして、「夜討などいふこと、汝

らが同士軍、十騎二十騎の私ごと」と評し去つたのは、夜討を夜盗のしわざくらゐに考へたのであらう。今度の軍は公ごとであり、隨つて源平あらん限りの軍勢によつて戰ふ大規模な軍であつて見れば、夜討などで勝敗が決せられるものかといふ賴長の結論は、結局凡庸な政治家にありさうな形式論である。

自分の建策は容れられず、爲朝はそのまま退出したが、それにしても胸には遺憾やる方ないものがある。「合戰のことは武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ、いかがあらん」は、まことによく事理を穿つてゐる。「義朝は武略の奥義を極めたるものなれば、定めて今夜寄せてぞ來たらん」の豫感は、あまりにもよく適中して、白河北殿の夜討は實現されたのである。敢へて爲朝ならずとも、「くちをしきことかな」とひとりごたれる。

白河北殿には、南側に東西二門があり、東の門を平忠正等が二百餘騎で固め、西の門を六條判官爲義父子百騎ばかりで守つた。爲朝は、「我は親に連れまじ、兄にも具すまじ、高名不覺も紛れぬやうに、唯一人如何にも強からん方へ差し向け給へ」といふので、西河原表門を、二十八騎を以て受け持ち、北の門を源家弘が百五十騎で固めた。保元元年七月十一日寅の刻に、義朝・清盛等の官軍は、一千七百騎を以て押し寄せて來た。爲義以下の武士各〻固めた門から驅け出で、前陣の戰は主として川原で行はれたが、爲朝等善戰してなかなか勝負がつかない。そこで義朝は、西風に乘じ隣家に火を放ち、煙炎天に漲つたので、遂に白河北殿の守りは破れたのである。

〔二〕は戰たけなはに際し、爲朝の善戰を如實に表現した部分である。かれの巧みな强弓が、いかに敵の心膽を寒からしめてゐるか。しかもその間常に父爲義に對し、また義朝に對し、子とし弟としての心づかひもよく見えて、ゆかしさを覺えしめる。

まづ敵の大將義朝が、大將にふさはしい赤地錦のひたたれ、黑糸をどしの甲、鍬形打つたるかぶと、黑馬に黑くらを置いて乘つて出て來る。

名乘りも「清和天皇九代の後胤云々」と堂々たるものがある。これに對し、爲朝の答は簡潔ではあるが「父判官の代官として」が、義朝にもその家來にもぴんと利くところである。義朝は、なほかさにかかつて「遙かの弟」といひ、「兄に向かひ弓を引くことあるべからず」とつつぱつて見たが、爲朝は「兄に向かつて弓引かんことあるべからずとは、道理なり」と是認しておいて、「まさしく父に向かつて弓引きたまふはいかに」と道理を逆に取つて兄をきめつけた。相手はぐうの音も出ず、「義朝道理にやつまりけん、そののちは音もせず」は、頗る痛快を覺えしめる。

敵は多勢である。「かけへだてられては父のために惡しかりなん」といふ爲朝の心づかひが、しほらしく聞える。爲義は年既に七十に近く、昔は腕白者であつた爲朝も、二十歳近くなつた今日では、ひたすら父をかばふ心が働いてゐる。父から遠ざかるまいとして門の內に退いたのを、敵は防ぎかねたものと思ひ、勝ちに乘つたつもりで小癪にも押し寄せて來る。

ところで爲朝には好い機會が惠まれた。「敵の勢越しに見れば」以下、この騷擾の間に、眞の勇者のみが捉らへる機會である。しかも、爲朝は、大矢をつがへながら「待てしばし」の思案が浮かぶ。――父と兄と敵みかたになつてゐるのは、父と兄と互の約束の結果であらうかと推量する。氣一本の快男兒爲朝には、義朝の腹黑さがわからず、遂に兄を善意に解して、兄を射殺することを斷念した。作者は、それを「心のうちこそ神妙なれ」と稱讃してゐる。

しかし、何といつても敵は多勢である。「もし矢盡きて打物にならば」以下、爲朝が九郎にいふところにも深慮が見える。「大將に矢風を負はせ」は、「矢の勢に恐れさせる」意で、それによつて敵を退散させようとする考へである。

九郎は爲朝の傳子で「箭前拂」の仇名があり、九州から伴なつた二十八騎の隨一である。それが「ただし、御あやまりも候はん」といつたので、「爲朝が手並みは、汝も知りたるものを」と答へてゐる。「御あやまりも」とい

つたのは、「萬一誤つて兄義朝を殺したらば」の懸念であらう。この主にしてこの家來があることを思はせる。かくて爲朝の矢は、過たず義朝のかぶとの星を射削つて――原文によれば「餘る矢が寶莊嚴院の方立に篦中せめてぞ立つたりける」とあるが、教材はそれを單純化したのである。

しかし義朝には、爲朝主從のかうした心づかひはわからず、專ら自分を射損じたものと見て、「汝は聞きしにも似ず手こそ荒けれ」といつてゐる。「手の荒い」といふのは、手がこまやかでないことで、「未熟」の意である。（前の賴長の「手荒き儀なり」も同じ意味である。）しかも、すさまじい矢の勢には、敵も舌を卷いたに違ひない。されば、こそ爲朝の二の矢は、深巢の七郎が受けて義朝を助けたのである。「須藤の九郎つと寄りて、深巢が首を取る」は、箭前拂の仇名あるゆゑんと思はせる。

原文によれば、爲朝の善戰はなほ續くのであるが、兒童の理會を限度として教材はここで打切つてある。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。保元物語から採つた文章であつて一種の調子があり、やや程度の高い語句語法もあるからよく讀みに力を注いで懇切に指導し、弓の名人爲朝の武勇が書いてあることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、（一）では、爲朝の武者振りのををしさ、左大臣賴長へ彈るとこうなく建策した、先見の明のすぐれた點などを、（二）では兄義朝と渡り合ひ、强弓を以て兄に對する情誼を示した點などを讀み取らせる。

文意の理會に卽して、口語で話すことを練習し、讀みを深めて、爲朝の武勇に感じさせるやうに指導する。

新字・讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「熊」「滅」「免」「鑿」「綱」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形・筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

紺地にししの丸を縫ひたるひたたれを着けたり。

三尺五寸の太刀に、熊の皮のしりざや入れてはきたり。

久しく西國に居住仕りぬ。
城を攻めて敵を滅すにも利を得ること夜討にしくこと候はず。
火を逃れん者は矢を免るべからず。
義朝は武略の奥義を極めたるものなり。
さては遙かの弟にこそあれ。
願ふところの幸ひと例の大矢を打ちつがふ。
大將の前には親死に子討たるるは坂東武者のならひなり。
義朝手綱かいくり「汝は聞きしにも似ず手こそ荒けれ。」といふ。
次のカナヅカヒに注意させる。

恐れず。
知らず。
候はず。
逃るべからず。
しかるべきにあらず。
聞きもあへず。
あるべからず。
音もせず。
かなふべからず。
あやまたず。
かへりみず。

注意すべき發音文字、ことば等

訛音方言

火　——「ヒー」と長くいはないやうに注意する。
騎　——「ヤー」と長くいはないやうに注意する。
十矢——「ジユッキ」といはないやうに注意する。

發音

目角——メカド　　紺地——コンジ
金物——カナモノ　　三尺五寸——サンジャクゴスン
七尺五寸——シチシャクゴスン　　黒羽——クロハ
鬼神——キシンまたはキジン　　九國——キューコク

合戰――カッセン　夜討――ヨウチ
天――――テン　敵方――テキガタ
數を盡くし――カズオツクシ　十騎――ジッキ
風上――カザカミ　戰ふ――タタコー
赤地錦――アカジニシキ　向かふ――ムコー
御方――ミカタ　一家――イッカ
答ふ――コトー　門の際――モンノキワ
大矢――オーヤ　阪東――バンドー
後なる門――ウシロナルモン　つがふ――ッゴー
勢越し――セーゴシ　奥義――オクギ

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　紺地　熊　武略（リャク）　遙か　手綱
讀替　居（キョ）住　滅す　免（マヌカ）る　幸（サイワ）ひ　阪（ジ）東　手綱

語句語法

「目角」「紺地」「獅子の丸」「ひたたれ」「しりざや」「三十六さしたる黒羽の矢」「郎等」「鬼神」「いへども」「左大臣頼長」「鎮西」「居住」「せつかくの合戰」「強陣」「夜討にしくこと候はず」「火を逃れん者は矢を免るべからず」「矢を恐れん者は火を逃るべからず」「兄にて候義朝などこそ、かけ出で候はめ」「清盛などがへろへろ矢、何ほどのことか候べき」「爲朝が矢二つ三つ放さんばかりにて」「はばかるところなく」「以ての外に手荒き儀なり」「同士軍」「私ごとなり」「決してしかるべきにあらず」「まかり立つて」「つぶやきけるやう」「武略の奥義を極めたるものなれば」「今夜寄せてぞ來たらん」「戰ふともいかで利あらんや」「赤地錦のひたたれ」「黒糸をどしの甲」「あぶみふんばり」「後亂」「退散すべし」「聞きもあへず」「判官」「代官」「一陣を承つて堅めたり」「さては遙かの弟にこそあれ」「弓を伏せて降參仕れ」「道理」「まさしく」「音もせず」「まつしぐら」「かけへだてられ」「父のために惡しかりなん」「もみ合ひけり」「敵の勢越し」「内かぶと」「射よげに見えたり」「おはすらんか」「心のうちこそ神妙なれ」「打物」「阪東武者」「かへりみず」「矢風を負はせ」「しかるべく候」「ただし」「爲朝が手並みは汝も知りたるものを」「手綱かいくり」「聞きしにも似ず手こそ荒けれ」「かぶとの板」「筋かひ」等は、指導を要する語句である。

次の文例の如き係り結びは普通の文の形と比較し、反復して讀ませることにより、

文意の上より表現の強められたことを自然に感得させ、その間におのづから法則のあることを悟らせるやうにする。

義朝などこそ、かけ出で候はめ。
（義朝などは、かけ出で候はん）

さては遙かの弟にこそあれ。
（さては遙かの弟なり）

心のうちこそ神妙なれ。
（心のうちは神妙なり）

汝は聞きしにも似ず手こそ荒けれ。
（汝は、聞きしにも似ず手荒し）

何ほどのことか候べき。
（何ほどのことの候ふべきか）

とぞ申しける。
（と申しけり）

とぞいひける。
（といひけり）

次の如き文例について命令形を指導し、文意を理會させる。

合戰のこと計らひ申せ。
弓を伏せて降參仕れ。
陣を開いて退散すべし。

備考

參考資料

古文は特に簡明的確に語釋を與へる必要がある。左に參考のため重要な語句語法に解説を與へておく。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つに切れたるが――「身の丈七尺ばかりの男で、目角の二つに切れた爲朝は」の意である。この種の語法は、中古、近古によく用ひられたが、現代では、餘程使用が限られてゐる。「朝顔は、花が大きくて色の赤いのが美しい」などの語法と似てゐる。「爲朝は身の丈七尺ばかりの男で、目角が二つに切れてゐるその爲朝は」といつて、この語法を考へさせるがよい。「目角」は「目の端」のことで、目頭か目尻かは判然しない。

紺地に獅子の丸を縫ひたるひたたれに――原文には「紺地に色々の糸を以て獅子の丸を縫つたる直衣」とあるが、單純にしたのである。「色々の色の糸で獅子の丸を刺繍したのである。「獅子の丸」は唐獅子を圓形に圖案化したもの。「ひたたれ」は鎧直衣で、錦、生絹、練絹などで作る。鎧の下に着る直垂であるから、袴は短く、袖と裾の端は括り緒で括るやうになつてゐる。

獅子の金物打つたる甲――原文には「八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るままに」とある。兒童の理會を考へて極めて簡單にしてある。「金物打つたる」は「金物を取り着けた」の意である。

五人張りの弓――弦を掛ける時、五人して張る強弓をいふ。四人にて弓を曲げ、一人が弦を掛けるといふのである。原文には「五人張りの弓長さ七尺五寸にて鈌打つたるに」とあるのを少し單純にしたのである。

三十六さしたる黑羽の矢を負ひ――三十六本の黑羽の矢をさした箙を背に負ふのである。

郎等――若者、家の子、家來の意である。

せつかくの合戰――せつかく（折角）は「骨を折ること」「力を盡くすこと」である。ただ兄にて候義朝などこそ、かけ出で候はめ――（外の者は皆あわてて遁げ出してしまふでせうが）ただ私の兄でありまする義朝などこそ（勇者であるから）駈け出して向かつて來ませうの意である。「こそ」と「候はめ」は係り結びの關係にある。

手荒き儀なり――原文には「荒儀なり」とある。後出の「汝は聞きしにも似ず手こそ荒けれ」と同じで、ここは「いかにも未熟な仕方である」の意味。

赤地錦のひたたれ――赤地錦の鎧直垂である。錦を以て作るのは大將の用である。

鍬形打つたるかぶと――鍬形を取り着けたかぶと。

父判官の代官として――判官は檢非違使の判官、または兵衛府や衛門府の尉をいふ。爲義はもと檢非違使に任じ、後左兵衛尉から、左衛門大尉に任ぜられた。爲義のことを世に「六條判官」といつたのはそのためで、六條は居宅のあつたところである。「代官」は「名代役」をいふ。

かけへだてられては――敵の大軍に割り込まれて、父の軍と自分の軍とが隔てられては、の意。

敵の勢越しに見れば――敵の軍勢を越して向かふに義朝が見えるのである。

大將義朝は、大の男の大きなる馬には乘つたり、軍の下知せんとて突つ立ちあがりたる内かぶと――「大將義朝は、大の男で、しかも大きな馬には乘つてゐるし、それに軍の指圖をしようとして（あぶみふんばり）馬上に高くのび上つてゐるその内かぶとが、まことに射よげに見えた」といふのである。今日の語法にはちよつと移しにくいところがある。「下知」は指圖、命令をいふ。「内かぶと」は「かぶとの裏」で、「見上げ」ともいふ。額の當る部分である。

弓矢取る身のはかりごと、汝負けばわれをたのめ、われ負けば汝をたのまんなど、父と兄と約束して――武士のはかりごととて、或ひは「もしお前（義朝）が負けたら自分（爲義）を頼つて來い、またもし自分（爲義）が負けたらお前（義朝）を頼つて行かう」などと、豫め父と兄とが約束の上で、かうして敵と御方に分れてゐられるのであらうかの意である。「弓矢取る身のはかりごと」は「弓矢取る者のはかりごととて」の意で、「武士にはかりごとはつきものであり、そのはかりごととして」といつた語氣を持つてゐる。

矢盡きて打物にならば――原文には「矢種盡きて」とある。「矢種」は箙に盛つた限りの矢であるが、ここは單純化したのである、「打物」は太刀、刀の類をいふ。元來鎗物に對して打ち鍛へた物を「打物」といつた。

矢風を負はせ――「矢の勢に恐れさせる」の意。

かぶとの板を筋かひに――原文には「冑の三の板」とある、かぶとは、頭にかぶる部分を鉢といひ、その後に半輪形に糸で綴り重ねた板を鍄（しころ）といふ。鍄は上から數へて鉢付の板、一の板、二の板、三の板、菱縫の板といひ、これを五枚冑といふ。鍄の三の板を貫ぬき斜に左の耳の根もとへ射込んだのである。

連絡

初等科國語四「くりから谷」「ひよどり越」「扇の的」「弓流し」、同五「武士のおもかげ」同六「源氏と平家」と連絡して取扱ふ。

初等科國史上「鎌倉武士――源氏と平家」と連絡して取扱ふ。

十　晴れ間

教材の趣旨

じめじめと降り續いてゐた梅雨が、まだその終る時ではないが、途中で一時晴れあがることがある。本教材はこの思ひがけない晴れ間を歌つたのであつて、空を蔽つてゐる暗雲が切れ、何日ぶりかで日光がさして來たその喜び、その嬉しさを韻文として表現したものである。場所を視野の開けた田園に取り、豐かな天地の輝かしさを讃へ、眞に自然の美しさにひたらせ、鄕土愛の念に培ふとともに、高い詩情を養ふのが趣旨である。

文章

六句四聯、五七調の落ち着いた韻律をもつた韻文である。

第一聯は、まづ時とところとを明らかにし、晴れ間の嬉しさが端的に歌つてある。何日も降り續いてゐた陰欝な梅雨がふと晴れあがつた。さうして日光が眩しいほどぱつとさして來た。もうじつとして家の中などにはゐられない。喜び勇んで戸外へ出て行く。この晴れやかな感情が「さみだれの晴れ間うれしく、野に立てば」の句にきびきびと表されてゐる。しかも「野に立てば、野はかがやきて」と「野」の頭韻に押さへきれない歡喜を感じることもできる。眼をあげて大空を仰げば、白雲が浮かんでゐる。暗くて重い雨雲に比べて、これはまた何と明かるい雲であらう。まるで美しい光の塊のやうである。この白雲を通して來る日光は、もう夏らしい暑さを含んでゐる。あの樂しいさかんな夏が、ぢきにそばまで來て、足踏みをしてゐるのだ。

第二聯は、田圃を流れる小川をおもしろく描いたところである。「少しにごれど」「音もまさりて」といふ句に、梅雨晴れの情景がよく具象化されてゐる。ふだんよりも勢よく流れてゐる小川のやうすに詩心が動き、梅雨晴れの快さ嬉しさを「よろこびを歌ふがごとく」と、素朴に主體的に表現し、「行くわれを迎ふるごとし」と更に擬人的に興味深く歌つたのである。

第三聯は、見渡す限りひろがつてゐる田圃を眺め、天地の嚴かな、大きな美に感動する場面である。

目の前に遠く田圃がつづいてゐて、いちめん早苗が植ゑ渡され、いかにも生き生きとした新鮮な「みどり」色が目をたのしませてくれる。どうか、すくすくと育つて今年も豊年であるやうにと祈らないではゐられない。

田圃のずつと向かふに、遠山がつづいて見える。藍で染めたやうな青い山々である。その峰は、なだらかに續き天空と親しく相接し、おだやかな、しかも悠遠な天地の和合を暗示してゐる。このやうな情景を眺めてゐると、心もおほらかになり、「天地の大いなる」美しさにおのづからうたれてしまふ。

最後の聯は間近に咲いてゐる露草を取りあげ、そのやさしさを讃へたところである。前三聯は詩心を廣大な天と地に向けて詠じたのであるが、ここは、一轉して、眼下の小天地を歌つたのである。路傍には、名も知らぬ雜草が茂つてゐて、その中に露草が交つて咲いてゐる。うつかりすれば見落してしまひさうな小さな花であるが、心して見れば、つ

つましき姿を見せて、「咲く可憐な花であり、濃きるりの」品のよい花であり、「色あざやかに」咲いた清らかな花である。來て見る人もないこの道のほとりに」ぜいいつぱい花を咲かせ、おだやかに笑つてゐるその「姿」は、神の榮光を宿してゐるやうに見える。この世に埋もれながら清き心を失ふことなく、眞實に生き、謙讓を守る德高き人の「姿」を思はせるやうな氣高さである。「咲くものは露草の花」と、終りに露草を大寫しに描き出して、清澄至純の詩情を具象化してゐる。

取扱の要點

まづさみだれの體驗の話合をさせ、梅雨の陰鬱なことをわからせてから本教材の指導に入るがよい。

文章を讀ませて、困難な發音、文字語句等について指導し、確實に讀ませる。五七の落ち着いた詩の韻律を生かして讀みを指導し、さみだれ時の晴れ間のうれしさを歌つた詩であることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、輝ける野を眺め、白雲を通す日影や、行く水のせせらぎの音に

歡びを覺え、植ゑわたす田園の廣々としたさまや、遙かな山の姿を眺めて天地の廣大さを感じ、最後にゆくりなくも路傍に咲き出る小さな露草の美しい姿を見出してゐる點などを讀み味はせ、晴れ間の歡びを感じるやうに指導する。

讀みを反復し、詩情を深めて、自然に暗誦に導く。

新字、讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「限」「濃」は扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

暗誦を利用し、全文を書寫させる。その際次のカナヅカヒに注意させる。

野はかがやきて
白雲を
夏の暑さをおぼゆ
行く水は
よろこびを
歌ふがごとく
行くわれを迎ふるごとし
田園のつづく限りは

植ゑわたす。
姿を見せて
咲くものは露草の花

注意すべき發音　文字　ことば等

アクセント

あつさ(暑)——アツサ　　あつさ(厚)——アツサ
さく(咲)——サク　　さく(裂)——サク

發音

白雲——シラクモ　　行く水——ユクミズ
音も——オトモ　　歌ふがごとく——ウトーガゴトク
迎ふるごとし——ムコールゴトシ　　天地——アメツチ

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　限り(カギリ)　濃き(コキ)
讀替　天地(アメツチ)

語句語法

「晴れ間」「さみだれ」「白雲を通す日影」「おぼゆ」「行く水」「せせらぎの音」「まさりて」「田園」「早苗のみどり」「心はるばる」「つつましき」「るりの色」「露草の花」等は、指導を要する語句である。

次の如き、主體的な句は表現に卽してその心持を理會させるやうにする。

さみだれの晴れ間うれしく、
歌ふがごとく、行くわれを迎ふるごとし。
天地の大いなるかな。

備考

連絡

よみかた三「つゆ」と連絡して取扱ふ。
初等科音樂四「晴れ間」と連絡して取扱ふ。
初等科理科二「夏ノ天氣」と連絡して取扱ふ。

十一　雲のさまざま

教材の趣旨

雲のさまざまな姿態と種類と現象とを敍した文章である。科學的觀察を基調としながら、常に生活的な立場と感興とを以て表現したところに、國語教材たる意義がある。

雲は、その性質・高さ・形その他いろいろの點から分類され、名稱がつけられてゐるが、一八九四年スウェーデンで開かれた國際氣象會議に於いて、國際雲級圖が編纂出版されることになり、十種の雲が定められた。爾來各國の雲の觀察が統一されるとともに、更に雲の研究に一段の進歩を見、わが國でも最近一層の進歩を見つつある。

本教材は、十種の雲をできるだけ具體的にとりあげ、それぞれの特徵を敍するとともに、つとめて生活と結び、雲に對する日本人的な感情を

生かして表現してゐる。十種の雲の中、卷雲・亂雲・層雲・積雲の四種は學名を採り、他の六は薄雲（卷雲層）さば雲・いわし雲（卷積雲）むら雲（高積雲）おぼろ雲（高層雲）曇り雲・ね雲（層積雲）入道雲・朝顔雲・かなとこ雲（積亂雲）雲）等の俗名を適當に用ひて、具體的直觀と結ぶやうにしてゐる。

しかし、何といつても雲は千差萬別であり、最近では、雲を右十種に分類することが果して適當なりや否やをさへ考へる向きもある。隨つてこの文章によつて、直ちに雲の實際指導をなすことは困難が豫想される。本教材は、もとより國語教材であるから、この教材の取扱と同時に、雲の實地觀察をさせることを要求するものでない。むしろ挿畫なり、その他適當の寫眞なりを用ひながら、文章を讀み取らせることに力め、他日適當の機會を利用して、できるだけ模式的な雲に就いて注意させるやうにするがよい。

なほ、雲と氣象とは深い關係を持つてゐるから、本教材はその方面に就いても暗示が與へてある。もちろん今日の氣象觀測は、科學的方法を盡くした上でなされるのであつて、單なる感覺のみによつて卽斷されるのではない。隨つて指導に當つて、それをあまり誇張的に强調すべきでなく、適當に取扱ふことが大切である。例へば亂雲は俗に雨雲といひ、雨を降らせる雲であるが、亂雲が出たからとて雨の降らないこともある。天候惡變の兆といはれる雲でも、季節により、場所により、成り立ちにより、差異があることに注意すべきである。

文章

まづ青空に現れる卷雲から、說き起してある。はけで輕くなすつたやうといひ、眞綿を薄く引き延したやうなといひ、いづれも卷雲の具體的な印象であり、「すつきりした感じ」、「天女の輕い舞の袖」と呼應して、その雲の姿態を美的に描き出してある。いふまでもなく、卷雲は青空に高く現れる雲で、時にはその形が鳥の羽毛といつた方が適切である場合もある。雲級圖では、平均九千メートルとなつてゐるが、わが國ではいつそう高く現れ、平均一萬メートル以上に及ぶやうである。

良不開き

第二節は卷層雲であるが、卷雲から、卷層雲に移り行く現象がまづ取りあげてある。この現象は、天氣の變りやすい晩秋、初冬などに屢見るところで、青空の美しい卷雲がいつしか擴がつて、薄雲が空をおほふことがある。雨兆といはれる雲である。

第三節は卷積雲で、俗にさば雲とも、いわし雲とも、うろこ雲とも、みづまさ雲ともいはれる。特徴がはつきりしてゐるから、兒童にもこれまで印象づけられてゐるに違ひない。必ず天候惡變の雲とはいひ得ないが、この雲に加へて龍のやうに續く黑い雲が出てゐる場合には、雨が近いと見て殆どまちがひないといふのである。

第四節は高積雲で、これが濃くなれば天氣は惡化するが、薄い場合はむしろ天氣のよいことが多い。雲の塊もぐつと大きく、卷積雲と違つて景氣のよい感じの雲である。

第五節は高層雲である。卷層雲の薄雲よりいつそう濃く、日も月もおぼろに通るから、おぼろ雲といふ俗名があり、有名な「照りもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき」（大江千里）の歌を聯想させる雲である。

第六節には右の高積雲高層雲が、卷雲・卷層雲・卷積雲よりぐつと低い高度にあることを述べてある。詳しくいへば、高積雲が五千メートル、高層雲が四千メートルぐらゐで、この二つを一括して中層雲とし、卷雲・卷層雲・卷積雲を高層雲といふ場合がある。

第七節は層積雲で、冬などに多く見かける雲である。次の雨雲卽ち亂雲に似て薄黑いのであるが、雲のすき間から青空が見えたり、雲のふちが白く見えたりする。もくもくとかたまつた多くの團塊狀をなしたり、畠のうねのやうに幾條か並んで見えたりする。曇り雲・うね雲・ね雲などといはれ、乳房のやうな形に見えるときには乳房雲などといはれてゐる。

第八節は雨雲といはれる亂雲である。空いつぱいに薄黑くひろがり、一定の形のない雲であるから亂雲といはれる。雲といへば雨を聯

開き不良

想するが雨を降らすのは亂雲である。層積雲と亂雲とは、高度も低いから下層雲ともいふ。

次の層雲は、いはば高い霧である。本文のやうに白く見える場合もあり、秋の朝など、遠く地平線をおほふものは、薄黑く見えることもある。

最後の節は積雲と積亂雲である。積雲は天氣雲で、形のこれと似た積亂雲とともに、夏から初秋にかけて多く見る雲である。積亂雲は俗に入道雲といひ、恐らくいづれの兒童にも深い印象があるであらうから、特に具體的に敍してゐる。芭蕉の有名な「雲の峯いくつくづれて月の山」を始め、俳句に「雲の峯」を讀んだのは頗る多い。この積亂雲中、遠く望んで頂が朝顏形に開いたのは朝顏雲、更にその頂が平になつたのはかなとこ雲といはれる。雷雨を起したり、雹を降らせたりする雲である。かうして文章は冒頭の卷雲の美を受けて、その女性的な美しさに比べ、積雲・積亂雲の壯大な男性的な美を對照させて終つてゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。いろいろな雲を說明した文章であるから、ゆつくりと落ち着いて讀ませ、卷雲・薄雲・いわし雲・むら雲・おぼろ雲・曇り雲・亂雲・層雲・積雲・入道雲・かなとこ雲などのことが書いてある。ことをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、それぞれの雲について、形狀・色合・高さ・天候との關係等を讀み取らせる。

文意の理會に卽して、正確に話すことを練習し、讀みを深めて、雲に對する興味を起させるやうに指導する。

新字・讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「兆」「塊」「曇」「陰」「層」「俳」「性」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形・筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

卷雲はごくこまかな氷の結晶の集つたもので、天女の舞の袖を思はせます。

白い絹か何かで空をおほつたやうになりますから、俗に薄雲といひます。

いわし雲は、天候惡變の兆といはれる雲です。

むら雲は、大きな塊になつて群生する白い雲です。

西洋では牧場の群羊にたとへます。

照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月とは、かういふ雲のかかつた場合です。

亂雲はいちばん陰氣で、いやな感じの雲です。

層雲は雲の中でもいちばん低い雲です。

天氣のよい日、底が平で、山の峯のやうに積みあがつた形に現れる白い雲は積雲といひます。

俳句で「雲の峯」といふのもこの入道雲です。

積雲や、入道雲などは壯大で、強烈で、男性的です。

次のカナヅカヒに注意させる。

いはれる
いひます
いふので
たとへます
押さへつけられさうになります
ふえてひろがり

見えません

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

かさ（暈・笠）――カ|サ　　かさ（量）――カ|サ
あめ（雨）――ア|メ　　あめ（飴）――ア|メ
あつい（厚）――ア|ツイ　　あつい（暑）――ア|ツイ

訛音方言

いわし――「ユワシ」と訛らないやうに注意する。
場合――「バヤイ」と訛らないやうに注意する。
見え――「メエ」といはないやうに注意する。
恐しい――「オトロシー」と訛らないやうに注意する。

發音

天女――テンニョ　　大漁――タイギョ
半月――ハンゲツ　　牧場――マキバ
投げ出し――ナゲダシ　　ぐんぐん――グングン

春の夜――ハルノヨ　薄黒い――ウスグロイ
雨雲――アマグモ　曇り雲――クモリグモ
雲の中――クモノナカ　銀白色――ギンパクショク
銀鼠色――ギンネズイロ　王者――オージャ
女性的――ジョセーテキ　頭――アタマ

文字

新字　結晶(ショー)　絹　兆(チョー)　群羊(ヨー)　曇り　層(ソー)雲　俳句　女性(セー)的
讀替　卷雲　天女(ニョ)　惡變　塊　陰氣

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

語句語法

「卷雲」「結晶」「こまやか」「天女の輕い舞の袖」「ぼやけて」「薄雲」「かさ」「群生」「斑點」「さば雲」「大漁」「いわし雲」「半月」「天候惡變の兆」「むら雲」「西洋」「おぼろ」「照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月」「前兆」「おぼろ雲」「みなぎる」「他方」「亂雲」「陰氣」「層雲」「積雲」「入道雲」「强烈」「銀白色」「銀鼠色」「雲の王者」「雲の峯」「女性的」「男性的」等は、指導を要する語句である。

次の如き比喩について指導し、文意を理會させる。

澄んだ青空に、はけで輕くはいたやうな、または眞綿を薄く引き延したやうな白い雲の出るのを、卷雲といひます。
天女の輕い舞の袖を思はせるやうな雲です。
ごく薄い、白い絹か何かで空をおほつたやうになりますから、俗に薄雲といひます。
さばの斑點に似てゐるのでさば雲といひ、
そばに黑い雲が龍のやうに積いてゐる場合には、
西洋ではよく牧場の群羊にたとへます。
青空に綿を大きくちぎつて、あとからあとから投げ出したやうでなかなか盛んな感じのする雲です。
また時にそれが畠のうねのやうに、
山の間などから流れるやうにすべり出る白い雲は、
上が山の峯のやうに積みあがつた形に現れる白い雲、
一天にはかに墨を流したやうに曇つて、

備考

參考

挿畫は、七十一頁卷雲、七十二頁さば雲、七十四頁ね雲、七十六頁入道雲を示したものである。

（以上　六月）

十二　山の朝

教材の趣旨

初等科國語五「木曾の御料林」「かんこ鳥」同七「燕岳に登る」同八「山の生活二題」と連絡し、山の朝の清新な氣分や情景を描き出した教材である。その表現を通して、兒童を知らず知らずのうちに山の曉の大自然の中に立たせ、山の靈氣を感受させて心情を清め、山に對する親愛感を深めようとするものである。

初等科國語五「かんこ鳥」は、韻文によつて山の朝の風景を敍したものであるが、本教材は、散文によつて刻々に變り行く明け方の山の姿と、新鮮な氣分とを最も具象的に表現したもので、直ちに次の「燕岳に登る」に接續して、その前奏の役割を果すものである。

文章

ふと、目がさめる――早朝、山小屋でふと目が醒めたことから書き始めてある。

遠くの方から、小鳥の聲が枕もとへ流れるやうに聞えて來る――遙か山の木立の繁みの中で鳴いてゐる小鳥の聲が、室内に聞えて來ることを「流れるやうに」と形容したところにおもしろさがある。日の出前、まだ薄暗いうちから小鳥はじきりに鳴きだし、日の出を境にその鳴き聲はだんだん衰へて行く。山での睡眠は、まづこの小鳥の鳴き聲で醒まされるのである。

まだ、なかば眠りからさめない心のうちに――目はさめても、うつらうつらした狀態で、はつきり目ざめたのではない。その意識の中へ、この小鳥の鳴き聲が、「山の夜明けだといふこと」を知らせて來たのである。

「はね起きて窓を開いた。すると「つめたい空氣が」戸外から、室内へ「吸ひつけられるやうに」はいつて來た。それを「しのびこむ」といふことばで表し、ひやつとしてつめたい感觸を「首筋に水晶のはけがさはつたやう」だと譬喩を以て表してゐる。

小鳥は目を醒してしきりに囀つてゐるが、薄あかりの天地の中で山山はまだ「だまつて眠つてゐる」のである。

山小屋から出て「素足に草履をはいて露深い草の小道におり立つ」と、冷え冷えとした感じが、足からからだ全體に傳はつてまことに爽快である。この氣持を一層さわやかにするものは、「あたりの靜けさをふるはせて、頭の上から降り注いで來る。「生き生きとした小鳥の聲」であり、「このにぎやかな聲の絶え間を縫つて」、かすかに聞えて來るのは、潺々たる「小川のせせらぎの音」である。小鳥の聲と、小川のせせらぎの音と對照させて文は書かれてゐるが、その各〻の音の高低を「にぎやかな」と「つつましやかな」といふことばでいひ表し、情景を髣髴たらしめてゐる。

山からわき流れる清水が、かけひをまつしぐらにかけ拔けて通る――小鳥の聲を聞き、小川のせせらぎの音に耳を傾けた後、身近く通り拔ける清冽なかけ樋の水に目をやる。そこには、「玉のやうな清らかな水」

が流れてゐる。この水を兩手ですくひあげると、冷たさが身にしみる。その感じを「全身にしみとほる」といふことばで表したのである。

この水で口をすすぎ顔を洗ふと、心の底までが清められるやうな氣持がする――清らかな冷水で口をすすぎ顔を洗ふと、肉體の汚れが清められると同時に、心までも清められたやうな氣持になる。さうして、おのづから清らかな「朝の山の空氣」を胸いつぱいに吸つてみたくなるのである。

「山の小屋の前の小道をくだつて」、楢楓ぶな栗などの林に歩みを移す。すると綠の木々が頭の上におほひかぶさる、そのやうすをまるで「自然の天蓋」のやうだといつてゐる。この樹木の綠のおほひを通して、夜明け間近なにぶい光線が降りそそいで來ると、あたりは綠の一色で塗りつぶされたやうになる。その有樣を、あたかも「綠色のガラスを張りめぐらした部屋の中に、たたずんでゐるやう」だといひ表したのである。

小鳥は、針葉樹林の中よりも、濶葉樹の生ひ繁つた林の中に多く住んでゐる。山小屋で眠りを醒された小鳥の聲は、この林から聞えて來たのであつたが、今その場所へ直接やつて來たのである。冒頭の「小鳥の聲が枕もとへ流れるやうに聞えて來る」の一句は、その意味に於いて、伏線をなしてゐる。來てみると、「一々の鳴き聲を聞きわけることができないやうに、鳥の聲が、にぎやかに聞えて來る」。まさに百鳥和鳴し、山部赤人の「み吉野の象山のまの木ぬれにはここだもさわぐ鳥の聲かも」の感慨を深くする趣がある。小刻みに鳴く多くの小鳥の鳴き聲の中で、山鳩や鶯の聲がきはだつてはつきりと聞える。

この新鮮な綠の木々と、さまざまな鳥の聲とで、山の朝の興趣は盡きることを知らない。それを山のてあついもてなしだと觀じて、「この美しい木々の綠と、さわやかな鳥の聲のごちそうを前にして、しんせつな山のお招きの席に、すべてを忘れて立つてゐた」のであつた。

林の中を、奥へ奥へと進んで行くにしたがつて、小川のせせらぎは、だんだん高く聞えて來る――山小屋附近では、つつましやかな小川のせ

せらぎ」とも聞えたのであつたが、林の中を奥へ奥へと進んで行くにしたがつて、だんだん高く聞えて來るのである。そこに文の照應があり、場面の推移が看取される。さてこの小川の所在はといへば、頭の上の綠のおほひが盡きてしまつた彼方にあつて、石を嚙むやうにしぶきをあげて流れるその小川の水の上に、朝の日の光が、潑剌としてゐるのである。

更に歩みを續けて「一本の丸木橋の上を靜かに渡る」と、やうやく朝の太陽に照らし出された針葉樹の生ひ繁る山々が、眼にくつきりと映じた。その有樣を「朝の太陽の前に身じまひを正し始めた高い山々の針葉樹林を見あげる」と擬人化していひ表したのである。「身じまひを正し始めた」といふのは、眠りから醒めて、服裝を改めるやうに、今までぼんやり見えてゐた針葉樹林が、きちんとはつきり見えて來ることをいつたのである。

きりのやうにとがつた梢の先を天に向けて眞直に立つものはかうやまきである――高野槇を遠くから望むと、その梢が槍の穗先のやうに尖つて見える。また檜は、梢に樹冠をいただいてゐるので、高野槇のやうな鋭さは感じられないが、ふさふさとした豐かさが感じられる。この特徴のある二つの樹木の相貌の對比によつて、針葉樹林のやうすが想像される。

この深山の朝の靈氣にふれるため、私はにこまでのぼつて來たのだ――朝の深山に身を置けば、もの皆が清くすがすがしく、山の靈氣さへ感じられ、俗塵を拭ひ去るものがある。深山でなければ味はへないこの特有の氣持に浸りたいために、作者はここまで登つたのである、

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。靜かに讀ませるやうにし、讀むうちに山の朝の清らかな氣分を次第に感じさせる。

讀みが進むにしたがひ、山の夜明け方、山小屋を出て、小鳥のにぎやかな聲を聞き、小川のせせらぎの音に耳を樂しませ、林の中を通り抜け、美しい朝日の光を浴びて、深山の

朝の靈氣に觸れてゐる「私」の心持に感じさせるやうに指導する。

話すことよりは讀ませることを多くし、朗讀によつて、文を味はせて行くことが大切である。

新字・讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「薄」「綠」「鋭」「樹」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形・筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

薄明の天地の中で、山々の薄黒い姿がだまつて眠つてゐる。

短い鋭さの中にも、やさしさのある小鳥の聲か混る。

口の中でふくんだやうに鳴く山鳩の聲が聞えて來る。

林を出ると、頭の上の綠のおほひが盡きてしまふ。

高い山々の針葉樹林を見あげる。

次のカナヅカヒに注意させる。

流れるやうに聞えて來る。
かすかに聞えて來る。
にぎやかに聞えて來る。

山鳩の聲が聞えて來る。
高く聞えて來る。

吸ひつけられ
すくひあげる
思ひきり
身じまひ

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

あさ(朝)——アサ　　あさ(麻)——アサ
きり(切)——キリ　　きり(錐)——キリ　　きり(霧)——キリ

訛音方言

つめたい——「ツベタイ」と訛らないやうに注意する。
重い——「オモタイ」といはないやうに注意する。
草履——「ジョーリ」といはないやうに注意する。

發音

薄明――ハクメイ　露深い――ツユブカイ
頭の上――アタマノウエ　小川――オガワ
洗ふと――アラウト　吸ふ――スー
頬――ホー

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　綠色（ミドリ）　山鳩（バト）　針葉樹（ジュ）
讀替　薄明（ハク）　鋭さ（スルド）　混つて（マジ）　針葉樹（シン）

語句語法

「薄明の天地」「戸びら」「素足」「草履」「清水」「かけひ」「そよ風」「自然の天蓋」「危ふげ」「丸木橋」「身じまひ」「針葉樹」「靈氣にふれる」等は、指導を要する語句である。

「なら」「かへで」「ぶな」「かうやまき」「檜」等は、機會を捉らへて實物または寫眞繪畫によつて理會させる。

次の如く形容詞的修飾語及び副詞的修飾語が多く用ひられてある點に注意し、文意を理會させる。

首筋に水晶のはけがさはつたやうなつめたさ
生き生きとした小鳥の聲
つつましやかな小川のせせらぎの音
こほりつくやうなつめたさ
心の底までが清められるやうな氣持
綠色のガラスを張りめぐらした部屋の中
短い鋭さの中にもどこかやさしさのある小鳥の聲
太く口の中でふくんだやうに鳴く山鳩の聲
身じまひを正し始めた高い山々の針葉樹林
きりのやうにとがつた檜
ふさふさした枝の冠　（以上――形容詞的修飾語）
小鳥の聲が枕もとへ流れるやうに聞えて
つめたい空氣が吸ひつけられるやうに室の中へしのびこむ。
一々の鳴き聲を聞きわけることができないやうに、鳥の聲がにぎやかに聞えて來る。

うぐひすの聲がころがるやうに續いて走る。（以上――副詞的修飾語）

備考

連絡

初等科國語四「林の中」、同五「かんこ鳥」等と連絡して取扱に考慮する。

十三　燕岳に登る

教材の趣旨

前課「山の朝」と連繫して山を主題とするが、その山が燕岳といふ高山を對象として、兒童自體の經驗する登山へ發展してゐる。この文章によつて高山にくりひろげられる莊嚴な自然美を味讀させ、山の神祕を感得し、雄渾な氣魄に培はしめる。その間、或ひは地理的・理科的な觀察が點綴されてゐるとともに、心身鍛錬への示唆があり、隨つて登山そのものの生活指導もあり得るわけであるが、國語教材としては、敢へてそれを必要條件とするものではない。ただ、生活指導と結んで、これを兒童の綴り方へ展開することは、望ましいことである。

燕岳は中部山岳地帶中、飛騨山脈（北アルプス）の前衞山脈たる常念山脈の北部に聳える山である。比較的登山に容易で、女子ども登れる山といはれ、しかも眺望が頗る優れてゐるところから、毎年登山者の數は、日本アルプス中第一といはれてゐる。長野縣のこの附近の國民學校では、初等科五年の兒童にまづ燕岳に登らせ、六年になつて乘鞍岳や、奥常念などに登らせてゐる。この教材に於いて、日本アルプス中特に燕岳を選んだのは、主としてこの程度の兒童が生活的に體驗し得る點に重きを置いたからである。なほ燕山頂の眺望に於いて、西に見渡し得る穗高・槍・三俣蓮華・鵞羽・水晶・野口五郎等の諸岳は、信濃と飛騨及び信濃と越中の國境に連亘する山々で、奥穗高（三一九〇メートル）を最高として、槍（三一七九メートル）これに次ぎ、何れも燕岳より高い峯々である。

文章

兒童のかうした文章にありがちな、次から次へと展開連續する形に表現されてゐる。隨つて長文ではあるが、強ひて段落を求めることのできない文章で、いはば文の一節一節が段落をなしてゐるといつた趣がある。

しかも書出しは、極めて突差的に「出發」といふ先生の聲に始つて、直ちに興味の中心へ誘ひ込んでゐる。中房溫泉の雨の夜がほがらかに明け、喜びに滿ちて整列した兒童に取つて、この命令は嬉しさそのものの象徴である。午前七時の出發は少々時間の遲さを感じさせるが、これは昨日の雨の少しでも乾くのを待つたからである。

「太陽はほがらかにこの溫泉の谷間を照らして」といひ、「小鳥のやうにをどる胸を押さへながら」といひ、「高い橋がぐらぐら動くのが愉快でたまらなかつた」といひ、すべて希望にをどる喜びの表現であるが、しかも「ルックサック、水筒、金剛杖の身仕度もかひがひしく」といひ、やがて「氣をつけろよ」といふ高山に登る愼重さがあることを見遁してはならない。

道がすぐ登りになり、「かちりかちりと、杖が岩に鳴つた」のは、既に登る者の苦しさの表現である。前の人の足跡をふみしめるやうに登るところに、急坂を愼重に進んで行く姿が見える。「大きなささ」は、俗にいふ「くまざさ」であるが、俗名の「くまざさ」には種類が多く、學名の「くまざさ」が特定の一種を示すのと趣を異にしてゐる。

岩角が出、木の根が横たはつてゐるところを、心なく歩けばそれにつまづいて足を痛める。「氣をつけろよ」は、それを警戒するのである。汗がにじみ、呼吸がはずむのは、急坂を登る側面描寫と見られる。

「かうして、つづら折りの明かるい山道を、あへぎあへぎ登つた。つづら折りは、右へ左へ曲りくねつた道である。時に明かるい山道とあるのは、山を登るに從つて、谷底と違ひ天空は開けるからであるが、一面その邊一帶木がまばらであるからで、後の「まばらな濶葉樹林を通して」といふのに照應しつつ、その邊の情況が察しられる。足下の谷底が次第に遠ざかつて行く中に、溫泉宿が小さくなるのは、繪のやうな美しさで

あるとともに、もうこんなに登つたといふ喜びをもあらはしてゐる。それと反對に、大空に高く突兀と聳える有明山は、標高二千二百六十八メートルで、今日登る燕はそれより約五百メートルも高いのである。

「あの山よりもつと高く登るのだぞ」といふ先生のことばには、兒童の希望をそそると同時に、前途の警戒をも與へてゐる。

まばらな濶葉樹林であるから、夏の太陽が直射する。その暑さに登坂の苦しみは一層で、汗は湧き出るのである。特に濶葉樹といつて、やがて針葉樹林の現れる伏線をなしてゐる。この苦じい間にも、「先生、休んでください」「もう少しがんばれ」と、前後で應酬する子どもらの喜劇があり、やがて嬉しい休息の場面になる。

そろそろ針葉樹が現れ、やがてそれが密林になる。かうなると急に暑さが去つて、さつき程の苦しみがなくなる。「さうしかんば」は一見白樺に似てをり、普通「シラカバ」といつてゐるが、白樺より幾分幹の色が黄色味を帶びてゐる。（もちろん針葉樹でなく、針葉樹林にまじつて存在するのである。）この邊密林地帶であるから道もまだ乾かず、昨日の雨でじめじめして、うつかりすると滑る。隨つて木の根岩角を數へるやうに愼重にふみしめて登るといふのである。

「あと四キロだ」――道標は、一般にそれぞれの地點から頂上への距離が示してある。だから登るに從つて、道標の數字が減つて行く。數字が減るといふより、數字の示す數が減るのであるが、それを端的に敍したのである。

喬木帶の終りが近づくにつれて、いはゆる高山植物が現れて來る。「ななかまど」が早く目につき、かはいらしい「いはかがみ」の花が兒童たちの心を引く。しかし、灌木帶以上に於いて始めて高山植物の獨壇場があり、ここはまだ序の幕に過ぎない。

既に合戰小屋まで來れば、中房から約四キロを突破したのであり、更に數百メートルで三角點に達する。ちやうどその中間あたりで喬木帶から灌木帶に移り、「はひまつ」が波の如く地上をはつて續くのである。

三角點は、三角測量の一基點を示す土臺石で、ここは標高二千四百八十九メートル、陸地測量部によつて置かれたものである。「中房溫泉から四・六キロ」と記した道標は、道々に立つてゐた――次第にキロ數の減つて行く道標とは記し方が違つた特殊のものである。

合戰小屋以來、空が曇り霧が深くなつて、この三角點からの眺めがきかない。しかしそれは、後の鞍部から西を望む雄大な景觀を特に引き立たせるおのづからな伏線ともなつてゐる。さうして、今合戰小屋の人が保證したやうに、天氣が大丈夫であることは、「天地がいかにも明かるい」ことや、「薄日がぽかぽかとせなかを溫める」ことなどでも知れるのである。

三角點から鞍部、鞍部から絕頂への道は、今までの急坂と違ひ、だらだら登りの、いはば尾根傳ひになつてゐる。この邊から、高山植物の美しい花が道に沿うて點在する。特に「たかねざくら」の花盛りは、地上の「さくら」と比べて、「山は、今春なのだ」の感を深くさせる。

やがて右手の斜面にお花畠が見え、更に雪溪が見える。兒童の始めての經驗であるから、やや驚異的に書かれてあるが、一般的に見て寧ろ小規模のものである。前方には、今來た道とほぼ直角に走る峯通りが續き、その中央が鞍のやうに凹んでゐる。そこが鞍部で、鞍部の左にやや高く燕山莊といふ山小屋が仰がれる。先頭の兒童が、もうその鞍部に登つて「早く來い」と叫んでゐるのは、いかにも子どもらしい態度である。

さて鞍部に登つて西を望む景觀は、いはばこの文章の頂點で、その終りの方に「ぼくらは、ほとんど一種の興奮を感じるほどであつた」といふごとく、熱情の高まつた部分である。

見渡す山々は、飛騨及び越中と信濃との國境の山々である。穗高槍、蓮華（三俣蓮華）、鷲羽、水晶、五郎（野口五郎）の諸岳は、決して一直線上に連なるのでなく、ほぼ燕岳を中心として南西から北西へかけ半圓を描くやうな位置に並ぶ山々であるが、見たところは屏風で仕切つたやうに、眞直

に續いて見える。紫紺の色あざやかな山肌に、ここかしこ、くつきりと白く雪溪が見られる。ところどころに白雲が漂つてゐるおかげに、この一大畫景が立體的に奥深く見えるのである。

北は燕岳から南は常念岳・蝶ケ岳と續く一帶は、北アルプスの前衛山脈である。今兒童はその一角に立つてゐる。さうして西に望む國境の山々は、更に大きな主脈である。この兩山脈の間に深い谷があり、その底に高瀨川が遠く鳴つてゐるのである。谷の底には湯俣溫泉があり、そのにほひさへ、ここまでかすかに傳はつて來る。

鞍部から、燕の絶頂は北に當る。今まで東から西へ來たのを、ここで右へ折れて北へ進むのである。ここから絶頂まで馬背のやうな尾根を傳つて行く。「縱走」といふのは、山脈の峯から峯へ傳つて行くことで、ここではやや大袈裟なきらひがあるが、これも兒童に花を持たせたのである。馬背のやうな尾根を中心として、右からは霧が吹き上げ、それが尾根を界に消える。左は晴れてゐるから、急な斜面が神祕な谷底へ深く落ち込んでゐるのが見える。谷底は前に述べた高瀨川の溪谷である。

「とうとう燕の絶頂が來た」――感情移入の端的な表現である。二千二百六十三メートルの最高點を有する燕の絶頂は、意外にも風化した花崗岩の岩塊で、その上は十人と一度に乘れない程せまいのも、やや意外である。ここまで來る間に、さすが威容を誇る槍岳にも親しみができて、「ここまでおいで」といふやうに見る餘裕もでき、しかもよく見るに從つて、一層冒し難く嚴然と聳えて見えるのである。さつきの鞍部で見た全體的な景觀の興奮は今漸くさめて、興味は專ら槍にかかつてゐる。それは、その名が示すやうに屹然として高く、また燕よりもぐつと高い山だからである。「あんな山へ登れる人があるのかなあ」といふ少年らしい驚異は、先生の「もう二三年たつたら」のことばに刺戟されて、最後の希望へ轉換する契機となつてゐる。

霧のために、東から北へかけての眺望は遂に割愛されてゐる。實は

富士淺間白馬立山始め雄大な眺望は、西以上であるが、それが霧のために書かれてないのは、却つてこの文の簡素化になつてゐる、

「山は廣い」といふのは、かうした高山に登つた實感で、全土の八割が山であるわが國は、山また山を分け登つて始めて山の廣さを感じるわけである。　さうして、この實感が、數年の後槍へ登らうといふ希望を一層強くして、文の終りをなしてゐる。

取扱の要點

文章を讀ませ、困難な發音文字、語句等について指導し、確實に讀ませる。　かなり長文であるし、新字や新語句も少くないから、特に讀みについて注意して指導し、生徒たちが先生につれられて燕岳に登り、道中の珍しい事物や山々の雄大な眺めに驚いてゐることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、まづ地圖と連絡して道順を明らかにする。　次に道順にしたがひ、勇んで登るやうすや、坂道を登る苦しさや、休んだ時の快さや、事物や景色を見て歎ぶ氣持に浸らせる。　さうして濶葉樹林帯針葉樹林帯、灌木帯等を經て美しいお

花畠や大きな雪溪を眺め、鞍部にたどり着いて、飛驒連峯の雄大莊嚴な景觀に驚嘆してゐるさまを想像させる。　かうして遂に燕岳の頂上に登り着いて、更に槍岳登山の希望を起してゐる點などを讀み取らせる。

文意の理會に即して、恰も登山した生徒が歸宅後父兄に話をするやうな態度で話すことを練習し、讀みを深めて、燕岳に登山した歡喜と、その雄大莊嚴な眺めに感じさせるやうに指導する。

新字、讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「登」「霧」「辨」「紫」「莊」「嚴」「奮」「祕」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形、筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

太陽は、ほがらかに温泉の谷間を照らしてゐる。

谷底の温泉宿が、だんだん小さくなつて行く。

後の方でいつしか悲鳴をあげる。

谷底から吹きあげる風が、はだに快く感じる。

霧がわいて來て、大木の幹をかなたへかなたへと薄く見せた。

ここで辨當をたべる、そのおいしいこと。

黄色な花や、白い花や、深紅の花が、入り亂れて咲いてゐた。

すばらしい景色を、西の方に見渡した。

紫紺のはだあざやかにそそり立ち、うねり續く雄大莊嚴な姿。

一種の興奮を感じるほどであつた。

卷きあげた雲が、尾根を界に消散する。

左は、急な斜面が、神祕な谷底へ深く落ち込んでゐる。

とうとう、絶頂へ登り着いた。

次のカナヅカヒに注意させる。

（覺える
見えない
そびえてゐる）

（數へるやうに
數へてもらつた）

（さへづり
あへぎあへぎ）

（ませかへす

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

なる（鳴）――ナル　　なる（成・生）――ナル

はし（橋）――ハシ　　はし（箸）――ハシ　　はし（端）――ハシ

ふく（拭）――フク　　ふく（吹）――フク

てん（天）――テン　　てん（點）――テン

訛音方言

出發――「シッパツ」といはないやうに注意する。

きのふ――「キニョー」といはないやうに注意する。

動く――「イゴク」と訛らないやうに注意する。

せまい――「セバイ」と訛らないやうに注意する。

そこら――「ソコイテ」といはないやうに注意する。

かはいい――「カワユイ」といはないやうに注意する。

溫める――「ヌクメル」といはないやうに注意する。

來い――「コー」といはないやうに注意する。
背――「シェ」の訛を矯正する。
左――「シダリ」と訛らないやうに注意する。

發音

身支度――ミジタク　　ごうごう――ゴーゴー
ぐらぐら――グラグラ　　岩角が出――イワカドガデ
後にも――ウシロニモ　　木の間――コノマ
道標――ドーヒョー　　大木――タイボク
合戦小屋――トカッセンゴヤ　　行手――ユクテ
尾根傳ひ――オネズタイ　　薄日――ウスビ
その邊――ソノヘン

ことばの中、または、下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　登る　温泉　霧　辨當　莽(ソー)厳　興奮　神祕
讀替　温泉宿　悲鳴(メー)　快く　頂(チョー)上　深紅　景色　紫紺

莊厳(ゴン)　畏(オソレ)サカイ)

語句語法

「出發」「旅館」「金剛杖」「身支度」「かひがひしく」「激流」「岩角」「呼吸」「あへぎあへぎ」「温泉宿」「そびえ立つて」「まばら」「濶葉樹林」「悲鳴」「ませかへす」「なだらか」「道標」「眼界」「山腹」「斜面」「歓聲」「三角點」「頂上」「絶頂」「尾根傳ひ」「薄日」「滿開」「深紅」「お花畑」「殘雪」「雪渓」「たどり着いた」「紫紺」「そそり立ち」「雄大」「莊厳」「中腹」「大自然」「景觀」「一種の興奮」「縱走」「神祕」「御影石」「岩塊」「最高點」「厳然」「一帶」「とざして」「希望」等は、指導を要する語句である。

教材中の植物は挿畫と連絡し、備考の資料を參照して指導する。

本文中には現寫法が多く用ひられ、情景を生かしてあるが、次の如きいひ表しは特に感情を強く表現してゐることを指導し、文意を理會させる。

あと四キロだ。
頂上まであと二キロだ。
山は、今春なのだ。
氣をつけろよ。
今日は、あの山よりももつと高く登るのだぞ。

早く來い。向かふは晴れて、山がすてきだぞ。

今こそ、二千七百六十三メートルの最高點に立つたのである。

ここで辨當をたべる、そのおいしいこと。

三角點。

更に右へ右へとのびる飛騨山脈が、蓮華・鷲羽・水晶・五郎と、大波のやうに、屏風のやうに紫紺のはだあざやかにそそり立ち、うねり續く雄大莊嚴な姿。

備考

參考

挿畫八十七頁(上)ななかまど、(下)いはかがみ、九十一頁しなのきんばい、九十二頁はくさんいちげ、九十四・五頁の寫眞は本書二百四十八・九頁に説明してある。

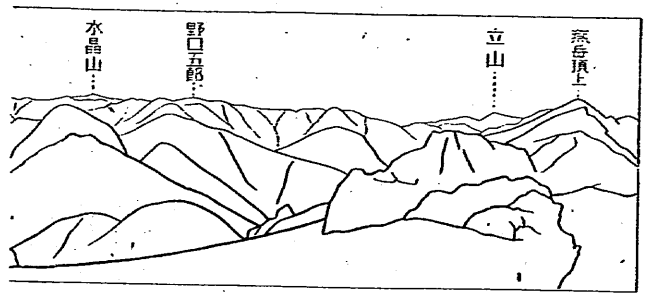
參考資料

燕岳への道しるべをいへば、松本市で汽車をおり、豐科・穗高等の町を經て北上し、それから西へ向かひ、有明山の麓から溪谷を傳つて登ると、やがて中房溫泉に着く。松本から途中まで電車の便がある。中房溫泉は、燕の東麓にある溪谷中の溫泉場である。そこから、急峻な山道を登ること六・六キロで、燕の絶頂に達する。

何れの山岳も大體同樣であるが、高山は、植物の分布上、喬木帶・灌木帶・草本帶等といふ風に分類される。その喬木帶は、下の方に濶葉樹が多く、或る高度から針葉樹に變る。更に登れば、本文では「ほひまつ」などが代表する灌木帶になる。本教材を讀むに從つて、おのづからさうした地理的・理科的な觀察が書かれてゐることに氣づくであらう。さうして、幾つかの高山植物の名が出て來るが、それは必ずしも代表的なものといふ意味でなく、兒童の實際に登つて、目につき易いものを中心として敍したのである。左にそれら植物につき簡單に説明を附しておく。

さるをがせ――大きな針葉樹の幹や枝から、四・五十センチの長さに垂れさがる地衣で、白い粉を吹いた眞白な糸のところどころから、短い鬚のやうな枝が出てゐる。全體がかさかさしてゐて、生きてゐるとは思へないやうな植物である。

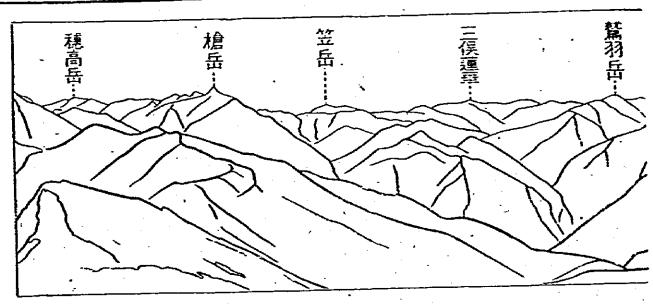
ななかまど――針葉樹林やはひまつなどに交つて生えてゐる木である。藤のやうな羽狀の葉をつけ、夏の初めに、梅の花の形をした小さな白い花が群がつて咲く。やがて赤い南天のやうな實ができる。秋には美しく紅葉する。幹には水分が多く、燃えにくいところから、七度かまどに入れても燃えない意味で、ななかまどといふさうである。



いはかがみ――土際からうちはのやうな葉を四方へ擴げる草で、針葉樹林の中によく見られるが、更に高い所にもある。葉が厚くてつやつやしてゐる。多くは赤みを帶びてゐて、葉だけでも美しい。夏の初め、葉の間から十センチ程の莖が立つて、その先に桃色の花が數輪、總になつて咲く。釣鐘形の花であるが、先がこまかく裂けてゐるのが珍らしい。

ほひまつ――葉は五葉の松に似て、五本づつ集つて枝についてゐる。幹が直立しないで、常に地面にはひ、枝の先だけを持ちあげてゐる。幹の成長ののろいもので、直徑十センチに達するほどのものである。針葉樹林を拔けてから、山頂の近くまではひまつの生えてゐる高山が多い。

たかねざくら――「みねざくら」ともいひ、小灌木となつて、針葉樹林の終る邊りや、はひまつの中に交つて生えてゐる。花はさくら色、誰が見てもさくらであるとうなづかれるが、普通のさくらほど美しくはない。眞夏の山に來て、さくらの



花にまためぐり會つたといふなつかしさのある花である。

しなのきんばい――高山帶の濕り氣の多い所に生える。丈三十センチほどの草で、掌狀の葉がこまかく裂けてゐる。八月ごろ、徑三センチほどの美しい鮮黃色の花が咲く。蕚の數は五六枚ある。群がつて咲き、お花畠を作つてゐるところは美しい。

みやまきんぽうげ――「しなのきんばい」と同じやうな所に生える。花もこれに似てゐるが、形はずつと小さく、普通のきんぽうげのやうである。

はくさんいちげ――これも「しなのきんばい」と同じやうな所に生える。丈二三十センチの草で、掌狀の葉は深く切れ込み、全體に白い毛が多い。花は純白で、三四輪づつ集つて出てゐることが多く、八月ごろ、お花畠を一面に白くおほつてゐるのは美しい。

べにばないちご――丈七八十センチの灌木で、葉は三枚の小

葉に分れてゐる。徑二三センチの深紅色の美しい花が咲く。瓣の數は五枚である。お花畠のところどころに散らばつて生えてゐることが多い。秋には黄色がかつた赤いいちごが生る。

連絡

初等科地理上「中央の高地」と連絡して取扱ふ。

十四　北千島の漁場

教材の趣旨

「山の朝」「燕岳に登る」と、前二課は山岳に關する教材であつた。一轉して、本教材及び「われは海の子」は海洋に關するものであり、山と海に亘つて、わが國土の特質を具象化し、山に鍛へ、海に練る兒童の意氣を示してゐる。特に本教材に於いては、將來益有望な北千島漁場にその素材を求めて、海國日本に於ける水産開發の念に培はうとするものである。即ち北洋上、北千島の鮭鱒漁業の情況を活寫し、ここに奮闘活躍してゐる人々を偲び、海の幸を獲得する歡びにひたらせつつ、水産事業の重要なことを感得させるのが趣旨である。

因みに北千島といふのは、北緯五十度以北、根室から約六百浬の距離にある幌筵（ホロシュツ）、占守（シムシュ）及び阿頼度（アライト）、志林（シリキ）規の四島の總稱である。北千島の鮭鱒漁業殊に鮭鱒流網業は、カムチャッカ沖公海の母船式鮭鱒漁業の發展に刺戟されて近年勃興した漁業である。昭和六年、北海道廳は、北千島附近の海面を鮭鱒流網使用許可區域に指定して、これを解放したことにその端緒を發し、爾來漁船數も增加し、漁獲高も頓にのぼり、今は大いにその發展が期待されるにいたつた。

しかも大東亞戰爭下、わが北方海洋に關心が深まり、遠くアリューシャン列島にまでわが國威が及ぶにいたり、それが海上權の確保とともに、銃後食料增産の急務を帶びて來た今日、本教材の價値は、益高いものがあらう。

文章

本教材は、北洋上に於ける漁撈の壯觀を目のあたり見るが如く、或ひは漁夫たちとともに作業するが如く、極めて具體的に端的に描寫されてゐる。

初めに「北海道本島でにしんの漁期の終る五月下旬から」漁業の活氣は、次第に北へ移り、「北千島の漁場」が、鮭鱒を取るために賑はつて來ることを敍して、全文の序としてある。

さて北千島へ向かつて出かける船は、せいぜい二十二三トンの小さな發動機船で、一名獨航船といつてゐる。乘組員も、船長、船頭、それに機關士、水夫、漁夫などあはせて、僅かに十人そこそこ、それがこの小船に乘り込み、遠く北方洋上を目ざしながら、太平洋、オホーツク海の大波をついて航行して行く。根室あたりからなら、六百海里ほどの航程であるが、函館方面からだと一千海里、東北の諸港からならその航程は更に延長する。これを乘り切つて行くだけでも、海國男子の氣焰を吐くものであり、心から「けなげにも」と感じられるのである。「幸ひ」にしてこのころは「なぎの日が」多く、乘組員は大助りであるが、それは本教材を讀むものの自らかれらのために願ふ心持でもある。

一旦「北千島の一角」にたどり着き、ここを根據地として、多くの漁船は、それぞれ出動の準備を整へる。機關士たちは船の心臟ともいふべき發動機を愼重に調べ、水夫、漁夫たちは「網の支度」にかかる。この流し網は、幅が約十メートル、長さは實に、五千メートルに及ぶ。これを片端から順々にしかも速かに海におろして行くのであるから、おろしやすいやうに疊み並べ、重ねておかなければならない。船長は船長で、漁撈の運命を決定すべき天候に注意し、多年の經驗によつて判斷をしながら、更に晴雨計を用ひ、科學的な考察を加へて萬全を期さうとしてゐる。

ころもよし「見渡す限りは」靜かな海である。いよいよ「出動」することになり、二百に餘る漁船は、ポンポンポンと輕快な爆音をたてて勇ましく根據地を出發して行く。三時間も快走して行つてから、「さけやますの泳ぎまはつてゐさうな場所を」さがす。さがす方法は、水色によつて判

別したり、水温を調べたり、或ひは潮流の加減をみたりするのである。探してゐるうちに、ここなら確かにゐるといふことがわかり、「投網にかかる。」この時、船はずつと速度を落して、網を繰り出して行く。五千メートルに及ぶ網であるから、おろし終るまでには、かなりの時間を要し、いつのまにか夕暮になり、北洋獨特の濃霧が、一面に立ちこめてしまふ。その濃霧の中を、どこかの汽船が通つて行くらしく、底響きのする汽笛を「ボー」と長々と鳴らすのが聞える。さながら「遠くからただよふやうに」聞えて來る。多分あれはカムチャッカへ行く汽船であらう。その汽笛を聞いてゐると、海洋生活に於ける浪漫的な感情がおのづからわき起り、遠い世界へ思ひが飛び、「一種のあこがれに似たなつかしさ」を感じるのである。

船頭が「網の綱をしつかりつないでおくんだぞ」と注意し、「今夜はなぎらしいが、水温や潮の流れはどうだい」と氣づかつて叫ぶと、「水温は紅まに適度、潮の流れは餘り速くないやうです」と答へる水夫の聲がする。

水温は、六度から八度までが適度である。これを聞いて「きつと大れふだぞ」と船頭は、自信たつぷりの豫言を高らかに語る。これによつて船員たちは、いよいよ勇み立つのであるが、これからの對話もみな濃霧の中でとりかはされてゐる。

海面を見ると、「網の綱の端につけた目じるしの」あかりがぼんやりと光つてゐる。これは、網の位置を知るためと、航海船が網の上に乘り切らないためにつけた指標である。かうして、網をすつかりおろしてしまふと、船は、それぞれ「發動機を止めたまま」「夜明けまで潮のまにまに任せるのである」が、ここらは、いかにも海の人らしい磊落な男性的な情景を表してゐる。

その間に鮭鱒の群は、流し網の張つてあるのを知らないで進んで來て、網の目に頭をつつこみ、えらをひつかけ、つひに網にまかれてしまふ。乘組員たちは、烈しい勞働の疲れのために、たとへ「せま苦しい船室」であらうと、快く熟睡する。それも僅かの時間だけで、「午前二時ごろ」には、も

う起きて働かなければならない。その勞苦をしのぶに餘りがあり、感謝したくさへなる。

「おい、網をあげるんだ」といふ船長の聲がかかると、若者たちは、防水具に身を固めて、勢よく「船室から出て來る」。夏とはいつても、ここ北洋上の曉風は、いやといふほどつめたい。しかし、つめたいとか、寒いとかいつてゐられない。すぐさま海中から網の引きあげにとりかかる。「よいしよ、こらしよ」と元氣のよい朗らかな掛聲を掛けながら、懸命に引つ張る。すると「海面にさざ波が起る」。これは、鮭鱒が水中であばれてゐるからである。果して大漁、網の糸も切れるばかり、大きなますや、さけが、かかつて來る。重い鱒や鮭がぴんぴんとはねる。それを「なれた手つきで」はづしたり、ふるひ落したりする。まるで戰場のやうに忙しい。「見る見る甲板はます・さけの山」、その歡喜、その驚異が、この名詞止めによつて表現されてゐる。

目ざましい「かうした作業」が五時間といふ長い間續けられ、一萬尾の鮭鱒がとれる。時には、更に多くを漁獲することもあるが、また五千匹に滿たないこともある。滿載した鮭鱒の山を眺めて、船員たちは、ほつと一安心する。ふと海上を眺め渡すと、たちこめてゐた濃霧が「だんだん薄れて、太陽が」「にぶい光を投げ」かけてゐる。

再び發動機の音が響きだす。海の幸を滿載した船體は、ずつしりと重くなり、「思ひ切り吃水」も深く、意氣揚々と根據地へ向かつて進路を取つて出發する。やがて濃霧もはれて、行く手遙かに島山が見え、その山頂の殘雪は朝日に映じ、晴々としたわが船の歸りを喜んで迎へてくれる。この漁撈の凱旋ともいふべき歡喜勞働の後の爽快を活寫して、文が結んでゐる。

取扱の要點。

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。地圖と連絡して讀ませ、海原遠い北洋上に出漁してゐる漁夫たちの活動が書いてあることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、北海道本島をあとに北千島をさして出漁する漁船のさまや、北千島の根據地に出動準備をする流し網出漁船や、北洋の漁場で、夜中漁獲作業に從事し、朝方漁夫が船に魚類を滿載して景氣よく根據地へ引きあげるさまを讀み取らせる。

文意の理會に卽して、漁夫たちの活動を生かすやうにきびきびした調子で話すことを練習し、讀みを深めて遠い洋上で漁獲する壯快なさまに感じさせるやうに指導する。

新字、讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「據」「濃」「霧」「獲」「載」等、複雜な文字は、扁旁等にわけて字形、筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

五月下旬から、そろそろ北千島の漁場が活氣を帶びて來る。

北千島の一角を根據地とする流し網出漁船は、いま出動準備の最中である。

沿岸一帶に濃霧が一面に立ちこめる。

水温は紅ますに適度、潮の流れは餘り遠くないやうです。

一萬尾に近い漁獲に船は滿載である。

次のカナヅカヒに注意させる。

幸ひにして
割合ひ
思ひ、思ひ
思ひ切り

注意すべき發音文字ことば等

訛音方言

割合ひ――「ワリャイ」と訛らないやうに注意する。

三時間――「サンチカン」といはないやうに注意する。

さけ――「シャケ」の訛を矯正する。

ゆうべ――「ユンベ」といはないやうに注意する。

端――「ハジ」といはないやうに注意する。

發音

五月下旬――ゴガッゲジュン　　くり出され――クリダサレ

投網――トーモー　　小船――コブネ

白み――シラミ　島山――シマヤマ

ことばの中、または下に來るカ行濁音に注意する。

文字

新字　下旬(ジュン)　根據(キョ)地　沿(エン)岸　漁獲(カク)　蒲(ホ)載

讀替　濃(ノウ)ノー)霧(ム)　紅(ベニ)ます

語句語法

「漁期」「下旬」「漁場」「活氣を帶びて來る」「げなげ」「十人乘りそこそこ」「發動機船」「海里」「なぎ」「根據地」「流し網」「出漁船」「出動準備」「最中」「晴雨計」「空模樣」「快走」「かれこれ」「もつぱら」「投網」「船のとも」「日沒」「北洋」「濃霧」「沿岸」「一種のあこがれ」「水温」「適度」「もろともに」「潮のまにまに」「船室」「防水具」「漁獲」「蒲載」「洋上」「吃水」「殘雪」等は、指導を要する語句である。

「漁期」「漁場」「出漁」「漁獲」等は互に比較させてその語義を確實にする。

次の如きいひ表しが表現を力あらしめてゐることを指導し、文意を理會させる。

その長さが約五千メートル。

見る見る甲板はます・さけの山。

網の網をしつかりつないでおくんだぞ。

ゆうべより少し沖へ出たな。きつと大れふだぞ。

おい、網をあげるんだ。

元氣のよい掛聲だ。

「よいしよ、こらしよ。」

備考

連絡

初等科國語一「皿のおさかな」「ふなつり」同二「大れふ」同三「潮干狩」同四「水族館」同五「海の幸」等と連絡して取扱ふ。

初等科地理上「北海道と樺太」と連絡して取扱ふ。

十五　われは海の子

教材の趣旨

前課に聯關しつつ、本教材は、海に育ち海とともに生きる海國男子の

意氣を韻文の形式に盛り、海洋國たるわが國兒童をして「われは海の子」の自覺に燃えたたしめようとするもので、特に七五の正しい格調と潑剌たる措辭とによつて、兒童の海に對する憧憬が力强く表現されてゐることに留意すべきである。ヨミカタ一に於いて「トビトカメ」の對話によつて示された海への幼い憧憬が、次第に發展して兒童自らの主體的意欲となつてゐるところに、教材配列上の用意がある。

文章

七五調四行六聯の文語による定型詩である。極めて整然たる韻律を持ち、海の子の生ひ立ちを幼年から少年へ、更に將來の決意へと漸層的に敍して首尾一貫してゐる。卽ち、第一・二聯は海邊に生まれ、海とともに育つ幼年時代を、第三・四聯は少年時代を敍し、第五・六聯に於いて海に鍛へた强い心身の自負を述べ、更に第七聯に至つて將來への旺んな決意を明らかにして、全篇の焦點とし、しめくくりとしてある。

第一聯は、冒頭に「われは海の子」といふ力强い主題を置き、ついでなつかしいわが家は白波さわぐ海岸の松原の中にあることをいつて、全篇の序としてゐる。とまやは菅茅などで葺のやうに編んで作つた苫を屋根にふいた家の意で、質素な造りであることはいふまでもない。

第二聯は、さういふ海邊の家に生まれ、海とともに成長した自分であることを述べたのであつて、「潮にゆあみ」するといひ、「波を子守の歌と聞」くといひ、「千里寄せくる波」といひ、いづれも壯んな氣魄がうかがはれる。

第三聯と第四聯は、「童」となつた自分が海と親しむ生活を述べたので、あつて、海邊特有のあの磯の香を、四季絶えることのない花の香であると感じ、松風を比なき妙音と聞き、更に廣い海原や深い海底を遊び、なれた庭であると揚言するところには、兒童の海への憧憬に深く共感するものがある。「丈餘」は一丈餘、「ももひろちひろ」は海の深いことを示してゐるのはいふまでもない。また「ゆくて定めぬ波まくら」には、少年らしい奔放さが表はれてゐる。「波まくら」は、波を枕とするといふことで、海上で生活することをいふのであるが、ここでは、しかと行く手も定めず

日々を海上に暮すといふぐらゐの意味である。

第五・六聯は、幾年も海に鍛へた強い心身の自負を述べ、海國男子の意氣を示したのであつて、「鐵のやうな腕」「赤銅色の皮膚」と、健康そのものの肉體が想像される。さうして、その健康な肉體には、氷山であらうと龍卷であらうと、びくともしないやうな剛健な精神が宿るのである。「はだは赤銅さながらに」は、日に燒けた皮膚の色の形容で、句調を整へる上から省略的に止めてゐる。

第七聯は、第五・第六聯を受け、「さあ海に乘り出して海の富を取らう、さあ軍艦に乘り組んで海國日本を護らう」といふので、大東亞戰下海軍・海員の活躍と相俟ち、兒童の心情に訴へるものがあらう。全篇のしめくくりである。「われは拾はん、海の富」「われは護らん、海の國」と韻律を整へ、倒置的な名詞止めになつてゐるのが、力強い表現で、冒頭の「われは海の子」の揚言に呼應してゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。七五調の流暢な韻文であるから讀みに注意し、韻律を生かして讀ませ、海國少國民の盛んな意氣などを歌つた詩であることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、第一聯は海の子の海べの住家、第二聯はその生ひ立ち、第三聯は樂しい濱邊の生活、第四聯は愉快な海上生活、第五聯はがんじような身體、第六聯は盛んな意氣、第七聯は堅い決意が歌つてあることを讀み取らせ、讀みを深めて、海國民としての海に對する感情・興味を昂揚するやうに指導する。

讀みを反復し、詩情を深めて、自然に暗誦に導く。

暗誦を利用して、全文を書寫させる。その際次のカナヅカとに注意させる。

われは
さわぐ
波を
海の氣を
吸ひて
かをりあり

吹く風を
いみじき樂とわれは聞く
きたへたる
かひなあり
はだは
波にただよふ
大船を
われは拾はん

注意すべき發音　文字　ことば等

アクセント

はな(鼻)――ハナ　　はな(花)――ハナ

訛音方言

煙――「グブリ」といはないやうに注意する。
遊び――「アスビ」と訛らないやうに注意する。
拾はん――「ヒラワン」といはないやうに注意する。

發音

白波――シラナミ　　松原――マツバラ
いその香――イソノカ　　いみじき樂――イミジキガク
大船――オーフネまたはオーブネ
ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　童(ワラベ)　龍(タツ)卷
讀替　子守(モリ)　富(トミ)

語句語法

「海の子」「とまや」「住みか」「ゆあみ」「千里寄せくる海の氣」「いその香」「不斷の花」「なぎさ」「いみじき樂」「丈餘のろかい」「あやつりて」「ゆくて定めぬ波まくら」「ももひろ」「ちひろ」「きたへたる」「黑みたる」「赤銅さながらに」「氷山」「恐れんや」「龍卷」「おどろかじ」「いで」「海の富」等は、指導を要する語句である。

次の如き主體的な句は、表現に卽して海の子の心持を理會させるやうにする。

高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。

なぎさの松に吹く風を、いみじき樂とわれは聞く。
波にただよふ氷山も、來たらば來たれ、恐れんや。
海卷きあぐる龍卷も起らば起れおどろかじ。

「恐れんや」の「や」は反語であつて、「恐れようか、恐れない」の意であること、「おどろかじ」は「おどろかず」と比較して、その違ひを感じさせる。

備考

連絡

よみかた三「海」、同四「海軍のにいさん」、初等科國語一「皿のおさかな」「カッターの競爭」、同二「潛水艦」「大れふ」、同三「朝の海」「潮干狩」「出帆」、同四「船は帆船よ」「觀艦式」「廣瀨中佐」「水族館」同五「海の幸」「軍艦生活の朝」「遠泳」同六「水兵の母」「日本海海戰」「北千島の漁場」等と連絡して取扱ふ。

初等科音樂四「われは海の子」と連絡して取扱ふ。

（以上　七月）

十六　月光の曲

教材の趣旨

世に「月光の曲」といひ傳へられてゐるベートーベンのピヤノ曲にまつはる物語を掲げ、音樂家らしい純情と親切心とを描くとともに、創作三昧の情熱と努力とを寫し、兒童をして音樂の偉大な力に想到せしめ、且眞の藝術作品は、不朽の生命力をもつて後世の人々の魂を淨化し、鼓舞し、慰撫することを感得させようとするものである。

いはゆる「月光の曲」は、ベートーベンの作品第二七第二嬰ハ短調ピヤノソナータのことをさすのであつて、もともと月光を主題として作曲されたものではないが、のちの音樂批評家が、第一樂章が湖の月光を聯想させるといつたことに端を發して、「月光の曲」といはれるやうになつた。この「月光の曲」が、また「青葉の曲」などといはれてゐたことを思ひあ

はせても、人々によつて、それぞれに解釋され、もてはやされたことがわかる。

これが作曲されたのは、確かではないが、ベートーベン三十一歳前後のことと思はれる。これはかれの生まれた年が、西暦一七七〇年であり、この曲が出版されたのは、一八〇二年であることから考へ合はされるのである。

文章

まづ主人公ベートーベンのことを、「ドイツの有名な音樂家」といひ、「また若い時のことであつた」といつて簡明に紹介し、「月のさえた夜、友人と二人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通り」と背景を敍し、續いて「ある小さなみすぼらしい家の前まで來ると、中からピヤノの音が聞える」と、いよいよ物語の幕が開かれて行く。

みすぼらしい家から、ピヤノが聞えて來ることがやや意外であるのに、それが自分の作曲したものであり、しかも「なかなかうまい」ので二人は、吸ひつけられるやうに、「戸外にたたずんで」しばらく聞き耳をたてる。

そこで、「小さなみすぼらしい家」の中のことが、對話によつて、表現されて行く。「にいさん」と呼びかけることばによつて、そこには、兄と妹とがゐることが暗示され、「まあ何といふいい曲なんでせう」で、ピヤノの主が妹であること、この妹は音樂のたしなみのあることなどが想像され、また「家賃さへも拂へない」といふ兄の聲で、この家がいかに貧しいかもわかる。この兄妹の話聲を聞いて、ベートーベンは、憐憫の情もだし難く、「急に戸をあけてはいつて」行く。友人は、それをとめる暇もなく、そのまま「續いて」はいつて行く。

場面は一轉して、部屋の内部となる。「薄暗いらふそくの火」「色の青い元氣のなささうな若い男」「舊式のピヤノ」「よりかかつてゐる」妹、これらは、一見貧しい風景であるが、不思議に陰鬱ではなく、むしろ清潔な美しさが感じられる。この靜かな部屋に、突然、未知の男が二人もだしぬけにはいつて來たので、兄妹が「さも驚いたらしい」のは、あたりまへである。

ベートーベンは恐縮に思ひ「ごめんください」とあわてて謝罪するあたり、音樂家らしい純眞卒直な性格が現れてゐる。「私は音樂家ですが、おもしろさについつり込まれて」といつて辯解するのだが「妹の」「さつと赤くなつた顏」を見たり「やや當惑」した兄のやうすを見ては、ベートーベンもいよいよ面喰ひ「實はその、今ちよつと」と口ごもりながら、改めて詫びる。それも極めて自然なことばであり、眞實のこもつた罪のない仕草であつたので、その場の不安な空氣も和ぎ、みんな「思はずにつこり」とする。「一曲ひかせていただきませう」との申し出に對して「ありがたうございます」と、丁寧に返事をし「まことに粗末なピヤノで」と遠慮さへ示す。それにしても「樂譜もございませんが」といふのは、ちよつと意外のことばであるので「え、樂譜がない」と聞き返しながら妹の顏を見ると、かはいさうに「妹は盲人である」。かれの同情心は火のやうに燃え、せめて娘のために心をこめて彈いてやらうと思ふ。「いや、これでたくさんです」と、粗末なピヤノに氣もかけないで「すぐにひき始めた」。

一度ピヤノに手がふれると、ベートーベンは忽ち樂聖の面目を發揮する。「最初の一音が」既に「きやうだい」の耳にはただならぬものに聞えた。わが家のこの舊いピヤノから流れ出る音とは、どうしても思はれない。「何者かが乘り移つたやう」なかれ「何をひいてゐるか、かれ自身にもわからないやうな」かれ「ただうつとりして感にうたれてゐる」「きやうだい」「まつたくわれを忘れて」ゐる「友人」、この妙なる調べに「一同は夢に夢見るここち」である。ベートーベンといふ非凡な音樂家によつて釀し出された恍惚境である。

「折からともし火がぱつと明かるくなつたと思ふと、ゆらゆらと動いて消えてしまつた」以下、筆致は頗る印象的に運ばれる。らふそくは燃え盡くし、あたりが暗くなつたので「ベートーベンは、ひく手をやめた」。その時、友人が氣をきかして「そつと立つて窓の戸をあける。すると「清い月の光が流れるやうに入り込んで、ピヤノのひき手の顏を照らし」た。神々しい名畫でも眺めるやうな情景である。

ただならぬこの樂人の前に、「兄は恐る恐る近寄つて」名を尋ねると、ベートーベンは、すぐ名をあかさないで、「まあ待つてください」といひさして、またピヤノを「ひき始めた」ところに、物語のおもしろさがある。彈くその曲は、「さつき娘がひいてゐた曲」で、つまりベートーベン自身の作品なのである。これを彈くことによつて、暗々裡に名を明かしたものと見られる。「きやうだいは思はず」「ああ、あなたはベートーベン先生ですか」と驚き叫ぶのはそれに照應してゐる。かれは、立ちあがつて、そのまま歸らうとすると、三人が「どうかもう一曲。としきりに」賴む。ベートーベンもこのまま立ち去りがたく、「再びピヤノの前に腰を」おろすのである。

窓からさし込む月光は、ますます明かるく、まさに彈かうとする樂聖の頭を、肩を、胸を斜に照らしてゐる。「それでは、この月の光を題に一曲」といふのは、今までに作つた曲を彈くのでもなく、他人の作つた曲を彈くのでもない、ベートーベン自身が新たに、ここで作曲しつつ彈かうといふのである。天來の樂想を受胎した歡喜と情熱とを双眸に輝かしながら、「しばらく澄みきつた空を」眺めてゐた」かれの「指がピヤノに」ふれる。

ここから以下の文章は、「月光の曲」を文學的に表現したところで、樂想の豐かな變化と微妙な曲折とを、自然の風光に託して、これを象徴的に描き出したところである。

即ち、「ちやうど東の空にのぼる月が、しだいにやみの世界を照らすやうに」といふのは、第一樂章アダージョ嬰ハ短調の氣分を具象的に敍したものであり、「いかにものすごい、いはば奇怪な物の精が寄り集つて、夜の芝生にをどるやう」とあるのは、第二樂章アレグレット、ニ長調の感じを簡明に描いたところ、「急流の岩に激し、荒波の岩に碎けるやうな調べ」は、第三樂章プレストアジタート嬰ハ短調の幻想を比喩的にいひ表したのである。この限りもない美しい、しかも底力のある旋律を耳にして、三人は「驚きと感激でいつぱいになつて、ただぼうつとして」しまふば

かりである。「ひき終つたのも氣づかないくらゐ」である。ベートーベンは、「さやうなら」といつて「立つて出かける」。「きやうだい」は夢からさめたやうに、あわて氣味に、「先生、またおいでくださいませうか」と「口をそろへて」いひかける。二人の寂しい、貧しい兄妹にとつては、切なる願であつたらう。それに對して、「まゐりませう」と快く返事してやりながら、「ちよつとふり返つて」娘を見やつた。何でもないこの擧動に、ベートーベンの溫情がうかがはれる。

終りの一節は、夜を徹して書きあげた名曲の由來を、手短に敍した後日物語ともいふべきもので、この物語の餘韻をなしてゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音文字、語句等について指導し、確實に讀ませる。劇的な文章であるから、靜かに文の筋がわかるやうに讀ませ、ベートーベンが憐れな娘に同情し、月光の曲を創作するに至つたことが書いてあることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、時、場所、人物等を明らかにさせ、ベートーベンが月夜に散歩に出て、自作の曲をひいてゐるピヤノの音に興じて娘の家に入る。

娘兄弟のあはれな身上に同情し、一曲ひいてやる。

火が消えて、美しい月の光が流れるやうに入り込んだ。

娘たちはその妙音に醉つて、聞いてゐる。更にひく一曲で引き手がベートーベンであることを知つて驚き、もう一曲をと賴む。

月はますますさえ渡る。

ベートーベンは感興に乘つて月の光を題に更に一曲を引きだす。

その夜まんじりともせず、月光の曲を書きあげ、不朽の名聲を博した。

かうした劇的情景が眼前に見えるやうに文意を讀ませ、その美しい藝術的態度に感動させるやうに指導する。

人物及び讀み手を定めて劇的に朗讀させる。會話の部分は會話らしく、他の部分はその場面を生かして讀ませ、文の情趣を味はせることが大切である。

新字讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「賃」「譚」「盲」「異」「怪」等複雜な文字は扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

二人は戸外にただすんで耳を傾けてゐた。

家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。

實は今門口で聞いたのです。

粗末なピヤノで、それに樂譜もございません。

妹は盲人である。

兩眼は異樣にかがやいた。

奇怪な物の精が寄り集つてをどるやう。

「月光の曲」といつて不朽の名聲を博した曲である。

次のカナヅカヒに注意させる。

（かれは突然かういつて

ベートーベンはかういつて

つりこまれてまゐりました

まゐりませう。

何といふいい曲なんでせう

ひかせていただきませう

おいでくださいませうか

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

あし（足）――アシ　　あし（芦）――アシ

こし（腰）――コシ　　こし（輿）――コシ

訛音方言

家の前――「イエノマイ」の訛を矯正する。

赤く――「アコー」といはないやうに注意する。

なつたと思ふ――「と」を落さないやうに注意する。

消えて――「ケエテ」の訛を矯正する。

指――「イビ」の訛を矯正する。

發音

さえた夜――サエタヨ　　二人――フタリ

小路――コミチ　　ピヤノの音――ピヤノノネまたはピヤノノオト

薄暗い――ウスグライ、　情――ナサケ
門口――カドグチ　盲人――モージン
神に入つて――シンニイッテ
ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　家賃（チン）　樂譜（フ）　盲（モー）人　奇怪（クワイカイ）
讀替　戸外（コ）　家賃（ヤ）　異樣（イヨウ）（ヨー）　不朽（キウ）（キュー）

語句語法

「散歩」「みすぼらしい」「戸外」「たたずんで」「演奏會」「家賃」「身の上」「習式」「來客」「當惑」「だしぬけ」「樂譜」「盲人」「兩眼」「異樣」「神に入つて」「自身」「夢に夢見るここち」「うなだれて」「一轉」「奇怪」「物の精」「夜の芝生」「まんじりともせず」「不朽の名聲」等は、指導を要する語句である。

次の如きいかにも生き生きとしてゐる比喩について指導し、文意を理會させるやうにする。

ベートーベンの兩眼は異樣にかがやいて、その身には、にはかに何者かが乘り移つたやう。

一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか、かれ自身にもわからないやうである。

やさしい沈んだ調べは、ちやうど東の空にのぼる月が、しだいにやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度はいかにものすごい、いはば奇怪な物の精が寄り集つて、夜の芝生にをどるやう、最後はまた急流の岩に激し、荒波の岩に碎けるやうな調べに、

次の如きいひ表しは、互に比較して文意を理會させる。

まつたくわれを忘れて、一同夢に夢見るここち。

ただぼうつとして、ひき終つたのも氣づかないくらゐ。

備考

連絡

初等科國語二「雪舟」、同三「笛の名人」と連絡し、取扱に考慮する。

十七　いけ花

教材の趣旨

ヨミカタ一「ハナツミ」、よみかた四の「菊の花」「おひな樣」などの教材により、早くから草花に對する兒童の關心が取りあげられてゐるが、初等科國語一「夏やすみ」の百合の花や、同二「梅」や、同七「晴れ間」の露草に至つて、いよいよ花を見る心が深められて行つてゐる。

本教材は、かうした草花を愛する心情を「いけ花」の上に生かし、花をいけることは、花本來の美を一層よく表すとともに、それをいける人の心持まで高めて行くことを敍し、日本人は男でも女でも皆花を賞美し、これによつて、日常の生活をゆたかにして行く優しさのあることを感得させようとするものである。

なほ本教材は、前課の「月光の曲」を受け、次課の「ゆかしい心」へ續き、更に初等科國語六「ひとさしの舞」、初等科國語八「もののふの情」へ發展して行くものである。

文章

文章は、大陸で生活してゐる姉がその妹に送つた手紙の形になつてゐる。詳しくいへばこの姉は、結婚後間もなく大陸へ渡り、農業を營んでゐるのであつて、もはや一年餘りの月日がたつてゐる。姉は、長い間「いけ花」を稽古してかなり上達してゐるのであるが、妹はやうやくこのごろ習ひ始めたばかりである。本教材は、さきに妹から「いけ花」を習ひ始めたことを手紙で知らせたのに對し、その返事として、「いけ花」に就いての心得や感想などを、書き記してよこしたものである。

姉が大陸で農業を營んでゐることは、「こんなに遠く離れてゐる」とか、「毎日毎日畠へ出て働いてゐる」とか、「大陸の氣候が私に合ふ」とかいふことばによつて知ることができ、更に「この春植ゑつけた野菜類」とか、「一部分だけ收穫しました」とかいふところで、一層それが具體的に示されて

ゐる。

さて、姉が妹にぜひいひたかつたことは、「いけ花」のことに就いてである。姉も好きな「いけ花」のことであるから、妹がこれを習ひ始めたと聞いて大層うれしく思つたのはいふまでもない。しかも自分の長い間使つてゐた「花ばさみ」や「花器などが、そつくりそのまま」妹の手で「かはいがられてゐる」ことを思ふと、そのうれしさはひとしほである。たとへ大陸に移り住んでも、「いけ花」を續けてやつてをり、大陸の野に咲く草花を摘んでは、いけて樂しみ、「二人で野原へ花摘みに行つた時のこと」を懐しく思ひ出す愛情のこまやかな姉なのである。

このやうな妹思ひの姉なればこそ、「はらんを、何度も何度もいけるのは、あきてしまひました」といふ妹の手紙を讀んで、そのまま放つてはおけなかつたのである。このために、もしや妹がお稽古にあきてしまつて、「いけ花」に興味を失ひはしないだらうかといふ姉らしい心配から、「あれはいけ花のいちばんのもとになるもの」だから、「しつかりおけいこをしておかなければなりませんよ」と勵まし、「何を覺えるにしても、そのもとをのみこむことが大切」だと、藝道に對する敎へを示したのである。

さうして、一つのことを習ふのは生やさしいものでないこと、わがままな心や、氣分的な氣まぐれでは、到底精進できるものではないことなどを言外に暗示してゐる。

花を生けてゐるうちに、いつのまにか自分の氣持がその上に現れ、しばしば「自分ながらびつくりする」ことがある。これを具體的に說明して、不愉快な時にいけた花は、不愉快な形になり、樂しい時にいけた花はいかにも樂しげに見えるといつてゐる。つまり物心一如、自分も花も一つになる境地である。隨つて花をいけようとすれば、まづわが心を樂しく美しく整へなければならない。かう考へて來ると、「いけ花」は、單なる技術ではなく、自分の心を高め、清めて行く修行道であることに氣がつくであらう。

次に話題を變へて、映畫に現れた「日本の兵隊」が「野菊の枝」をつけてゐ

るのを見て、これだから皇軍はほんたうに強いのだと、花から見た軍人精神を具象的に敍してゐる。胡簏に梅が枝をさした景季の心も、勿來の關にさくらを歌つた義家の心も、時こそ違へ、みな同じ日本精神に外ならない。

兵隊でさへ、こんなに優しい美しい世界を持つてゐるのだ。まして、「日本の女」たちは、もつともつと心をやさしくし、心を美しくしたいものだ」と、姉はしみじみ思ひ、妹にもこの心がけを持つてほしいと願はないではゐられない。「どうか「いけ花をみつしりけいこして、日本の少女らしい、つつましやかな心を育ててください」と、姉の念願を記してゐるが、この「やさしさ」「つつましやかさ」は、結局日本的な強さの反面として強調されてゐることに注意すべきであり、そこに國民精神としての荒魂と和魂が感得されるわけである。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音文字語句等について指導し、確實に讀ませる。姉から妹に寄せた手紙であることに注意させて、靜かに讀ませるやうにし、大陸へ嫁いでゐる姉が、故郷の妹にいけ花を中心として送つた手紙であることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、姉は大陸の一年を元氣に働いてゐることを知らせ、妹のいけ花についてその大切な心得を說き、日本の兵隊さんが野菊をつけてゐる映畫を見て、強い兵隊さんにもかうした優しい心があつてこそ、大東亞戰爭にも勝ちぬけるのだと感じて、女には特に優しい心が大切なことを述べてゐることを讀み取らせる。

文意の理會に卽して、特にいけ花の心得を中心として話すことを練習し、讀みを深めて、優しい心と書簡に漂ふ姉妹間の溫い友愛の情に感じるやうに指導する。

本文と關聯し、妹の送つた手紙を想像させ、綴らせてもよい。

新字、讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「獲」「封」「摘」等の文字は、扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習する。

この春植ゑつけた野菜類は、この間一部分だけ收穫しました。

その時うつした寫眞を同封しておきました。

野原で花を見つけたので、それを摘んで來ました。

日本の兵隊さんが肩のところに野菊の枝をつけてゐました。
それでこそ世界の人々をびつくりさせるやうな大東亞戰爭を戰ひぬくことができるに違ひありません。

次のカナヅカヒに注意させる。

離れてゐると
働いてゐることが
おけいこをしてゐるさうですね
かはいがられてゐると思ふと
こもつてゐなければなりません
こもつてゐるのだと

注意すべき發音　文字　ことば等

アクセント

かた(肩)——カタ　かた(型)——カタ

訛音方言

できて——「デケテ」といはないやうに注意する。

ゐなければ——「イネバ」といはないやうに注意する。
びつくり——「ビックラ」と訛らないやうに注意する。
かついで——「カツイテ」といはないやうに注意する。
枝——「イェダ」の訛を矯正する。

發音

過して——スゴシテ
思ひ出され——オモイダサレ
やさしい情——ヤサシージョー　またはヤサシーナ・サケ
ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　收穫(カク)　同封(フウ)　摘んで

語句語法

「いけ花」「大陸の氣候」「野菜類」「收穫」「同封」「花器」「ニュース映畫」等は、指導を要する語句である。
次の如き受身と使役との助動詞について指導し、その用法になれさせる。

かうしたやさしい情がこもつてゐるのだと考へさせられました。（受身）
世界の人々をびつくりさせるやうな大東亞戰爭を戰ひぬくことができるに違ひありません。（使役）

備考

連絡

初等科國語二「梅」「小さな温床」、同四「母の日」「早春の蒲洲」、同五附錄「天地を開く」、同七「姉」等と連絡し取扱に考慮する。

十八　ゆかしい心

教材の趣旨

大東亞戰爭下、皇軍の勇猛果敢な激鬪の半面に、その奥ゆかしい心を物語る光景が隨所に展開されてゐる。かうしたゆかしい心は、直接古の武士道精神につながるものであり、昔の武士たちが戰場に於いていろいろな心にくき挿話を遺して、戰爭の歷史を飾つてゐるのに通じるものである。

この奥ゆかしさがあつてこそ、皇軍は眞に強く、おのづから氣品も備つてゐるのである。本教材は、大東亞戰爭の赫々たる戰況を眞正面から描いた種々の教材と表裏一體たる關係に於いて、皇軍のゆかしい姿を兒童に感得させ、花も實もある皇軍の精神を理會させようとしたものである。

なほ本教材は、初等科國語七「いけ花」、同八「もののふの情」と呼應するとともに、次課の「俳句」とも聯關するものである。

文章

「長唄」「猫」「俳句」の三部からなつてをり、いづれも短い文で、一つの場面が印象的に描かれてゐる。

「長唄」は、フィリピンのある戰線に於いて、偶然起つた事件の一斷面を書き表したものである。對敵宣傳に從事してゐた宣傳班員が、敵陣を

間近の塹壕の中でラジオの點檢をしてゐた。すると、まつたく偶然にも、日本から放送される長唄が聽取された。日本を去ることおよそ三千餘キロの第一線に於いて、なつかしい故國の長唄が聞えて來たのである。平素は長唄などには耳も傾けないやうな者でも、この場合しみじみとこの歌聲に耳を澄ましたのである。そこに日本の優れた傳統の力と、その傳統から離れることのできない日本人の心が、まざまざと見出される。

「フィリピンのざんがうの中で、日本の長唄を聞くなんて、うれしいことだね」――長唄を聞いて、うれしさなつかしさを感じる國民の心であればこそ、水火をも辭せず、平然とそのさ中へとびこんで行くのである。つまりかうしたゆかしい心と、果敢な戰鬪精神とは、まさに一如の關係を持つ。だれいふとなく發したこのことばを受けて、「みんなはにこにこしながら、長唄の音に耳を傾けてゐた」といふところに、皇軍のうるはしい姿が看取される。次の「猫」もやはりフィリピンの戰場で拾つた一つのこのましい挿話である。

バターン半島全體を覆ふ密林の中に、東海岸の要衝バランガへ達する一本道が通じてゐる。その道を、今、皇軍はひた押しに進擊して行く。敵は、バランガの西方、標高千二百八十八メートルのナチブ山の高地に砲兵觀測所を設け、皇軍の所在を見定めては、砲彈を遠慮なく擊ちまくつて來る。地の利を得たこの敵からの猛射によつて、「わが軍の貨物自動車は一臺一臺正確な射擊にみまはれる」のであるが、「しかし、この道以外に部隊の進擊路はないので、どうしてもこの難關を突破しなければならない」といふまことに困難な戰況である。味方はといへば、「トラックや戰車は、全部木かげにかくして、敵の砲擊の目標になることを避け」、「みかたの砲兵は、畠の中へずらりと放列をしいて、ナチブ山の頂をにらんでゐる」やうな狀態であつた。

この緊張しきつた第一線に於いて、「ふと猫の鳴き聲を耳にした」のである。張り詰めたあたりの空氣とは、およそ緣遠いやさしい三毛猫が、「か

たはらの貨物自動車の上に」うずくまつてゐたのである。それはつまり「兵隊さんがどこからかつれて來て、かはいがつてゐる猫であつた」のであるが、そこに激しい戰鬪に奮戰する半面、猫をかはいがる兵士たちのゆかしい心根が同時に見受けられる。この心は、戰友互にいたはり助け合ひながら、如何なる戰爭の苦難をも突破して行く大いなる情感に通ふもので、この心あつてこそ、皇軍の威力はその輝きを增すものである。

「俳句」も、フィリピンの戰線に從軍した陸軍の報道班員の手記に取材したもので、兵士から俳句を見てくれるやうに依賴されたのは、當の報道員である。

第一線に近い宿營に、待機してゐた時のことであつた――それは、後で說明されてゐるやうに、「前線への出發を明日に控へ」た「その前夜」のことであつた。一人の兵士が、自作の俳句を「見てくれ」といつて、夜中にやつて來た。この報道班員は、事の意外に驚いたに相違ない。兵士と

俳句、しかも出發を眼前にした前線での夜中のことである。この驚きが、一つの疑問をはらんで、次の文章を讀む興味をそそる。

夜燈火を用ひることは堅く禁じられてゐる――前線であるから、燈火管制が嚴重に行はれてゐる。その暗さの中でやうやく讀み得たのは、次の二つの俳句であつた。

彈の下草もえ出づる土囊かな――第一線の砲煙彈雨の中、ふと眼をかたはらの土囊におとす。そこには、どうであらう、戰爭も知らないやうに青々と草が芽を出してゐるといつた心持を表した句である。生死を賭した激戰の最中にも、萠え出る青草に詩心を感じるところに日本の兵士の奥ゆかしさがあり、しかも芭蕉の「山路來てなにやらゆかしすみれ草」と一脈相通じるものさへ感じられる。なほこの句の季題は、「草もえ出づる」で表されてゐるやうに、春である。フィリピンは常夏の國で、春夏秋冬の區別はないが、その地にあつても、青草に春を感じるのがわが國民性である。

密林をきり開いては進む雲の峯――密林はいはゆるジャングルで、雲の峯は入道雲のこと。バターン半島の密林を伐り開いては進んで行くと、空には大きな入道雲が立ちはだかつてゐるといふ意味で、「雲の峯」は夏の季題である。流汗淋漓、道なき密林をかき分けながら進む皇軍將士の姿が、この句の中に躍動してゐる。

この俳句の作者は、四十近くの名もない一兵士である。それが、前線へ出動する前夜、自作の俳句を、文學の心得のある報道班員に見てもらひたいといふのである。自作の俳句を發表したいといふ意欲にもとづくものであらうと報道員は推量し、「陣中新聞に發表してはどうですか」とたづねてみた。すると兵士はそんな氣持を毛頭持つてゐない。そこで「あなたの名前は」とたづねたが、ただ「だまつたまま笑つて」一言も語らない。結局、この兵士は、自作の俳句が、俳句になつてゐるかゐないかを報道員にみてもらひたかつたのであり、陣中新聞に發表し得るほどのできであつたことに滿足し、それで、その「滿足を感謝のことばに表して」歸つて行つたのである。

明日、第一線に立てば、今夜は最後の夜となるかも知れない。自分の心持を、ぎりぎりいつぱいのことばで表現した俳句を、理會してくれる人にのみ示して、第一線に戰ふ自分の氣持をうつたへようとしたのである。この謙虛な奥ゆかしい心持があればこそ、人柱となつて歩兵を渡河させる工兵があり、その他緣の下の力持のやうな立場で、甘んじて犧牲となる幾多の皇軍戰士も生まれて來るのである。そこに大東亞戰爭を戰ひぬく眞の底力が看取されるであらう。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音文字、語句等について指導し、確實に讀ませる。「長唄」「猫」「俳句」三篇ともに短篇であるから、全文を通じて讀ませ、各篇に一貫するゆかしい心をわからせる。

讀みが進むにしたがひ、「長唄」ではフィリピンの塹壕の中で東京から放送する日本の長唄を聞いてなつかしがつた宣傳班員、「猫」ではナチブの敵陣地に對し、みかたの砲兵

が放列をしいて敵をにらみつけてゐる第一線で三毛猫を育ててゐる兵隊「俳句」では出發を明日に控へた夜自作の俳句を見てもらひ陣中新聞への發表を勸められても、そんな氣はないと答へ名前はとたづねられても默つて笑つたまま滿足してかへつた兵隊この三者に通ずる戰陣の中にも餘裕をもつてゐるゆかしい心に感じさせるやうに指導する。

この種の教材では本文を見ながら常體口語を敬體によつて話すことを練習させる。なほ類話を持つてゐる兒童には發表させてもよい。

新字は適切な機會を捉らへて指導する。「擴」「偶」「偵」は扁旁等にわけて字形筆順に注意し確實に指導する。

次の如き文によつて書取を練習させる。

宣傳班員はざんがうの暗がりの中で擴聲器の點檢をしてゐた。

偶然にも東京放送局からの電波がはいつて來た。

飛行機からの偵察でもはつきりわからない。

貨物自動車の上に三毛猫がうずくまつてゐる。

兵隊さんは俳句を讀んでもらつた滿足を感謝のことばに表して部屋から出て行つた。

次のカナヅカヒに注意させる。

おほほれてゐる
みまはれる
見まはす

そびえてゐる
もえ出づる
見える

控へながら
答へた

注意すべき發音　文字　ことば等

アクセント

はうそう（放送）――ホーソー　　はうさう（疱瘡）――ホーソー

訛音方言

はつきり――「ハッキラ」といはないやうに注意する。

ほとんど――「ホトント」といはないやうに注意する。
出發――「シッパツ」といはないやうに注意する。
もらつた「モロータ」といはないやうに注意する。

發音

ある夜――アルヨ　　暗がりの中で――クラガリノナカデ
ざんがうの中で――ザンゴーノナカデ　　長唄の音――ナガウタノネ
ナチブ山――ナチブザン　　どの邊――ドノヘン
木かげ――コカゲ　　夜中――ヤチュー
さし出す――サシダス　　明日――アス
ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　擴(カク)聲器　偶(グー)然　偵(テー)察

語句語法

「ゆかしい心」「第一線」「宣傳班員」「ざんがう」「擴聲器」「點檢」「偶然」「電波」「砲兵觀測所」「偵察」「平原」「友軍」「見當」「進擊路」「難關」「突破」「目標」「放列をしいて」「うずくまつて」「宿營」「待機」「彈の下草もえ出づる土饗かな」「密林をきり開いては進む雲の峯」「前線」「陣中新聞」「發表」等は、指導を要する語句である。

次の如き受身の助動詞に注意して、指導の心構とする。

山全體が熱帶の森林におほはれてゐるので、正確な射擊にみまはれる。
夜、燈火を用ひることは堅く禁じられてゐる。

備考

連絡

初等科國語一「支那の春」、同二「ゐもん袋」、同五「戰地の父から」「晴れたる山」「動員」、同六「敵前上陸」、「ひとさしの舞」同七「いけ花」等と連絡し取扱に考慮する。

十九　朝顔に

教材の趣旨

巻五に於いて戦陣俳句を、巻六に於いて明治時代の俳句を掲げて、現代俳句の概要を示したが、本課では更に古典俳句中、理會に容易なものを收めて、次第に俳諧の本質にふれさせようとするものである。

千代・一茶はいはゆる蕉風俳諧の直系とはいひ難いが、もつぱら兒童に理會の容易なことを第一として、巻八に掲げる蕉風俳諧への階梯としたものである。ここに掲げた千代・一茶の句は、ともに素朴平易な表現の中に溫い詩情が盛られてゐるから、俳句表現の簡潔な型に馴れさせつつ、その妙味を味はせるべきである。

文章

千代は有名な女流俳人で、その句は古來人口に膾炙してゐる。それだけに、他人の句で千代の句と誤傳されてゐるものも多いが、ここでは「千代尼句集」と「俳諧松の葉」によつてある。千代は加賀松任の人、元祿十六年表具師福增屋六兵衛の子として生まれた。結婚して一子を設けたといふが、これには異說もある。後年剃髮して素園と號し、安永四年七十三歳で歿した。しかし傳記の詳細を兒童に知らしめる必要はない。

第一句――古來最も人口に膾炙した句の一つである。朝起きて見たら、井戸のつるべに朝顔の蔓がはひかかつてゐたので、それを取り拂つて汲むに忍びず、隣家からもらひ水をしたといふので女らしいこまかい思ひやりがよく現れてゐる。「もらひ水」と、名詞止めの形が一種の詠歎にもなつてゐる。朝顔は秋の季題である。

第二句――秋風が木立を渡ると、何か木からこぼれるやうに物が落ちる。澄んだ、どこかもの寂しい秋の感じが非常に印象的に表されてゐる。「こぼるる」といふ表現が、この句の眼目で、しかも木の實が落ちるのか、何が落ちるのかはつきり示さず、何か「もの」がこぼれるやうに落ちるといふところに新しい着眼がある。「こぼるる」は文語で、口語ならば「こぼれる」であることはいふまでもない。

第三句――月はすべてを美化する。美々しい着物も質素な着物も、こ

こでは違ひはない。木綿であらうと、絹であらうと、どんな柄であらうと、月の光ではみな同じやうに見える。しかも美化されてみな美しく見える。月見の人々が、月光に照らされ、だれもかれも美しく見えるといふので、女らしい心持をそのまま詠んだ素直な句である。「美しうなる」は「美しくなる」の音便形である。「月見」は秋の季題である。

第四句――卽興的な句で、雪道を下駄で歩くと、齒に雪がはさまつて歩きにくく、よく轉ぶものである。轉んでも雪であるから大したことはない。をかしな恰好で歩いてゐる人が滑つて轉んだ、それををかしいと笑つた自分も、その拍子に氣がゆるんでころつと轉んだといふので、一種の滑稽味があり、子どもらしい氣持が現れてゐる。

一茶は近世時代後期の滔々たる俗俳の中にあつて、時流に媚びず、獨特の境地を切り開いた俳人で、その句は、自由な表現の中に深い自然愛や、弱者動物に對する溫い思ひやりの心の現れてゐるものが多い。

本名小林信之、通稱彌太郎、寶曆十三年信濃柏原に生まれ、諸方へ遊歷したが、五十を過ぎてから鄕里に一家を構へ、文政十年六十五歲で歿した。

第一句――人間が雀の子や馬と會話のできる童話の世界である。大きな馬が通るぞ、危い危い、どきなさい、どきなさいといふので、「そこのけそこのけ」といひ、「お馬が通る」といひ、何か殿樣の行列でも通るやうな仰山ないひ方に一種の諧謔があるが、その底には可憐な雀の子に對する滿腔の愛情がこめられてゐる。「雀の子」は春の季題である。

第二句――痩せこけた弱さうな蛙、それと太つた强さうな蛙との勝負で、見た眼にも痩せ蛙は負けさうである。作者は、一生懸命に痩せ蛙に肩を入れてゐる。おれがついてゐるぞ、大丈夫だ、負けるなと力みかへつてゐる。一茶の弱者に對する無限の愛情がうかがはれるとともに、その大眞面目で肩を入れてゐるものが痩せ蛙であり、また「一茶これにあり」などと敵討ででもあるやうに表現が誇張されてゐるところに滑

稽があつて、しかもその滑稽を通して、溫い心がにじみ出てゐる。「蛙」は春の季題である。

第三句――「やれ打つな」は、「やれまあ、打つのはちよつと待て」である。蠅はとかく人から嫌はれる、見つかれば打ち殺される。たしかに穢らしく、厭はしい虫である。だが、人からねらはれてゐるのも知らず、止つて無心に手を摺り足を摺つてゐるのを見ると、やはりかはいい、無邪氣である。手を摺り足を摺つてゐるのは拜んでゐるやうな氣さへする。とても打首になどはできないではないか。まあちよつと待て、である。弱いものに對する作者の深い愛情がここにもうかがはれるとともに、「やれ打つな」といひ、「手をする足をする」といふ、いはば芝居掛りの表現に一種の諧謔がある。「はへ」は夏の季題である。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、俳句の形式に現れた韻律を生かして確實に讀ませる。

作者千代及び一茶について簡潔に紹介し、本教材理會の一助とする。

千代の句については、朝顔に同情してもらひ水をし、物の落ちる音に秋を感じ、月夜に美しく見える着物をながめ、轉んで喜ぶ雪見等に對するものやさしい美しい心を味はせるやうに指導する。

一茶の句については、雀の子と遊んだり、やせ蛙にみかたをしたり、蠅をかはいがつたりする無邪氣さ、孤邊さを童心に結んで感じさせるやうに指導する。

讀みを反復し、詩情を深めて、自然に暗誦に導く。

暗誦を利用して全文を書寫させる。その際次のカナヅカヒに注意させる。

もらひ水
美しう
笑うて
はへが手をする

注意すべき發音・文字・ことば等

アクセント

き(木)から――キカラ　　き(氣)から――キカラ

訛音方言

取られて――「トラレデ」と濁らないやうに注意する。

はへ――「ハイ」と訛らないやうに注意する。

發音

朝顔――アサガオ　こぼるる音や――コボルルオトヤ

お馬が――オンマガ　やせ蛙――ヤセガエル

はへが――ハエガ

語句語法

「もら、ひ水」「物のこぼるる音や」「美しうなる」「かな」「ころぶ」「これにあり」「やれ打つな」等は、指導を要する語句である。

「かな」及び季題について指導するがよい。

次の如きウ音便に注意し、指導の心構とする。

何着ても美しう(く)なる月見かな

ころぶ人を笑う(ひ)てころぶ雪見かな

備考

連絡

初等科國語二「梅の花」「小さな温床」、同五「秋のおとづれ」「動員」、同六「元日や」、同七「いけ花」等と連絡し取扱に考慮する。

二十　古事記

教材の趣旨

國語教育は、國語文化材によつて、國民的思考感動を得させることに重點がある。しかるに、國語文化材として、古典ほど純粹でしかも重要なものはない。隨つて國語教育の究極が古典教育にあることは自明である。

その點から、國民學校の國語教科書中には、古典から取材した數々の教材が系統的に提出されてゐる。その中でも、特にわが國の代表的な古典を正面から取りあげて、その意義と價値とを闡明にし、古典の精神

を兒童に感得させようとしたものに、初等科國語七に「源氏物語」があり、同八に「萬葉集」がある。これと同じ意味に於いて、ここに「古事記」が掲げられたのである。

本教材に於いては、古事記がどうして成立したか、また古事記を書きしるす場合、國語を漢字で表すことに如何に苦心が拂はれたかを詳述し、古事記によつて、國初以來の歷史が古語のままで傳はり、これを讀むことによつて、古語の中に宿る古代の國民精神に今日觸れることができることをしるして、古事記の意義と價値とを明らかにしてゐる。

古事記の成立に關しては、古來幾多の說がある。今、古事記の序文を見るに、「時有舍人、姓稗田名阿禮。年是廿八。爲人聰明、度目誦口。拂耳勒心。卽勅語阿禮。令誦習帝王日繼及先代舊辭」とある。「帝王日繼」は、朝廷御歷代の御系譜を中心とする古記錄と思はれ、「先代舊辭」は、文字を離れた傳誦言語と思はれるから、阿禮の讀むところは、古記錄と古傳說との兩者であつたと見るのが妥當であらう。本教材は、大體この見解に從つて書かれたものである。なほ、阿禮に就いては、男性說と女性說とがあるが、通說に從つて男子とした。

阿禮の傳誦を漢字を以て書きしるす苦心を描いた箇所では、ことばと文字、漢字の音と訓の關係が具體的に說明されてゐるので、初等科國語五「ことばと文字」、同六「漢字の音と訓」、同七「敬語の使ひ方」、同八「國語の力」等と連絡して、國語の性質を明らかにするものである。

また、古事記の內容を說明したところは、よみかた四「白兎」、初等科國語一「天の岩屋」「八岐のをろち」「少彥名神」「ににぎのみこと」「つりばりの行くへ」、同二「神の劍」、同三「日本武尊」等を想起させ、その原據が古事記にあることを、改めて意識さすことが必要である。

文章

「元明天皇の勅命によつて」、太安萬侶が稗田阿禮の暗記してゐるわが國の古いいひ傳へを文字に書き表すことになつたと、最初に古事記成立の因由を述べ、更にそれが三十餘年遡つた天武天皇の御時、勅命によ

つて、當時二十八歳の阿禮が、「正しい古記錄を讀み、古いいひ傳へをそらんじ始めた」、卽ち「帝皇日繼及先代舊辭」を誦習した事實を敍してゐる。さうして、この阿禮が死んでしまつたならば、「神代以來の尊い歷史も文學も」傳はらないかも知れないことを說いて、古事記作製の意義を明示してゐる。

さて、いよいよ古事記作製の實際に臨むと、「長い物語を讀みあげる」阿禮の苦心、「これを文字に書き表す安萬侶の苦心は」、並み大抵のものではなかつたのである。

殊に、かたかなもひらがなもない時代、文字といへば漢字に限られてゐる時、阿禮の語る「わが國の古いことば」を、そのまま漢字を用ひて書き表すには、一通りでない苦心と工夫が必要であるが、安萬侶は、それを見事克服したのであつた。しからば如何にして國語を漢字で書き表したか。「天地」「草木」のやうに訓のみで表したり、「久羅下」と一字一音で示したり、「速須佐之男命」のやうに、音と訓とを併用して書いた實例を擧げて、その苦心の跡を審かにしてゐる。このやうな點は、初等科國語六「漢字の音と訓」と關聯して、兒童の理會を深めることが肝要である。

がうした苦心の結果、できあがつた古事記三卷は、和銅五年正月二十八日に天皇に獻上された。上卷は、神代の卷とも見られ、天地開闢、國土生成の說話を以て始り、皇祖神としての天照大神を中心とした高天原神話、須佐之男命、大國主神の出雲國經營の出雲神話を經て、遂に神勅を奉じて皇孫の大八洲國に降臨し給ふ條に至り、神話の頂點に達してゐる。更に日向國に天降りましてから、海洋神話の要素を取り入れ、筑紫御三代の神話の後、神代の卷を閉ぢてゐる。中卷は、國家發展の跡を物語る神武天皇の御東征の物語を發端とし、歷代の天皇の御事を記し、應神天皇の御代に至つてゐる。下卷は、仁德天皇の御記に始り、推古天皇の御代に至つてゐるが、上・中卷に比較して神話・傳說の要素が稀薄となり、漸次史實に依據する傾向を示してゐる。この上・中二卷から、既に國語教材として採錄されたものの例を示

して、内容の一班をうかがはせようとしてゐる。

最後の結論としては、「古事記がわが國初以來の尊い歴史であり、文學である」こと、古事記といふ古典によつて、「古傳が、古語のままに殘つたこと」、「古語には、わが古代國民の精神がとけ込んでゐる」ことを表明して、古事記の本質と價値とを闡明にし、隨つて、今日のわれ・われの責務としては、「古事記を讀んで、國初以來の歴史を知るとともに、特に國語教育の立場からすれば、「そのことばを通して、古代日本人の精神を、ありありと」讀み取るやうにしなければならないことを主張しながら、この文章を締めくくつてゐる。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音・文字・語句等について指導し、確實に讀ませる。内容も複雜であるから、特に讀みに注意して指導し、起筆と結尾とに注意させて、古事記は稗田阿禮がそらんじたわが國の古傳を、太安萬侶が、文字に書き表して作つた尊い書物であることをわからせる。

讀みが進むにしたがひ、阿禮が勅命によつて、心魂を打ち込んでわが國の古傳をそらんじたこと、それを文字に書き表した安萬侶の苦心、ことばを漢字で書き表すむづかしさと安萬侶の用ひた方法、古事記のできあがつた年代とその内容等を讀み取らせる。

文意の理會に卽して、話すことを練習し、讀みを深めて古事記がわが國の尊い歴史であり文學であることから、歴史とともに古代國民の精神が傳へられ、尊い古語が殘されたことを理會させ、稗田阿禮と太安萬侶の苦心の大きなことに、感じさせるやうに指導する。

新字・讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「憶」「錄」「魂」「蹟」「載」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形・筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

記憶力の非凡な人であつた。

古記錄を讀み、古傳をそらんじ始めたのは、三十餘年前のことである。

長い物語を讀みあげるに、心魂をささげ盡したことであらう。

三卷の書物にまとめて、天皇に奉つた。

長過ぎて讀むのに不便である。

天皇の御事蹟、その他古代のいひ傳へが、古事記に載せられてゐる。

次のカナヅカヒに注意させる。

天にものぼるここちであつたらう
ささげ盡くしたことであらう
どうなるであらう
簡單でもあらうが
傳はつてゐる
いひ傳へ

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

こじき(古事記)——コジキ　　こじき(乞食)——コジキ
てん(天)——テン　　てん(點)——テン

訛音方言

間違ひ——「マチガエ」と訛らないやうに注意する。

かへつて(却)——「カイッテ」といはないやうに注意する。

同じ——「オナシ」といはないやうに注意する。

割合ひ——「ワリャイ」と訛らないやうに注意する。

發音

元明天皇——ゲシメーテンノー　　文字——モンジ
三十餘年前——サンジューヨネンゼン　　若盛り——ワカザカリ
神代以來——カミヨイライ　　尊い——トートイ
しまふ——シマウ　　今日——コンニチ
使ふ——ツカウ　　草木青——ソーモクセー
天地——テンチ　　草木——ソーモク
天の岩屋——アメノイワヤ　　行くへ——ユクエ

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　記憶(オク)、非凡(ボン)　古記錄(ロク)　御事蹟(セキ)
讀替　心魂(コン)　不便(ベン)　三卷(クワン)(カン)　載(ノ)せ

語句語法

「そらんじる」「古傳」「記憶力」「非凡」「古記錄」「當時」「心魂」「古語」「しかるに」「日常」「漢文流」「不便」「前者」「後者」「方法」「書物」「物語」「御事蹟」「要するに」「國初以來」「古代」等は、指導を要する語句である。

次の如き文例によつて接續詞を指導し、その用法になれさせる。

ところで、これを文字に書き表す安萬侶の苦心は、それにも增して大きいものであつた。

しかるに、阿禮の語るところは、すべてわが國の古いことばである。

しかし、これでは、漢文流に「サウモクアヲシ」と讀むこともできる。

そこで、ほんたうに間違ひなく讀ませるためには、「久佐幾波阿遲以」とでも書かなければならなくなる。

だが、これではまたあまりに長過ぎて、讀むのにかへつて不便である。

殊に大切なことは、かうしてわが國の古傳が、古語のままに殘つたことである。

備考

連絡

よみかた四「白兎」「金しくんしやう」、**初等科國語一**「天の岩屋」「八岐のをろち」「少彦名神」「ににぎのみこと」、**同二**「神の劒」「田道間守」、**同三**「日本武尊」「光明皇后」、**同五**「大八洲」「弟橘媛」「ことばと文字」、**同六**「漢字の音と訓」、**同七**「源氏物語」等と連絡して取扱ふ。

初等科國史上「奈良の都」と連絡して取扱ふ。

（以上　九月）

二十一　御民われ

教材の趣旨

古代萬葉集の時代から、明治の時代に至るまでの人口に膾炙された和歌五首を擧げ、これに簡明な解説を附して教材としたものである。

「やまと歌は、人の心をたねとして、よろづの言の葉とぞなれりける」と古今集の序文にいつてゐるやうに、和歌は古典文學の中でも、とりわけ大和心を端的にいひ表したものである。この古典に直接兒童を觸れさせ、そこに脈搏つ國民的な思考感動に共感させ、すぐれた傳統精神を兒童の心の中に生かし、皇國民としての心情に培はうとするものであり、隨つて、初等科國語五「晴れたる山」、同六「ばらの芽」、同七「見わたせば」の和歌を受け、更に同八「玉のひびき」「萬葉集」につながる教材である。

文章

まづ萬葉集卷六にある海犬養宿禰岡麻呂の歌一首を擧げ、天平の大御代に生まれ合はせた生きがひをしみじみと感じた作者と同じやうに、昭和の聖代に生をうけた兒童にも、その喜びを感じさせるやうに、歌の精神を説明した文章が掲げてある。

一首の意味は、文の冒頭に於いて説かれてゐる通りである。即ち「御民われ」は、「一臣民である自分」の意味で、日本人たるものだれでもみな御民であることを端的にいひ表したことばである。この自覺の上に立つて、次には、「生けるしるしあり」と續けてゐる。「しるしあり」はかひがあるといふ意義で、「生きがひを感じる」と適切に説明されてゐる。「天地の榮ゆる時」とは、この歌が、天平六年に聖武天皇の詔に答へ奉つた歌である點からして理會されるであらう。即ち、當時盛んに遣唐使が派遣され、新羅や渤海國の入貢を迎へて大陸の文化・文明を同化し、奈良の都には、黄金時代が展開されてゐた時であつた。即ち天も地もこぞつて榮えに榮えた大御代であつたのである。「あへらく思へば」の「あへらく」は

「あへる」の延言であり、「會へることを思へば」といふ意味で、「生まれ合はせたのを思ふに」と解釋してある通りである。この歌は、倒置の形を取つてゐるから、「天地の榮ゆる時にあへらく思へば御民われ生けるしるしあり」としてみれば理會に容易であらう。

この歌全體には、萬葉集時代の歌に共通してゐる莊重雄大な調子がただよひ、おほらかな古代人の歡喜が、率直に表現されてゐる。それを「大きな、力强い調子に、古代のわが國民の素朴な喜びがみなぎつてゐます」と說き、この歌の精神としらべの高さとを兒童にわからせた後、天地の榮ゆる「昭和の聖代に生をうけた私たち」といつて、この歌と兒童を結んでゐる。隨つて、兒童は、「この歌を口ずさんで」歌の精神としらべを自得し、古代の歌ではあるが、決して緣遠いものではなく、直接今日の自分たちの氣持を歌ひ出したものであることに氣づかせて、新たに皇國民としての喜びを感得させるやうに書かれてある。

第二首は、古今集卷二に「櫻の花の散るをよめる」といふ詞書を添へて載せてある紀友則の歌で、百人一首にも採られ、人々に親まれたものである。友則は古今集の撰者の一人で、延喜時代のすぐれた歌人であることはいふまでもない。

「ひさかたの」は、「天」「雨」「月」「星」「雲」など天上のものや、「光」「都」などの枕詞で、ここでは「光」の枕詞になつてゐる。「しづこころなく」は、靜かな落ち着いた心でなくといふ意味で、「あわただしく散つて行く」と說明してある通りである。「散るらん」の「らん」は、動作を推しはかつていふ意味の助動詞で、ここでは「どうしてああもあわただしく散つて行くのであらう」といふやうな氣持を表したことばである。

のどかな春の日の光の中に、あわただしく散つて行く――あたりのもの皆が、悠々とした春光に包まれてゐる。そこに櫻の花びらがちらちらと散る。そのやうすをうち眺めて、このやうな自然の美しさに感じた平安時代の歌人の優美な心は、もののあはれを感じるわが國民性の特色である。この心持を高いしらべで歌ひ出したのがこの歌であ

る。

第三首は、源實朝の歌で、その家集金槐集雜部に、「箱根の山をうち出でて見れば浪のよる小島あり。供の者にこの浦の名は知るやと尋ねしかば、伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞きて」と詞書があつて、掲げられてゐる歌である。

實朝は、鎌倉の三代將軍としてよりも、金槐集の作者として、その名を不朽にしたといへる。かれは當時の歌壇の第一人者であつた藤原定家を師として歌道に精進し、定家から贈られた萬葉集を讀んで、雄大な歌風を自得したのであつた。この一首もその代表的な歌の一つで、洋洋とした伊豆の海を背景にして、沖の小島にその焦點を求め、雄大でしかもまとまりのある詠みぶりを示してゐる。「伊豆の海や」の「や」は詠歎の助詞で、「箱根山から伊豆山へ越えて行くと、面前に廣々とした伊豆の海が現れた。そこでまづこの心の驚きを「伊豆の海や」といふことばで捉らへ、次に「沖の小島」卽ち初島に眼をやつて、そこに「白い波が打ち寄せてゐるのが見える」と、深い感動のうちに、繪のやうな風景を歌ひ出したものである。前の歌とともに、わが國土の美しさに感動して、詩情を三十一文字の短詩形の中に遺憾なく表したものである。

第四首は、本居宣長が、寛政二年八月、自畫像に賛をした有名な歌で、日本精神を、朝日に照り映える山櫻の象徴によつて歌ひ出して餘蘊のないものである。隨つて、「いかにもわがやまと魂をよく表してゐます」といふ文のことばを生かして指導する必要がある。「朝日ににほふ」の「にほふ」は照り映える意で、「朝日の光に輝いて、らんまんと咲きにほふ山櫻の花」と説明されてゐる通りである。また「本居宣長は、江戸時代の有名な學者で、古事記傳を大成して、わが國民精神の發揚につとめました」とあるところは、初等科修身四「松阪の一夜」と連絡して取扱ふべきである。

最後の歌は、「明治時代の學者であり、歌人であつた落合直文が、元旦に門松をよんだ歌で」ある。直文は陸前の人で、東京大學古典研究科を卒業後、第一高等學校、國學院等に教鞭を執り、明治三十六年、四十三歳を以

て歿した人で、明治時代の國文學と和歌に清新な氣をみなぎらすことに與つて力があつた。

一首の意味は、「二本の門松のうち、その一本を以て聖壽の萬歳を祝し奉り、その一本を以て親の長壽を祈らう」といふので、忠孝の念に厚い日本國民の心が、新年の門松にことよせて「すらすらと品よくよみ出されて」ある。この精神を兒童に、表現に卽して理會させるには、「聲高く讀んで、その何ともいへないほがらかなつつましい心」を味ははす必要があるのである。

本教材は、このやうに和歌と文章と相俟つて、やまと歌に表はされたやまと心を、兒童の心中に深く刻みつける教材である。

取扱の要點

文章を讀ませて、困難な發音、文字、語句等について指導し、確實に讀ませる。和歌とその解說とが一體になつた特殊な文であるから、和歌とその解說であることが、聞きわけられるやうに讀ませることが大切である。

讀みが進むにしたがひ、それぞれの和歌についてその解說と結んで、榮える御代に生を受けた感激、櫻花をたたへる優美な心、美しい初島の眺めや、大和魂を咲きにほふ櫻花にたとへ、二本の門松に忠孝の意味を持たせた歌の心に感じさせるやうに指導する。

和歌は讀みを反復し、詩情を深めて、自然に暗誦に導く。

新字、讀替の文字は適切な機會を捉らへて指導する。「優」「輝」「揚」「壽」等複雜な文字は、扁旁等にわけて字形、筆順に注意し、確實に書かせる。

暗誦を利用して、和歌は全部書寫させる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

天地の榮えるこの大御代に生まれ合はせた生きがひを感じます。

古代のわが國民の素朴な喜びがみなぎつてゐます。

櫻の花をよんだ歌で、優美の極みであります。

朝日の光に輝いて、咲きにほつてゐます。

江戸時代の有名な學者で、古事記傳を大成して、國民精神の發揚につとめました。

元旦に門松をよんだ歌です。

一本を以て聖壽の萬歳を祝し奉り、一本を以て親の長壽を祈らうといふ意味です。

次のカナヅカヒに注意させる。

生まれ合はせた
心ゆくまで味はつて
ふさはしい
祝はん

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

え(絵)の――エノ　え(柄)の――エノ

訛音方言

合はせた――「アワシタ」といはないやうに注意する。
祝はん――「ユワワン」と訛らないやうに注意する。
祝し――「シクシ」といはないやうに注意する。

發音

天地――アメヅチ　生まれ――ンマレ
光の中――ヒカリノナカ　箱根山――ハコネヤマ

伊豆山――イズサン　よみ出され――ヨミダサレ

ことばの中、または下に來るカ行鼻濁音に注意する。

文字

新字　素朴(ボク)　優(ユー)美　輝(カガヤ)いて　發揚(ヨー)　元旦(タン)　聖壽(ジュ)

讀替　榮(サカ)ゆ　箱根路(ジ)　江戸(エド)

語句語法

「御民われ」「生けるしるし」「あへらく」「生きがひ」「素朴」「聖代」「生をうけた」「日ずさんで」「ひさかたの光」「のどけき春の日」「しづこころ」「散るらん」「優美」「大宮人」「心ゆくまで」「箱根路」「歌人」「敷島のやまとごころ」「朝日ににほふ」「らんまん」「やまと魂」「學者」「古事記傳」「大成」「國民精神」「發揚」「元旦」「門松」「聖壽」等は指導を要する語句である。

「ひさかたの」「敷島の」枕詞に注意し、和歌のもつ詩情を味はせるやうにする。

備考

連絡

初等科國語五「晴れたる山」、同六「ばらの芽」、同七「見わたせば」「古事記と連絡する初等科修身四「松阪の一夜」と連絡して取扱ふ。

附錄

附錄に收めた教材は、この卷に主として南洋に關するものを集め、本文の教材と相俟つて讀書に對する興味を喚起し、讀解力を養ふとともに、大東亞建設の精神の把握と、皇國の使命の自覺に培はうとするものである。

附錄は、時間に餘裕を生じた場合、隨時適當に取扱ふものとする。他教科他科目の教材に聯關して指導すれば、更に意義が深いであらう。

取扱は、通讀を主とし、兒童に自發的に讀ませるやうにする。その場合この教材の順序に拘泥することなく、實際の必要に應じて適宜指導することも差支へない。なほ、附錄には、新出漢字が、提出してないから、それを取扱はないでも、初等科國語八へ移るのに差支へないやうにしてある。

本卷の附錄は、〔一〕「ジャワ風景」、〔二〕「ビスマルク諸島」、〔三〕「セレベスのかなか」、〔四〕「サラワクの印象」の四篇から成り、主として南洋の風土や生活等に親しませるやうにしたものである。

なほこれらの教材の作成には、海軍報道部員の手を煩すところが多かつた。

一　ジャワ風景

ジャワの風景を、紀行文の形に描き出した文章で、本文章を讀ませることによつて、兒童にジャワの風物習慣、歷史等の一端に觸れさせ、ジャワに對する親しみを增さうとしたものである。

〔一〕は、タンジョンプリョクからジャカルタへ行くまでの途中の風物を敍し、〔二〕ではジャワの代表的な果物を、〔三〕ではジャワ人の風俗を、〔四〕ではジャワのかなかの風物を描きつつその歷史にも觸れてゐる。

タマリンド――高さ二十メートルにもなるまめ科の樹で、ねむのきのやうな羽形の葉を茂らせ、枝をよく張つて、涼しい木蔭を作る並木として植ゑてある。熱帶アフリカの原產であるが、今は東亞の各地に植ゑられ、殊にジャカルタでは殆ど全市に

わたつて見られる。十センチメートル程の豆の莢が垂れさがる。住民は未熟のときには、塩漬にしカレーとともに常用してゐる。酸味の強いものからは酢を作り、また砂糖を入れて清凉飲料を作つてゐる。

マンゴスチン――(三頁上圖參照)マライ群島の原産で、十メートル程の木になる果物である。實の形はまくはうりに似て、黑褐色の厚い皮で包まれてゐる。よく切れる刀物で中央から横に皮だけ切り込んで、上半分をすつぽりと取り去ると、中から五六箇の眞白な種が現れて來る。この種は肉が軟かで、味はふと恰も淡雪のやうに溶けて、至極上品な甘味と酸味が口の中に擴がる。この味が高尚なのと、頗る變味し易く遠地に送れないのとで有名であり、また珍重されてゐる。

マンゴー――(二頁の圖參照)マンゴトは四千年の昔から熱帶で栽培された記錄のある果樹であるが、その鄕土がどこであるかはつきりしない。南アジヤ・マライ・セイロンに自生してゐるといふから、そのあたりが發生の地であらう。多くの品種があつて、實の形、色づや、味等少しづつ違つてゐるが、普通楕圓形で、熟すと皮は黃赤色、肉は橙赤色となり、甘い汁がしたたるやうで、一種の芳香がある。杏とパイナップルを交せたやうな味である。

サオ――(三頁下向かつて右圖參照)マライ地方に普通な作物である。楕圓形、暗黑色であつて、一見じやがいもに似てゐる。皮が薄くて剝げやすく、肉は赤褐色で軟くて甘い汁が多い。ざくざくした肉の中に胚乳の堅い種が交つてゐることなど、柿のやうな感じのする果物である。

ドリヤン――(三頁上圖參照)ドリヤンはマライ語で「刺のある果物」の意味であつて、頭大の實の表は一面に角ばつた刺で被はれてゐる。厚い果皮を切り開くと、數箇の種が並んでゐる。種は軟い果肉に包まれてゐる。この果肉がドリヤンの珍味のあるところで、クリームのやうであつて、甘味が強く、その風味のよいこと、これに優るものはないといはれてゐる。一度この味に親しむと一生忘れることができない程である。しかしその特有の臭氣は慣れない旅行者を辟易させることがあるが、一度それになれると、この臭氣があるがため一層好むやうになる。

ノンコ――(三頁下向かつて左圖參照)バラミツともいひ、印度の原産であつて、印度では古くから栽培された果樹である。高さ十メートルばかりの常綠の木に、大きな圓筒狀の實が生る。實の大きなものは、長さ六十センチメートルほどになる。實味するのは種子を包んでゐる果肉であつて、甘味が強く、特有の香がある。生で食

べるほか、砂糖漬にしたり、乾燥したりする。住民は未熟のものを野菜としても食してゐる。

パイナップル――パイナップルは熱帶アメリカの原產で、アメリカ大陸と交通が始るとすぐに各地に廣がり、今は熱帶の到る所に栽培されてゐる。丈夫な劍狀の葉を地下莖から叢生し、高さ一メートルに足らぬ低い多年生の草である。株の中心に一つの頭大の實が生る。實は松かさのやうな形をしてゐる。汁が多く甘味酸味の調和がよく、芳香がある。生のままでも、または罐詰としても美味である。

ザボン――柑橘類であつて、內地でも暖い地方では作つてゐるが、印度支那が原產である。タイ、南支等に多く作られる。木はみかんに似てゐるが、葉はこれより大きい。實は甚だ大きく、頭ほどあり、黃色である。實の皮は甚だ厚く、皮の內側は眞白で、フェルトのやうに軟い。この部分の紅紫色を帶びたものをうちむらさきと呼んでゐる。たべる部分は夏みかんくらゐで、夏みかんやみかんよりは甘味が上品である。ザボンの名はポルトガル語 Zamboa から轉じたものである。

パパイヤ――メキシコから持つて來た熱帶に普通の果樹である。幹は、大きなものでは十メートルに達するものもある。枝分れをしないで、すぼつと立ち、頂上からやつでのやうに柄の長い掌狀の葉を叢生する。葉の近くに、かぼちやほどの實が幹に引つ掛けられたやうにたくさんつくのである。下の方からだんだんに熟すので、熟したのから食べて行くと一年中食べられる。果肉は美しい黃色で、みづみづしい。香も味も捨てがたいものがある。

ジャワ更紗――一頁上圖參照。

二　ビスマルク諸島

ジャワの風物に親しみを持たせたと同じやうに、ビスマルク諸島への關心を深めるため、ビスマルク諸島中のニューアイルランド島とニューブリテンとの風物を紀行風に敍したものである。

ニューアイルランド島――わが南洋のトラック島から南方三日行程のところにある島である。そこには、南洋特有の樹木や、鳥や、果物などがあつて、南洋らしい風景を展開してゐることが書かれてある。またこの島の住民はパプア族で、その性情を說明し、日本軍に心服してゐる狀態も

書かれてある。

ビスマルク諸島――（七頁地圖參照）もとニューブリテンの諸島と呼び、一八八四年ドイツ領となり、翌年ビスマルク諸島と改名された。南部にあるニューブリテン島が最大で、その他百餘の島群があり、總面積四萬三百二十六方キロ、人口十二萬である。各島嶼は火山島もしくは珊瑚島より成り、火山島は何れも土地が高峻で、海拔二千メートル以上に達するものがある。産物にはコプラ・ココ椰子・纖維棉花・コーヒー・ゴム等がある。

ニューアイルランド島――（七頁地圖參照）ビスマルク諸島中にあつて、島形が極めて細長い。山脈は島嶼に從つて走り、南東部が特に高く、火山脈が通じ、活火山を有し、ハル山（二、一五〇メートル）を最高點とする。平野は東岸に連なつてゐる。土地が比較的豐沃で、ココ椰子の産が多い。

トラック島――（七頁地圖參照）わが南洋群島に屬し、トラック支廳の管轄下にある。一大環礁に圍まれ、數多の小島が環礁内に羅列し、總面積三十一方キロ餘ある。住人は殆どカナカ族である。

鳳凰木――元はマダガスカル島から出たものだが、熱帶各地の並木として植ゑられてゐる。ねむのきに似た落葉喬木で、六七月ごろ緋色の大きな花が咲いた時には、遠くから望むと焰の森のやうに眺められる。

佛桑華――美しい花の咲く樹で、熱帶地方のどこにも見られるものである。花の形はふようかむくげに似てゐる。濃厚な緋色の花は熱帶の趣をよく表してゐる。花の色にも形にもいろいろ變つたものがある。佛桑華は、旅する人に特に印象が深いもののやうである。

レモン――柑橘類であり、果實は鮮やかな黄色で、上下の兩端が突き出してゐる。香がよいので特に賞味される。この實の皮を搾つてレモン油をとつてゐる。

パプア族――（八頁寫眞參照）ニューギネヤ・ソロモン諸島・ニューブリテン・ニューアイルランド・ニューヘブリデス・ニューカレドニヤ・フイジー諸島等に居住する種族で、毛髪は長く、黒色で、皮膚は黒味がかつたチョコレート色乃至煤褐色で、身長は中位である。

ニューブリテン島――ニューアイルランド島から半日も南へ航海を續けると、この島に達する。文は、兒童を船に乘せて、ビスマルク諸島の代表的な島巡りをするやうに描かれてゐる。

この島の最大の港ラバウルのやうすを描くことによつて、ニューブリテン島を代表させてゐる。漠然と島全體の樣相を描いたニューアイルランド島の描き方とは異なり、ラバウルを中心に詳細に筆を費すことによつて、自ら描き方の變化を見せてゐる。と同時にラバウルが今次大戰に於いて重要な意義を有する地點であるがため、特にその有樣を兒童に強く印象させる意味も含でゐるのである。

ニューブリテン島――ビスマルク諸島中最大の島で、ほぼ三日月形を呈し、面積は屬島を合はせて三萬七千八十方キロに及ぶ。山脈が島軸に從つて延長し、火山帶がその內側に通じて數多の活火山が峙つてゐる。最高度はファサー山(二三〇〇メートル)で、盛に活動してゐる。住民は八萬二千パプア族とその雜種が主である。

ラバウル――十頁の寫眞はその市街である。

パンの實――(十二頁上圖參照)パンノキの實をいふ。樹は勢が盛んで、十數メートルの高さになり、表面が濃綠色をした雄大な葉を茂らせ、熱帶各地にあつて、涼しい日蔭を作つてゐる。頭大の實には一面に瘤があり、熟すと黃色になる。實は澱粉に

富んでゐて、まだ肉の白いうちに取つて切り、燒いて塩やバタで味をつけてたべる。原住民のたべものとして大切であるが、うまいものとはいへないらしい。

タロいも――(十二頁下圖參照)里いもに似た植物で、地下にできたいもには澱粉を含み、住民はこれを取つて常食としてゐる。

三　セレベスのゐなか

ジャワ・ビスマルク諸島に親しみを持たせて來た兒童を更にセレベスのゐなかへ案內して、その風物に接しさせようとするものである。

赤道を越えた南半球のセレベスのゐなかに、却つて日本に近い風物を發見しながらも、セレベス特有の情景に好奇の眼を見張り、このやうすを走馬燈のやうに寫し出してゐる。卽ち(一)ではケンダリを中心にそれを描き、(二)では、セレベスのゐなかの自然の中に生育する植物を、(三)では、珍しい動物や鳥類を、(四)では夜の情景を寫し出してゐる。

椰子――熱帶の風景に特色を與へてゐる植物といへば、椰子を第一に擧げなければ、

ならない。椰子は樹の姿が特異であり、また熱帶の到る所に生えてゐる。椰子には、いろいろな種類があつて總數千を下らない程である。中でもココ椰子は最も有用で昔から各地に移植保護され、本來の產地は明らかでない程廣く廣がつてゐる。南方の諸島・マライ・印度等の海岸に近い土地に特に多く、大森林を作つてゐる。幹は直立して、伸びれば三十メートルにも達し、枝を出さず、頂上に叢生した雄大な羽形の葉を風に搖がしてゐる。葉の近くに頭大の實をつける。實の未熟なうちに取つて孔をあけて傾けると、無色透明な汁が一リットル以上も流れ出て來る。この液には砂糖や種々の塩類を含み、味が爽快である。實が熟するにつれて、液が濁つて飲めなくなり、だんだん固くなつて、脂に富んだ白い胚乳になる。この胚乳を搾つて油を取り食用・燈用にする。この油の純粹なものは無臭で、オリーブ油の代用になる。また胚乳を刻んで乾かしたものはコプラと稱し、油脂原料として大切である。これより石鹸・グリセリンを製造する。幹は建築材・器具材となり、葉は屋根を葺き蓆を織り、帆や籠を作る等この木のどの部分も棄てる所はない。

マングローブ――(十四頁下圖參照)南洋諸島の海岸は潮汐の干滿の差甚しく、干潮の時には、淺い泥海が廣い面積を占める所がある。このやうな海岸には、水中に澤山

の氣根を下すヒルギ類が密林を作つてゐる。この特殊な海岸の林をマングローブといふ。ヒルギ類は胎生植物で、實がまだ枝から離れないうちに、種が發芽して、幼い根が伸び、數十センチメートル垂れさがつてゐる。これが落ちると、泥中に根がつきささつて成長を續ける。根は泥土の中にあるため、處々が瘤のやうに盛りあがつて、泥から顏を出し空氣を吸つてゐる。それでこれを呼吸根といふ。泥の中から筍のやうな呼吸根がたくさん出て、上から氣根が下つて泥中に根をおろし、その間にしばしば鰐や蛇が横行してゐるのがマングローブの風景である。

ニッパ椰子――(十六頁上圖參照)マライ・印度地方の海邊の沼澤地に產し、幹がなく、長い羽型の葉が地面から直ちに出てゐる。葉の長さは五メートルにもなる。その姿は、或種の羊齒を大きくしたやうなものである。

サゴ椰子――(十六頁向かつて右圖參照)サゴ椰子は一處に叢生して、丈高く葉が茂り、全體が小椰子林のやうになつてゐる。マライ群島の產で、莖をつぶして澱粉を取るために多く栽培されてゐる。

びんらう――(十六頁向かつて左圖參照)熱帶アジヤに廣く分布してゐる椰子の一種があつて、古くから栽培されてゐる。直徑二十センチメートルぐらゐの幹が、十

數メートルの高さに直立する。幹にはたくさんの環紋があり、竹のやうな色つやをしてゐる。材は建築や器具の製作に、葉は屋根葺きやうちはなどを作るに用ひる。住民はびんらうの未熟な實を割つて貝灰を塗り、蔓植物の葉で包んで咬む風習を持つてゐる。

四・サラワクの印象

ボルネオのサラワクの印象を記して教材としたもので、〔一〕に於いては、クチンを中心に風物や、華僑のことや、街頭のことを描き、サラワク特有のオランウータンのことが書かれてゐる。〔二〕では、住宅を中心にその周圍のやうすを最初に書き、雨季に於けるスコールや、雷鳴のことなどに筆を費してゐる。〔三〕では、主としてその住民のダイヤ族の習俗や、その住宅の模樣や、特に女が勤勉であり、水浴の習慣を有してゐることなどを描き、最後にマライ人の女たちの習俗を紹介して、兒童にサラワクの人情風俗などを印象づけようとしてゐる。

サラワク――ボルネオ島の北部で、皇軍の占領以前英領であつたところである。北ボルネオ・ブルネー・サラワクの三州に分れてゐたが、今日ではすべて北ボルネオと稱せられることになつた。サラワクは北ボルネオの最南部を占め、面積は約十二萬九千方キロ、人口はよく分らないが約六十萬と推算されてゐる。肥沃な耕地もあつてサゴ・胡椒・ゴム・石油等を主要輸出品とし、石炭の産もある。

クチン――（十九頁寫眞參照）クチンはサラワクの首府で、サラワク川畔に位し、海岸から二三哩の内部にある。

オラシウータン――（二十一頁寫眞參照）猩々とも稱し、ボルネオ島産の類人猿である。腕が非常に長く、後足も細長い。毛は短く、耳は小さく、顏は長い。毛は赤茶色である。原始林に棲み、半直立の姿勢で歩き、果實・若芽等を食べてゐる。チンパンジー（黑猩々）には劣るが、仕込むといろいろな藝を巧みにさせることができる。

ダイヤ族――（二十四頁寫眞參照）ボルネオの住民（マライ種族）で、その大部分を占めてゐる。身體は割合ひに小さく、顏と鼻は廣く、耳朶は長い。常に裸體で腰部に布を纏ひ、下半身にサロンを穿ち、槍刀を帶びてゐる。

海岸に住むものと、山地に住むものとの二種があつて、近隣の他種族の血の混つ

たものが多い。山地にすむダイヤ族は、海岸を見棄てて奥地へ奥地へと侵入して行つたものである。その名稱は首狩の惡習に因んで附せられたもので、ダイヤ族の若者は敵の首を取つて來ない間は一人前の大人となることはできず、その家庭では、この首が唯一の誇りであり裝飾なのである。しかしこの習慣さへ除けば、かれらは實に正直者である。怠け者でもなく、またあまり不潔でもない。皮膚の色も、マライ人ほど黑くはない。首狩の惡習も、文明の浸透とともにだんだん衰へて來た。海岸に住むダイヤ族も、かつては海上の掠奪をこととしてゐたが、今はそれも下火になつてだんだん馴化されて來た。

新出讀替文字一覽表

〔云傷ニ――ヲ附シタ―モノハ讀替文字〕

課	頁	行	新出讀替文字
一	四	八	碎(クダ)け
	五	六	松花(ショウ)江
	六	一	暗黑色(アンコクショク)
二	七	二	氷塊(クワイ)
		八	黑竹(チク)
	八	八	豫(ヨ)科
		九	縱橫(ジユウワウ)
	九	一	大粒(リツ)
		三	一軒(ケン)
二	一〇	四	御軍裝(ソウ)
	一一	五	御答禮(タウ)
		七	御宿舍(シユク)　粗末(ソ)
	一三	七	浴(コク)す
	一四	一	彼我(ヒガ)
		二	御指(シ)導
		八	護(マモ)り
	一五	四	唱(トナ)へ
	一六	四	御慈愛(ジ)

良不開き

三

一八 一 袖（フジ）

一九 三 仕（フカマツ）り

六 控（ヒカ）へ

八 必殺（ナツ）逆（サカ）さま

一〇 矢面（オモテ）

二〇 八 思案（シ）

二一 四 二言（コト）

二二 二 堅陣（ケン）

七 皇化（クワ）い

二四 五 類（クルヒ）

一〇 祈念（キ）

四

二六 二 述（ノ）べ

二 謙遜（ケンソン）

四

二七 一 故（ユエ）

二八 一 敬（ウヤマ）ふ

三 祝賀式（シュクガシキ）

三〇 九 混用（コン）

三一 一 柔弱（ジウジャク）

四 適正（テキ）

一〇 至誠（シセイ）

三三 二 夢（ユメ）

五

一〇 偉大（イ）

六

三六 一 天才（オイ）

三九 一 扇（アフギ）

一〇 八 雀（スズメ）

六

四一 二 夢中 佛（ホトケ）（仏）様

八 一 御参内（ダイ）

四六 一 御（ゴ）

四八 九 雑誌（シ）

五一 七 擧（アガ）げ

八 八 經（ヘ）て

五三 二 此（コ）の

八 八 玉（タマ）り

五四 四 算（サン）逃（ノガ）れ

五 八 損害（ソンガイ）

五五 六 包囲（ハウイ）

九 降服（カウフク）

一 幕僚（バクリヤウ）

八

五六 一〇 我（ワレ）ガ 如キ 敵ノ

五七 一 所（トコロ）

九

五八 三 紺地（コン）

五 熊（クマ）

五九 三 居住（キヨ）

六〇 二 免（マヌカ）る

九 滅（カホロ）ぼす

六一 六 武略（ブリヤク）

良不き開

九	六三	二	遙か
	六四	七	幸ひ
	六五	四	阪東
	六六	六	手綱
一〇	六九	一	限り
		六	天地
	七〇	二	濃き
一一			
	七〇	七	卷雲
		八	結晶
	七一	二、	天女
	七一	七	絹
	七二	八	惡變 兆
	七三	一	塊
一一	七三	三	群羊
		八	曇り
	七五	三	陰氣
		七	層雲
	七六	七	俳句
	七七	四	女性的
一二	七八	六	薄明
		八〇	三	綠色
		六	鋭さ
		七	混つて
		八	山鳩
		一〇	針葉樹林
一三	八一		
	八二	六	登る

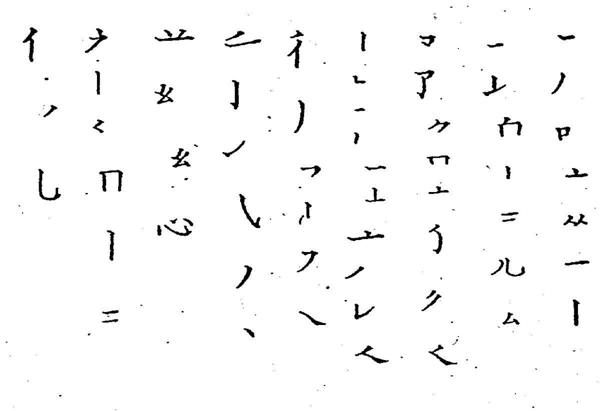
一三	八二	八	溫泉
	八四	五	溫泉宿
	八五	五	悲鳴
	八六	一	快く
	八八	一	霧
		五	舞當
	九〇	三	頂上
	九二	三	深紅
	九三	五	景色
		八	紫紺
		九	莊嚴
	九四	七	興奮
	九五	四	界
一三	九五	六	移秋
	九七	七	下旬
	九八	三	根據地
	九九	四	濃霧
一四			
		五	沿岸
		一〇	紅ます
	一〇一	七	漁獲 滿載
一五	一〇二	七	子守
	一〇三	一	童
	一〇四	八	龍卷
	一〇五	三	富
一六	一〇六	六	戶外
	一〇七	二	家賃

課	頁	行	文字
一六	一〇九	四	樂譜(フ)
		七	盲人(マウ)
	一一〇	一	異様(イヤウ)
	一一二	一〇	奇怪(キクワイ)
	一一四	三	不朽(キウ)
一七	一一五	九	收穫(クワク) 同封(フウ)
	一一七	ア	摘(ツ)んで
一八	一二一	二	擴聲器(クワク)
		三	偶然(グウ)
	一二二	二	偵察(テイ)
二〇	一二七	三	記憶力(オク) 非凡(ボン)
		四	古記録(ロク)
	一二八	二	心魂(コン)
二〇	一二九	八	不便(ベン)
二〇	一三〇	九	三巻(クワン)
	一三一	四	御事蹟(セキ) 識せ
二一	一三二	三	榮(サカ)ゆ
		八	素朴(ボク)
	一三三	五	優美(イウ)
		八	箱根路(ヂ)
	一三四	五	輝(カガヤ)いて
		七	江戸(エ)
		八	發揚(ヤウ)
	一三五	二	元旦(タン)
		四	聖壽(ジュ)

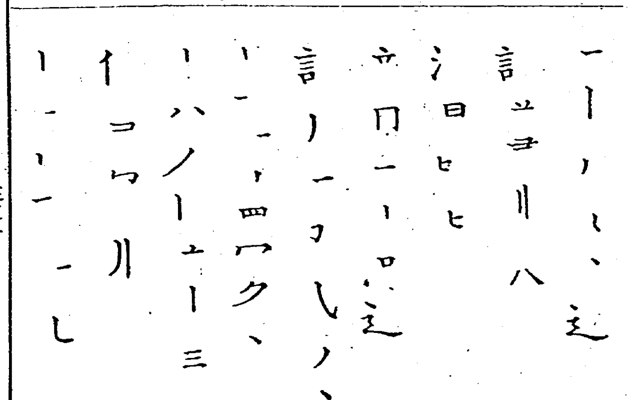
運筆順序

（特に筆順の誤り易いもの、又は二様以上あるものについて、藝能科習字と連絡しできるだけ統一して掲げた。）

碎　塊　豫　裝　彼　我　慈　袖　化



述　謙　混　適　誠　夢　雀　佛　此



紺
遙
濃
晶
兆
羊
曇
層
俳
緑

鳩
樹
登
霧
辨
莊
奮
祕
據
獲

載
龍
譜
奇
穫
封
擴
偶
録
蹟

優
輝
壽

綴り方指導要項

指導の發展段階

第一期　兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。

第二期　兒童の見聞する事象、日常の行動などにづき、見方、考へ方を指導して生活を豐富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。

第三期　文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多樣ならしめ、次第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。

第四期　第三期に準じてこれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語の豐かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

初等科第六學年

一　指導要項

初等科第六學年の綴り方は、ひとまづ整つた形を示すやうになる。「卽ち、取材の範圍は、廣さと深さとに於いて擴充し、見方考へ方は、皇國民としての自覺に立ち、表現は醇正な國語によつて、書かうとする主題を十分意識し、想を整へて書くやうになる。

しかし、兒童の理知情意の發達とともに、ともすると事に卽して具體的に敍述しないで、理窟を並べたり感情を誇張したりして書き、その結果は、概念的類型に陷り、または感傷に流れる傾向を表し始める。隨つて十分に消化してゐないことばや、飾りたてたいひまはしなどを用ひて、文章をわざとらしく作るやうになる。

そればかりでなく、自ら生ずる自己批判の態度から表現の熱意を失つ

たり、また兒童によつては、その好むところに偏して表現が理智情意の一方に走つたりするやうになる。

これらの傾向は、兒童自然の發達に基づく向上欲の現れであつて、これらの欲求を生かし、取材の方面を開拓し、表現の手法を正しく會得させるならば、本學年の綴り方は頗る充實したものとなるであらう。

隨つて、本學年の綴り方指導は、兒童の具體的經驗を尊重し、日常卑近なことでも見方考へ方の角度を變へれば、新しい意味をもつた題材となることをさとらせ、一面國家社會の行事や、できごとに注意させて、取材の範圍を廣く、ゆたかにすることにつとむべきである。また表現については、醇正な國語をもつて、具體的にのびのびと書くことを根幹とし、その間に、文の目的や用途によつて、或ひは說明的に、或ひは敍述的に、或ひは描寫的に表現の手法を指導することによつて、堅實な道を開き、これに誘導することが大切である。

なほ、綴り方と話し方とは、不卽不離の關聯をもつてゐるから、綴り方指導のあらゆる機會に、話し方を修練すべきである。

そのため、毎週の國語の授業時間のうち、約二時間を割いて、綴り方話し方を併せて指導する心構が大切である。

上述の要旨に基づき、左に本學年の指導要項、毎學期の指導要項例、並びに參考文題を掲げて指導の指針とする。

○見方考へ方を廣くゆたかにし、且皇國民としての自覺に立たせるやうにする。

(イ)兒童の實際經驗を尊重し、見方考へ方の角度を多方的にして、題材を取りあげるやうにさせる。

(ロ)國家社會の行事や、できごとなどに關心をもたせ、世の中の動向に注意させる。

(ハ)眞實な心持を表現させることを尊重するとともに、その根柢には常に皇國民たるの自覺に立ち、醇風美俗等を尊び、明朗にして建設的な見方考へ方をさせるやうに導く。

(ニ)兒童各自の特色を發揮させるとともに、學級内の兒童作品及び適當

な參考文例によつて、見方考へ方を多方的に指導することにつとめる。

○表現の手法を指導し、表現を的確ならしめるとともに、表現の興味と自信をもたせることにつとめる。

(イ)文の目的や用途によつて、構想や記述の仕方を考へるやうにさせる。即ち、さまざまな日記や書簡文の書き方をはじめ、説明や、敍述や、描寫等の初歩的手法を指導する。

(ロ)ことばや、ことばづかひや、いひまはしなどは、よく消化した醇正な國語によつて平明に書くやうにさせる。

(ハ)句讀點、鉤改行などは、國語の教科書に準じて、正しく書くことに馴れさせる。

○自分の文は、進んで十分に洗煉させる。

(イ)自分の文は、必ず讀み返して誤字や脱字を正し、句讀點、鉤などに注意させることはもちろん、文のむだなところや、書き足りないところを反省させ、自己批正させる。

(ロ)音讀により、ことばや、ことばづかひの適否を反省させ、自ら批正させる。

(ハ)時には自分で直した文を淨書させることによつて、文を仕上げることの興味を體得させる。

(ニ)參考文例や教師の指導によつて、見方考へ方を豐かにし、同じ題材で更に改作させることもよい。

(ホ)自分の書いた文を他人に讀んで聞かせることは、お話を聞かせるのだといふ心持をもつて、よく人にわかるやうに讀ませ、これによつて、讀むこととともに話し方、聞き方を修練させる。時には、常體口語で書いた文章を敬體口語で話させて、話し方の修練に資する。

二　指導要項例

第一學期

○取材の指導

(イ)日常卑近な經驗でも、見方考へ方の角度を變へ、また表現の仕方を工夫することによつて、新しい題材になることをさとらせる。

(ロ)國家・社會のできごと、世の中の動きなどから題材を取るやうに導く。

○敍述の修練

(イ)日常の生活經驗に就き、場面をよく想ひ起して、時・處・人物・事件などを按排し、筋道の立つた上に、生き生きとした味があるやうに書かせる。

(ロ)時には對話だけで書かせたり、ト書きを入れて劇的に表現させることもよい。

○描寫の修練

(イ)自然界の景色を主題として、文に描き出す手法を修練させる。

(ロ)人物を主題として、その風貌や性格等を具體的に、文に描き出す修練をさせる。

(ハ)事件を敍述する場合にも、背景や、登場人物の行動や、對話を巧みに取り入れて書くことの修練をさせる。

(ニ)常に、その場面に最もふさはしいことばで書くことに留意させる。

(ホ)韻文や、和歌や、俳句などの心持をよく想像させて、これ等の作品の境地をくはしく描き出させる。

(ハ)修身・國語・國史その他の教科・科目に於いて學習した教材を、劇として表現させる。

○感想や意見の發表

(イ)日常の實際經驗や、見聞したことや、他の教科・科目で學習したことに就いて、自分の感想や意見を述べさせる。

(ロ)感想や意見は、抽象的な理窟にならないやうに、具體的な事柄に卽して述べさせる。

(ハ)感想や意見は、兒童の眞實な心持を尊重するのであるが、根柢には少國民としての自覺が、おのづからにじみ出るやうに導く。

○書簡文

(イ)相手に應じ、目的や用途に應じるやうに、手紙や、はがきを書く修練をさせる。
(ロ)文章を書くばかりでなく、便箋やはがきの認め方、日附差出人宛名などを正しく書くやうにさせ、實際に役立つまでに指導する。

○用語・用字・符號

(イ)つとめて、醇正な國語によつて記述するやうにする。
(ロ)事に卽し物に卽して、適切妥當なことばや、いひ表しをすることに努力させる。
(ハ)句讀點・鉤・改行など、記述の形式は、國語の教科書に準じるやうに習熟させる。

○推敲の修練

(イ)自分の文は、いくたびも讀み返して誤字や脫字を正し、句讀點や鉤に注意する習慣をつけさせる。
(ロ)各自音讀して、ことばや、ことばづかひや、いひ表し方を正しくさせる。
(ハ)書き足りないところや、むだなところがないかを反省して、文を十分に仕上げるやうに導く。

○話し方の修練

(イ)綴り方の朗讀にあたつては、心持を傳へるのだといふ心構をもつて、發音を正しくし、强弱・緩急に留意させる。
(ロ)時には、常體口語で書いた文を、敬體口語で話すやうにさせる。
(ハ)他人の朗讀する綴り方をよく聞いて、何が書いてあるかを捉らへ、また、それについての感想を述べさせるなどして、話し方聞き方の修練につとめる。

第二學期

○研究發表

(イ)見學したこと、調査したこと、などを題材にして書かせる。
(ロ)何について、どんな風に研究し、どんな研究ができたかが、よくわかる

やうに説明させる。またその間に、感想や意見をも取り入れて書かせる。

○自然鑑賞

(イ)自然界の風物や、自然界の移りかはりなどを、よく調べ、眺め、味はつて書かせる。

(ロ)普通の散文はもちろん、詩や、和歌や、俳句などを書かせる。

(ハ)實際の風物や、實際の感じを書き表すことにつとめさせ、わざとらしく誇張しないやうに注意する。

○勞作作業を題材にした敍述

(イ)勞作作業について、仕事の順序や、作つた物の説明を正確に書かせる。

(ロ)事實の記載にとどまらず、働く時の氣持や、感想を書かせ、働くことの意義やよろこびなどをも書かせる。

○書簡文以下の項については第一學期に準じて指導する。

第三學期

○各種の表現

(イ)題材に即して、散文・韻文・和歌・俳句・書簡・日記等の表現を修練させる。

(ロ)いづれの表現をとるにしても、形式に捉らはれず、心持を生かして表すやうに導く。

○長篇文の指導

(イ)一つの題材に就いて、心ゆくまでくはしく書かせる。

(ロ)小さい時の思ひ出や、在學六年間の思ひ出を題材として、小見出しを作り、順序よくくはしく書かせ、表現力を修練するとともに、成長のあとを眺めさせ、父母・教師・友人など、また學校・社會・國家に對する感謝の念を深める。

○書簡文以下の項については第一學期に準じて指導する。

三　參考文題

（次に掲げた文題は指導上の參考に供するものである。これを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。）

第一學期

四月

私　六年生になつたよろこびの中に、學校に於ける責任や、更に少國民として、また自分の家の一員として自分自身のことを考へさせ、自覺と決心を述べさせる。

春　このごろの風物を觀察し、鑑賞したことに心持を織りませて書き表す。詩や、和歌や、俳句などに表現させることもよい。

學習に對する感想　修身、國語、國史、地理などで學習した人物や事件について感想を述べさせる。

五月

五月の自然　五月の自然物、自然現象について、研究したことや心持を書かせる。

父母の恩　父母をはじめ、家族の人々の恩を深く感じたことについて書かせる。

和歌を散文に　讀み方で學習した和歌、または自分の知つてゐる和歌を選んで、その歌の境地を散文に書かせる。

六月

私の健康法　自分の身體のやうすを述べ、健康上どんな注意をしてゐるかを書かせる。

梅雨晴れ　梅雨の晴れ間のすがすがしい景物と心持を書き出させる。

研究發表　韻文や、和歌、または俳句に作らせることもよい。自然物、自然現象、歴史上の事件などについて、自ら研究し調査したことを記述させる。

七月

夏の朝　夏の朝のすがすがしい心持を、自分の住む環境に即して記述させる。詩や、和歌や、俳句に書かせることもよい。

手紙　戰地の兵隊さん、傷病兵の方々、その他任意に相手を選んで手紙を書かせる。

海國日本

（海の記念日に因んで、學習事項や、各自の體驗や、見聞等を織りませて、海國日本の國民としての自覺と決心を書かせる。）

第二學期

九月

研究發表

（夏休中に研究したこと、製作したことなどについて、その過程や結果を記述させる。）

俳句を散文に

（いくつかの俳句を選んで、その境地をよく想像して散文に書かせる。）

飛行機

（航空記念日に因んで、飛行機滑空機に關すること、防空に關することについて自由に記述させる。防空に關係してゐる人人に對するお禮の手紙を書かせるのもよい。）

十月

學習したことを劇に

（修身・國語・國史等で學習した人物や事件を、劇の形として表記させる。）

秋

（秋の景色、秋の行事などから、各自が自由に題材を選んで、のびのびと書かせる。）

わが尊敬する人

（各自の尊敬する人物について、どんな點をえらいと思つてゐるか、それについてどんなに考へてゐるかを記述させる。）

十一月

働いた日の日記

（家事の手傳ひ、學校の作業などで働いた日の日記を、感想を入れてくはしく書かせる。）

讀書の感想

（このごろ讀んだ本のことや、映畫で見たこと、その他聞いた話などの中で、深く感じたことについて記述させる。）

晩秋

（晩秋から初冬にかけての景色と心持を書かせる。詩や、和歌や、俳句に書かせることもよい。）

十二月

大詔奉戴日

（大詔奉戴日に際し、各自の感想を述べさせ、大東亞建設の決心を固めさせる。）

皇軍慰問の文

（戰地の兵隊さんや傷病兵の方々に對する慰問の手紙。）

年の暮

（年の暮の町や村のやうすを書かせる。今年あつた主なことの思ひ出を整理して書かせるのもよい。）

第三學期

一月

新年を迎へて

（新年を迎へた感想を述べさせ、少國民としての覺悟を固めさせる。）

冬の遊び

（寒さと戰ふ冬の遊びについて、感想文を交へてくはしく書かせる。）

世の中のこと

（最近、身近に起つたできごとについて感想を書かせる。）

二月

私の將來

（進學の方針を定める時機に際し、自分の將來について考へてゐることを細かく書かせる。）

梅

（梅の花、水仙、木や草の芽など、春のさきがけをしてゐる草木について細かく觀察したことを書かせる。詩や、和歌や、俳句などを書かせることもよい。）

研究發表

（讀物や、實際の調査によつて研究したことについて書かせる。）

三月

春を待つ

（早春の景物について觀察したことを書かせ、春を待つ心を書かせる。詩や和歌や俳句に書かせることもよい。）

六年間の思ひ出

（初等科六年間の思ひ出を、學年を追うてくはしく書かせ、先生や、父母や、友だちや、小使さんなどの恩を思ひ、自分の將來に對する決心を述べさせる。）

話し方指導要項

指導の發展段階

第一期

兒童と話をするあらゆる機會に留意して、はつきりと落ち着いてものをいふやうに導き、「ヨミカタ」で得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。また人の話を注意して聞くやうに仕向ける。

第二期

兒童の見たこと、聞いたことなどについて、順序だてていへるやうにし、ことばづかひやいひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聞く態度を養ふ。

第三期

自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

第四期

同じ話でも、相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、また男女によつてことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。

なほ、話をしたり、聞いたりするときには、相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心構を養ふ。

初等科第五・六學年

指導要項

初等科第五・六學年の話し方指導は、他科目他教科の指導と同樣、指導の發展段階に於いて、第四學年の後を受け、いよいよ第三期の指導を擴充完成すべき段階にはいつたのである。第五學年と第六學年との指導には多少程度の差はあつても、指導目標はだいたい同じであるから、兩學年を通じた指導要項を示すことにする。

第三期に於ける話し方指導は、指導の發展段階にも示したやうに、自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じて、それぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふことに重點を置くべきである。しかも、讀み方教材に於いても、「ことばと文字」「漢字の音と訓」「敬語の使ひ方」「國語の力」などの課で說いてゐるやうに、ことばや、ことばづかひなどについて、自覺させながら指導すべき時機になつてゐるのである。

故に、第五・六學年の話し方指導に於いては、廣く國民の實際生活の上に行はれる話し方のあらゆる場合を考へ、醇正な國語によつて、相手と場合と、話題に最もふさはしく話ができるやうに習熟させることが大切である。

そのため國語の毎週の授業時間のうち約二時間を割いて綴り方と話し方にあて、話し方の基礎的修練を行ふことに努力すべきである。

以上の要旨に基づき、左記要項によつて、第五・六學年の話し方を指導する。

(一) 話し方は、綴り方と緊密な關聯のもとに、話しことばを指導し、且これを醇正ならしめるやうに修練させる。

(1) 綴らうとする題材について話合をさせ、想をゆたかにするとともに、言語發表の修練をさせる。

(2) 綴り方に於いては、文の目的や用途によつて的確に書くやうに指導するのであるから、話し方に於いても、それと同じやうな心掛が大切なことをさとらせ、話す事柄や、ことばづかひなどに注意して、特に要領よく話すことができるやうに導くことにつとめる。

(3)綴り方の朗讀は、まとまつた話をする修練の機會と考へさせ、はつきりと話をする心持で讀むやうに導き、言語發表の修練に資する。なほ常體口語で書いた文を敬體口語で發表させる。

(4)綴り方の朗讀を聞く場合には、どんな事柄が、どう表してあるかに注意して聞くやうに仕向け、文の要點や、ことばづかひの適否について發表させる。特に長い文を聞く時には、極めて簡單に要點を書きつけながら聞く修練をさせる。

(5)人物描寫や、背景描寫に對話を取り入れるにあたつては、その人物や、場合にふさはしい對話を取り入れさせてもよいが、方言による對話を取り入れる場合には、それが方言であることを、よく自覺して話すやうにさせる。

(二)話し方は、讀み方と緊密な關聯のもとに指導する。そのために、特に左のことに留意して取扱ふやうにする。

(1)讀み方教材に親しませ、正しく讀むことに馴れさせて、その場その場に於けることばづかひや、いひまはしの心持を讀みぶりの上にも表すやうに導く。

(2)國語教材の程度が高くなるにつれ、おのづから文章のことばと、話すことばとの間に隔たりがあることをさとらせ、言語發表の場合には、すなほな話しことばによらせるやうにする。

(3)文語文を口語で話させる場合にも、ぎごちないいひかへに終ることなく、すなほな話しことばでいはせることにつとめる。

(4)問答に於いては問の出し方に注意し、教材のことばや、いひまはしを取り入れて答へさせるやうにする。但しこの際にも、よく消化した話しことばになるやうに留意させる。

(5)國語教材中の對話や、人物の言行について敍した文章には、相手と場合によつて、おのづから、ことばづかひに相違のあることをさとらせ、その使ひ方の修練をさせる。そのために、機會あるごとに國語教材中の適當な部分を捉らへ、相手や場合を變へて、ことばづかひの修練

をさせる。

(6)問答や話合に現れる兒童の誤つた發音・方言・訛音等は、機會あるごとに矯正して醇正な言語に導くやうにつとめる。

(三)他科目・他教科の指導と關聯して、常に言語修練をする。そのため特に左の事項に留意する。

(1)修身・禮法と關聯して、相手と場合に應じたことばづかひ、姿勢・態度等の躾をする。特に、敬語の使ひ方については、相手の地位や、親密の度合や、その他場合に應じて敬讓語・丁寧語の使ひ方に注意すべきことを自覺させて實習する。

(2)體錬作業諸行事等に於いて、機會あるごとに命令の傳達や復誦をさせ、聞き方の修練に資する。

(3)お話會・學藝會等に於いて、他科目・他教科で學習したこと、自分で調べたこと、諸行事で經驗したこと、讀物等を話題として、大勢の前で、筋道を立てて話すことの修練をさせる。

(4)子ども常會・兒童役員會など、座談會の形式を取る機會を設け、あらたまつた心持で、しかも、こだはりなく話合をさせ、その場に適應した話し方の修練をさせる。

(四)話し方の指導は、兒童の生活のあらゆる機會に於いて行ひ、常にその場その場に於ける言語修練に留意する。

(1)方言・訛音の甚だしい地方では、極めて代表的な方言・訛音を表に作成し、常に兒童自ら反省して直させるやうにする。

(2)教室に於ける問答や話合はもとより、教室以外に於ける、ことばづかひについても、常に留意して一般的また個人的に指導することは、全學年を通じて重要なことである。とりわけ教室外のことばづかひは、粗野になりがちであるから、常に注意することが大切である。

(3)話の内容が多くなるにつれ、冗漫な話し方になりがちであるから、順序立てて要點を話すやうに、常に仕向けることが肝要である。

(4)學年が進むにつれ、ややもすれば亂暴なことばづかひになりがちで

K131.8-5-11

あるから教師はつとめて正しいことばを使用して、兒童をして醇正な言語生活に馴れさせることにつとめる。

(5) レコード・ラジオ等の選擇利用その他正しい言語環境をつくることにつとめ、發音や話ぶりなどに關心を持たせ正しいことばに馴れさせる。

(6) 家庭と協力して、日常のことばづかひや、人との應對の態度などを正しく躾けることにつとめる。

(7) 話し上手は聞き上手であることをさとらせ、他の人の發表する話を氣持よく聞く態度を養ひ、その話の要點を的確に捉らへるやう、聞き方の指導に留意する。

昭和十八年四月十三日　印刷
昭和十八年四月十五日　發行

（非賣品）

著作權所有

著作兼發行者　東京市小石川區久堅町百八番地　文部省

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　大橋光吉

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　共同印刷株式會社